葉月の流星

舞夜じょんぬ

その一　出発前のよしなごと

１　しおり作り

　どうしてこの学校って、やたらとクラス旅行が多いのだろう。しかもみなマイクロバスときた。遠距離なんだから、みな素直に汽車を使えばいいのに。そっち の方が景色も楽しめるし、ゆっくり坐れるし、なんてったって酔わない。学校側だって、旅行費が安くなるんだからいいんじゃないだろうか。

　狭いコピー室で次から次へと刷り上った用紙をテーブルに置きながら上総は本条里希（ほんじょうさとき）評議委員長に意見していた。この日はどうしてもコピー機を一人で占拠したくて、登校届を出していた。本条先輩が一緒にいるのは偶然だ。たぶんどこかへ繰り出そうと誘いたがっているんだろう。どうせ夏休み、上総は暇だった。知らん振りして原稿を三十五部ずつ刷り上げた。

「せめて今度の冬の評議委員会合宿は、公共機関を使いましょう。だめですか」
「当たり前だろ、駄目にきまってる。よく計算してみろ。実はマイクロバスの方が安上がりだってこと知らんのか。旅行会社もちゃんとそこのところは計算して くれるんだそうだ。それに考えてみろよ。俺たちみたいな『見た目優等生中悪党連中』が集団で移動してみろ、絶対に修羅場が起こるはずだ」
　本条先輩は絶対、修羅場を作り出しているだけだ。
　どこかの女子に声をかけて悪いことをたくらんでいるに決まっている。
　だめでもともと、言ってみたかっただけ。
　上総はわざとらしくため息をつくと、さっそく大量のコピー紙を一枚一枚折り始めた。端から端まできちんとたたんで。合計枚近く六百枚弱。ページ数二十 ページ。本当だったら同じ評議委員相棒の清坂美里に手伝ってもらうのが筋なのだが、どうもそんな気になれない。　美里だってそうとう女子の取りまとめで忙しいはずだ。
　本条先輩が一枚摘み上げ、ふわっと両手の上に置き目を通し始めた。
「なんだ、こりゃ」
「うちのクラスで作った、しおりです。俗にいう『歌集』って奴ですか」
「渋いもの作るねえ」
「うちの担任の趣味です。最初の注意事項およびバスの席順以外は、他の連中がみんなこさえてくれたもんですから。とりあえずあとは金具で留めて、明日中に 全員に配って。口頭で注意事項を説明して、それで終りです」　バス、およびホテル部屋の席順決めはすでに決まっていた。上総が面倒を見なくてはならないの は男子だけ。助かった。二年Ｄ組の男子はあまりうるさいことを言わないし、上総も大体長い付き合いだから、呼吸は飲み込んでいる。ただ、やはり評議委員と しての特権を利用してバス運転手後ろ、先頭右側の窓際席に自分の席を取った。

　ちなみに清坂美里（きよさかみさと）は相対、左側先頭の窓際だ。
　上総の隣は当然羽飛貴史（はとばたかし）。美里の隣は古川こずえ。
　いつもながら分かりやすい席だった。
　一年時の席とほぼ変わらないではないか。
　問題は、その間に菱本先生がいるということだ。
　通路のど真ん中に、補助席を敷いて坐りたいとのたまう菱本先生をさすがに蹴るわけにはいかなかった。あれでも一応、二年Ｄ組の担任だ。評議委員としてはうやまわないわけにはいかない。
　とにかく上総としては『絶対窓際』『車に酔わない』という最大条件をクリアしていればあとは問題なかった。多少のマイナス条件は覚悟していた。

「お前のクラスもずいぶん大変なんだろ？」
　同情する目で本条委員長は上総を見た。
「男子はともかく、女子ってやたら仲良しがどうだとか、誰々がいいとか、いうだろ。俺のクラスも相当なもんだけどな」
「女子は清坂氏に全部まかせました」
　きっぱり、上総は答えた。
「お前、彼女に対するその言い方、いまだに変わってないな」
「当たり前でしょう。何が変わるっていうんですか」
「もう、まる一ヶ月経ったっていうのに、全然あっちの方は進んでないみたいだしなあ」
　この言い方、本当に腹が立つ。
　意地でもポーカーフェイスを装うことを決意した。
「はい、俺は本条先輩と違いますから」

　「青潟大学附属中学二年Ｄ組・旅のしおり」は、三十五部、そろそろ出来上がる頃だった。コピー機を使っている間は、枚数の多さにつくづくめまいを感じた ものの結局、本条先輩が半分以上手伝ってくれた。空き教室でしばらくホチキスを使い、完成させてクラスのロッカーにしまいこんだ。こんなものを盗む奴なん ていないだろう。出発当日に持ち出して配ればいいだけのこと。
「全く、立村もずいぶん細かいこと書いているなあ。規則魔って言われるぞ」
「いえ、うちの担任がうるさいだけです。でも後半はほとんど俺のオリジナルですから」
「なになに？　『クラス全員、エチケット袋（気分が悪くなった時に使うビニール袋）と空いたペットボトル、大判のタオルは必ず用意すること』って。そんなことまで書く必要あるのか？
　いや、その前に質問として、なんだ？　ペットボトルって」
　気付かないのか、本条さん。
　上総は答えるのをためらった。
「おい、言いたそうなその目、続けろよ」

「本条先輩は修学旅行の時、それのお世話にならなかったんですか」
「俺は乗り物に強いからそんなことはなかった。でも必要最小限のものは用意しておいた。それよりもむしろ、休憩時間の間にみな、いったん外に出て乗り物酔いのクスリを用意しろとか、トイレにはきちんと行っておけとか、そういうことを優先しておいた」
「近い、本条先輩」
「あ？　てことは、おい、まさか立村、ペットボトルって・・・」
「単刀直入に言ってしまうと、簡易トイレの代わりです。できれば紙袋か何かに入れて突っ込んでおけばベストでしょう。そんなの使うことなんてないとは思い ますが、万が一ってことは考えられますしね。で、タオルで膝をおおう感じにしておけば、そっちの修羅場からは逃れられるでしょう」
「あのなあ、立村」
　本条先輩は上総の頭を思いっきりぐりぐりと撫で回した。
「そういう知恵、どこでつけた？」
「本条先輩は、バスの中で修羅場にあったことはないんですか」
「お前はあるのかよ」
　言いたくないが、答えるしかなかった。
「いつ、しくじってもおかしくない状況には追い込まれてましたけれど、幸い、この年までないですよ。ちなみに本条先輩、どうなんですか」
　深い意味はなかったのだけれども、本条先輩の手は頭の上でぱたっと止まった。
　答えを探しているようだ。

２　ふたりっきりとみつどもえ

　青潟大学附属中学の二年次には、毎年クラスごとで二泊三日のちょっとした小旅行が行われる。通称『宿泊研修』と呼ばれている。一年は四月、二年は五月初 旬と八月末、三年は六月。こちらは「修学旅行」と名前が変わり、五泊六日の長丁場となる。　クラスごとの旅行だから、日程もまた別々だ。確かＣ組は、七月の頭、夏休みを利用したときいている。しかし自分らのクラスＤ組では、「涼しくなった頃に しようよ」という意見が圧倒的だったこともあり、あっさり八月二十六、七、八日の３日間を指定した。
　評議委員である立村上総、清坂美里に行き先はゆだねられていた。
　あまり遠くないところを希望する上総だったが、美里の方から、
「やっぱり、せっかく二日も泊るんだもの、思い切って遠くにしようよ」
　と押し切られた。
「でもさ、マイクロバスを使うんだぞ。俺、体力持たないって」
「何言ってるの。立村くんがひ弱すぎるだけなのよ。少し鍛えなくちゃだめよ」
　強く言えず、黄葉町に決定した。
　名前の通り紅葉美しく、自然も豊か。それなりに観光施設も整っている。温泉もそれぞれ泊る

所に蛇口から出るようになっているそうだ。古い和洋折衷の街並 みが残っている町で、二日三日観光するにはうってつけの場所だった。名称・黄葉山と呼ばれる丘もあり、そこではちょっとしたハイキング気分も味わえるとい う。いかんせん美里の趣味にはぴったり合ってしまったようだ。八月末ということもあり、旅行客はそういない。学生旅行の割引も効く。
　ただ問題は青潟からバスで五時間という、距離の面だった。
　汽車が通っていないわけではないのだけれども、地元の交通機関だとかなり高くつくのだそうだ。
　計算が得意な美里は電卓を叩いて数字だけを上総に見せた。次にマイクロバス一台分の代金を計算した。想像以上の差額に、言うことを聞くしかなかったというのが、実情だった。

「八月末なのに、黄葉市は結構寒いって聞くよ。もしかしたら、紅葉が見られるかもね」
「どうせだったらみんな自由行動にしてほしいよな。それはだめなんだろ。菱本先生が許さないんだろ」
　上総が一番頭に来ているのはそこだった。
　本当だったら、各班ごとに分かれて好き勝手なところを歩くのが楽しいと思う。女子男子関係なく仲のいい同士が集まれればそれがベスト。でも、別に今の班同士でも全く問題はない。　なあに、南雲秋世（なぐもしゅうせい）がいるので一緒につるんでいればいい。
　だがその案を持ち出したとたん、烈火のごとく怒り狂ったのが菱本先生だった。夏休み直前、ホームルームの時間に、また壇上の上でつるし上げを食った。
「だからお前はいつも、自分のことばかりしか考えていないんだ！　立村、いいかげん他人のことも考えろ！」
　本当に俺は二年Ｄ組の評議をやってていいんだろうか。
　しかも、来年は一応、評議委員長になってしまうんだ。
　この様子だと、菱本先生は絶対に、俺を評議として認めてないよな。
　さらにむかついたのは、結局菱本先生の「全員行動で山登りをし、全員でほのぼのと公園でバレーボールをやろう」という案を、クラス全員が飲んでしまったことだ。　誰か、もう少し意見だせよ、と言いたかった。
　味方になってくれたのが、相棒であり現在『お付き合い』の相手である清坂美里、仲のいい羽飛、南雲、くらいだろうか。
　「なんで俺ばっかりいつもつるし上げくわなくちゃなんないんだよ」
「いいじゃない、どうせみんな坐る場所は別々なんだから。どうして立村くん、そんなにクラス旅行を嫌がるの？」
　深いため息をついて、上総はつぶやいた。
「俺は遠足、修学旅行、みんな熱出して欠席してきたんだ。どういうことかわかるだろ」
「まさか、立村くん」
　美里はゆっくりと、遠慮がちに、
「おねしょがまだ直らないとか？」

「違うって。とにかく前日になると、三十九度くらいの熱がでてうなされて、目が覚めたら出発時刻ってパターンなんだよ」
　本当のことだから堂々と言える。美里も慌てて上総に、両手を合わせて謝ってくれた。
「ごめんね、私の通っていた小学校の修学旅行で、おねしょが直らない人がいて、結局出なかったってことがあったから」「いや、それはたぶん、人によってあると思うな」
　上総は思い出して、また頭を抱えた。
「そうだよ。その問題があったんだよ」
「あの、ねえ、立村くん、別に私、立村くんがもし、まだ直ってなかったって言っても、ね、あの」
　周りをちょこっと見回してから、上総の耳元にささやいた。
「付き合いやめるなんて、言わないから、安心して」
　三回目のため息だ。上総は怒る気力もなく首を振った。
「だから、俺のことじゃないんだって」

　清坂美里に『付き合い』をかけられてからまるまる二ヶ月が経った。
　一週間自分なりに『付き合い』の意味を、貴史、南雲、本条、そして美里に教えてもらい、今では二年Ｄ組の公認カップルとして自然に接しているつもりだった。『立村くん』『清坂氏』と呼び合う間は、特に変わったこともなかった。
　ただ、帰り道ひとりでいると
「あれ、彼女はどうしたの」と声を掛けられたり、また菱本先生に呼び出され、暗に
「男子と女子の感情は違うものだから、気をつけるように」
と説教されむかついたり。
　自分が思ったよりも周りに変化はなかった。
　二年Ｄ組公認カップルの先輩である南雲からは、
「たまには、二人っきりで遊びに行く必要もあるかもしれないよ。もしなんだったら、夏休みにダブルデートしようか」
　と誘われたりした。個人的に南雲ともっと話をしたい気持ちはあったので、ありがたくお断りした後、
「今度俺の家に遊びに来て、思いっきり語り明かそうか」
　と、別のお誘いをした。夏休み中なのに、実現していない約束だ。

　本当は、夏休みもっと、美里と会ってもいいのだろう。
　付き合っている同士なんだから。　でも、身体の調子が許さなかった。もともと上総は身体が弱い。夏になると高熱を出してしょっちゅう倒れる。海辺に出か けるなんてもってのほかだし、泳いだりするのもそう好きじゃなかった。なによりも、真夏だというのに、長袖の羽織が手放せない体質というのにすべての問題 がある。
　ふたりっきりで会えないかわり、羽飛貴史を含めた三人組ではよく集まったものだった。もち

ろん今回のクラス旅行にかこつけて、いろいろな準備やシナリオ 作りなどが中心だった。遠くから来ている子、実家に戻っている子、たくさんいる。そういう人たちにも連絡を取るべく、連絡網を便りに希望を取った。女子と 男子が別々なのはかなり気が楽だった。上総はただ、男子連中への『席の場所希望』と『注意事項』を電話で伝えればいいだけのことだった。
　三日に一度は顔を合わせ、たまに美術館に連れて行かれたりしたものだった。同じ年だというのに、美里も貴史もやたらと絵に詳しかった。上総がぼんやり と、「きれいだ」「つまらない」の二言で片付けてしまうような絵を、ふたりは猛烈なスピードで盛り上がりまくっていた。もちろん難しい絵画用語を使ったり はしない。ただ、
「これを見ていると理科の先生の鼻の穴を思い出すよな」
「この絵は大きくポスターみたいにして、べたべたべたって貼ってみたいよね！」
と、想像を絶するのりでしゃべりつづけていた。後で聞くと、子供の頃からふたりとも美術館で騒ぐのが大好きだったらしい。なんだか迷惑な客なんじゃないか と思いつつも、ふたりの話題を聞いているだけで、上総は面白かった。たとえ半分以上言葉が、自分の中にある言語と異なっていても、かまわなかった。答え方 が分からず、帰ってから自分の感覚が鈍いことに落ち込んでも、その場では見せないと決めていた。

「あのね、立村くん、ひとつだけ言っておきたいんだけど。これは貴史のいない時に、って決めてたんだけどね」
　ふと、ふたりっきりになった時、ささやかれた言葉。
「私、立村くんが、外国の本とか小説とか、そういうものについて話してる時、いつもすごいって思ってるんだからね。私、あまりそういうのわかんないけど、でもでも、絶対に、ばかにしてないからね」
　やっぱり、絵画のことがわからないということを、気にしていると思われているのだろうか。
　上総は曖昧に頷いて、ありがとうとだけ答えた。
　そしていつもその後思う。

　いつまで、三人でいられるんだろうか。
　いつまで、ふたりの仲間に入れてもらえるんだろうか。

その二　出発朝のよしなごと

１　いい奴なのだが、しかし

　朝六時に青大附中前に集合した。
　旅行終了後、次の日からなしくずしに始業式が始まることもあり、各地の下宿生たちもみな実家から帰ってきていた。一ヶ月ぶりの再会とあって、女子の中に は手を取り合って大喜びしている姿も見受けられた。男子はというと、青潟市外の海で焼いたらしい肌を見せつけて、腕をぼりぼり掻いていた。
「せめて、制服じゃない形にしてほしかったよな。普通のＴシャツとかさ」
「まだ夏休み中なんだから、私服だっていいのに」
「なんで、ネクタイまで持参なわけなんだ」
　意味不明な校則の数々を改善するべく使命をおびた、次期規律委員長南雲秋世（なぐもしゅうせい）の姿もあった。聞きつけたのか、あごの先で頷いて答えた。
「そうだよな、俺もそう思う。学校始まったらすぐに規律委員会開いてもらうようにするよ」
　相変わらずシャギーの髪型は変わっていない。もし微妙に変化したところがあるとするならば、「つきあい」相手の奈良岡彰子を目で探して、見つけるなり にっこりと笑いかけているところだろうか。笑顔が一段、南雲は自然だった。戸惑っているのは奈良岡の方だった。周りの女子に
「彰子ちゃん、愛されてるよね」
とからかわれているのが聞こえた。
「ところで、立村、このしおりの通り、持ってきたけれどさ、なんなんだ、ペットボトルって」
　羽飛貴史が上総に尋ねた。
　やっぱり、普通の発想ではないらしかった。
　上総にとっては自分の身を守るゆえに、絶対必要なことだったのだけれども。でも説明するとまた、
「お前ってば大げさなんだかださあ、もう俺たち中学生なんだぜ、そんなしくじりする奴なんていねえよ」
と笑われるだけだろう。
　ま、使わなければそれに越したことはないんだから。
　ただ、万が一ってことは考えられるわけであって。
　一寸先は闇。
「いや、たいしたことじゃないよ。それよか、羽飛、もし俺が酔ったら、その時はごめん。申しわけない。できるだけ気を付けるつもりだけどさ」
　今のうちに謝れることは謝っておこう。これから三日間、隣の席にいるであろう貴史に手を合わせた。
「立村って自分で酔う酔うっていっつも言っているけど、へどあげたことなんて一度もないだろ、心配性な奴だよな」

こいつ、わかっていない。
いまさらながら上総はあきらめていた。
羽飛貴史はいい奴なのだ。無口な上総をいつも、クラスでフォローしてくれ、いろいろなことがあっても変わることなく仲間に入れてくれて、さらには幼なじみの清坂美里との恋路も応援してくれている。いつも
「俺は立村の味方なんだよ」
ということを、どこかで伝えてくれている。
こんな性格のいい、奴なのだが。
上総にはどうしても受け入れられない部分がある。
自分の友達である以上のことを、さらに求めようとするところだろうか。
上総にさらに、自分の感情をさらけだすよう、求めるところ。
きつい。悪意がなくて、誰よりも自分を大切に思ってくれていることがわかるから、何もいえなくて、さらに辛い。
親友という扱いをされていながら上総は、いつも口をきけないでいた。
どんなに今まで上総が、旅行の時に気をつかっていたかなんて、たぶん貴史は分からないにちがいない。酔い止めを飲んで、窓の空気を吸うためへばりつき、いつも吐き気をこらえていたなんて、気付かないのだろう。
俺の味方でいるなんていう奴を、どうして素直に受け入れられないんだろう。
最低だ、本当に最低だ。

整列し、菱本先生に軽く挨拶をした後、男子、女子の順に乗り込んでいった。女子同士二名ずつの組に分けるのはそう難しいことではないようだった。後ろの 席だけが三名ずつになって男女セットになってしまった。が、どうもその後ろには奈良岡と南雲の二人が坐っているらしい。どう考えても、南雲の意志だ。いく ら付き合っているとはいえ、こうも露骨にいちゃいちゃぶりを見せ付けられるのも、なと思う。
でも南雲としては当然のことなのだろう。
上総たちよりも一ヶ月くらい早く両思いになったふたりだが、周りからは外見上つりあわない究極のカップルと言われている。南雲が女子受けするようなアイ ドル歌手雰囲気の顔立ちなのに対し、奈良岡彰子はかなりぽっちゃりめだ。一部の男子いわく、「ビール瓶」というのも頷けなくはない。でも、顔立ちはまるっ こくて、南雲の言うとおり
「一般受けはしないかもしれないが、俺にとっては完璧だ」
なのだそうだ。男女関係なく気持ちよく接してくれる女子だから、性格に惚れたといえばそれまでなのだろう。が、南雲の様子を見るとどうもそれだけではな い。外見内面ともに、満足度百パーセントらしいのだ。もっというなら、南雲の想いの方が圧倒的に高い。奈良岡彰子の方は戸惑いがまだ完全に消えていない。 断然、南雲の想いにひっぱられている状況が、この夏も続いていた。
上総は南雲の坐っている奥まで進んで確認した。

「じゃあ、なぐちゃんはここでいいか？　もしなんだったら変わるよ」
「いいってりっちゃん。これ以上贅沢なんて言いますかって」
　奈良岡彰子に向けるぱかっとした笑顔を、上総にもそのまま見せて、南雲はポケットから小さな子瓶を差し出した。
「りっちゃん、これは結構、酔い止めに効くと思うよ、薄荷の匂いがするかぎ薬だって。うちのばあちゃんから借りてきた」
「でも、それはまずいんじゃないか？　お前だってそう強いほうじゃ」
「大丈夫さ、俺には最高の酔い止めがいるからさ」
　隣で奈良岡彰子は困りきった顔で南雲を見つめていた。
「ほら、立村くん、凍りついているじゃない。とにかく、この席で大丈夫だから立村くんも、あまり気にしなくていいよ」
　目で
「早く、前に戻りなよ」
という表情だった。読めないほど上総も馬鹿じゃなかった。。
「じゃあ、なにはともあれ」

２　毎度恒例『朝の漫才』

　バスガイドさんはいない。バスの中はそれなりに余裕のある雰囲気だった。
　菱本先生の音頭でまずは、景色を眺めつつ「しおり」での合唱だ。
　たいていはカラオケつきだ。マイクを持つだろう。でも菱本先生の意志で、すべてカットとなってしまった。
「そういうところにはお金をかけないで、自分たちでバスの中を楽しもう」ということだそうだ。しかたないので、音楽委員ふたりにしきってもらい、しおりに 載っている歌を一曲ずつ、合唱することにした。歌謡曲もあれば、教科書に載っているのもある。マイクを持ったまま合唱に燃えている。
　上総にとってはそれこそうるさい以外のなにものでもない。
　盛り上げ係は幸い、貴史と美里がいる。
「悪い、ちょっとだけ空気吸ってていいか？」
　細く窓を開け、上総は外を眺めていた。バスを降りるまでの間は、評議委員としての仕事はまずお休みだ。これがもし学校祭とか合唱コンクールだとまた話は 違う。行事が終わるまでの間ずっと、気を張り詰めていなくてはならない。上総の場合自分でも、かなり神経質すぎるところがある。
「さって、では、次は、「山を越えてゆこうよ」でいこう！」
　まだ歌謡曲の順番は回ってきていないらしい。元気な羽飛・清坂コンビの声を聴きながら、上総はいつのまにか眠りについていた。たぶん、酔い止めが効いてきたのだろう。

　かちゃり、と音がしたので目を覚ますと、二時間くらい経ったらしく一部のグループが静かになっている。さほど揺れた記憶はなく、上総も風に当たってすこし寒気を覚えていた。
「今、どこまで来ている？」
「まだ山を昇っていないよ。サービスエリアにそろそろ到着するころだな」
　菱本先生が答えた。貴史に聞いたつもりなのに。できるだけこの先生とは口をききたくなかった。でもそんなわけにもいかない。本当にこの先生とは相性が合わない。どうしてだろう。
　窓から見える景色は銀紙がかっておいて、ところどころ工事中の山切り崩した跡などが見受けられた。その奥には黄土色の山壁。すっくと細長い木の群れが固まって生えている。緑色が濃く、天に突き刺すような雰囲気だった。
「なんていうか、きりたんぽって感じかな」
「なにがだよ、あの木がか？」
「やたらと細長いよな」
　別に意味は何にもなかった。おなかがすいてきたので、サンドイッチを取り出した。大きい声ではいえないが、現在親からもらった小遣いおよび生活費がほと んど切れている状態なので、買出しができなかった。バターをぬって薄切りのハムを挟んだだけのものだが、ラップに包んでハンカチにくるんできた。
「開発途上の場所ってところなのかな。この辺は」
　食べながらぼんやりと眺めているところに、古川こずえが声を掛けてきた。
　今は朝。
「ねえ、立村、いまあの木のことをなんとか「ぽ」っていわなかった？」
「ああ、きりたんぽって知ってるだろ。秋田の名物料理。ご飯を筒状にして穴をあけて、それをかためてゆでて食べるって奴。作っているときの状態によく似ていたからさ」
　意味はないはず。
「ふうん、『タンポン』ねえ、立村、どういうものだか知ってるよねえ。美里も教えてるでしょ、そのくらい」
　窓を見たまま頭は真っ白くなった。
　いや、知らないわけじゃなかった。
　ゆっくりと言い返した。
「古川さん、あんたの耳の方がおかしいんでないか。俺は今、『秋田名物料理のきりたんぽ』って言ったよな」
「なあに向きになってるのよ、あんたってほんっと、いまだにガキだねえ。お姉さんは頭が痛いってよ」
「ばかばかしい」
　椅子の間も離れているし、今日はそれで朝の寸劇ちゃんちゃんのはずだった。が、唯一うるさいのがいる。貴史がつんつんとつついてきた。
「なんだ、その『タンポン』って？」
「知らないのか？」

「ああ、俺、その辺よくわからねえよ」
「残念ながら、古川さんのように本体を見たことないので、そうなのかどうかはわからないけどさ」
　むかつきついでに、古川こずえに聞こえるように言い返した。
「立村くん！　ちょっと、いったい何言ってるの？」
「あの、だから、羽飛にきかれたから」
「だからって、いったい」
　美里が端の席から上総に向かって猛烈に反撃を開始している。戸惑う上総に今度は貴史が迎え撃った。
「お前、何切れてるんだよ。俺、知らないんだけどさ、その『タンポン』ってなんなんだ？　話がよめねえんだ」
「そんなこと、こんなおおっぴらに話すことじゃないじゃない。こずえもこずえよ。なんで朝から変なことまたつっかけてるのよ。それに」
　ふたたび美里は上総をにらみつける。びくっとしながら、窓辺に張り付く。
「立村くんも立村くんよ。そんな声で言わなくたって！」
「ごめん、俺が悪かった。ごめん」
「だからあやまらないでよ。私が悪いことしているみたいじゃない！」
「じゃあ、どうしろっていうんだよ」
「どうもしないけど、でも、変なこと言わないでよ、もう」
　以上の会話は、奥のグループに全く届かなかったようだった。雲行きは怪しい。他の連中はそれなりにいろいろな盛り上がりを見せているようだが、上総と貴史はしばらく小声で
「女子って、怖いよな」
「本当に、怖い。うっかりしたこと、言えねえな。でも、まじめに『タンポン』ってなんだ？」
「俺も見た事ないから、わからない。今度本条先輩に聞いてみるよ」
　隣で居眠りをしたふりをしている菱本先生。こいつは絶対聞いている。今の会話もすべて聞いている。実はそちらのほうに、思いっきり腹が立ったのもまた事実だった。
　バスは第一次ターミナルに到着した。

　降りた時、風のひやりとした冷たさが首筋に触れた。みな、ジュースを買いに走るものあれば、トイレに化粧ポーチを持っていく女子ありと、実にさまざまな連中だらけだった。まだ二時間程度だから酔った奴もいない。上総と貴史は用を済ませた後にすぐバスに戻った。
「天気よさそうだから、それなりに盛り上がるんじゃないかな」
「そうだな。立村もかなり無理しまくってたしな。それよかさ、お前、美里とどこまで行ったんだ？　今の調子だとまだ全然進んでいねえみたいだけど」
「まだ一ヶ月だぞ、何考えてるんだよ」
　三人で会う時も、上総はいつも恋愛の匂いをできるだけ嗅がせないような振る舞いをするよう勤めていた。ふたりの時はほんの少しだけ、自分の中にある感情 を、ちょこっと出してみたりも

する。一歩近い感じで、冗談を言ってみたりもする。美里もだんだん、上総に対して以前のように気を遣うこともすくなくなり、 かなり際どいネタふりをしてくるようにもなった。
　だが、あくまでも、ふたりの時だ。
　手が触れたったって、一回だけ、たまたまドアのノブをひねる時に指先が重なっただけのこと。それ以上は全く何にも触れたりなんてしていない。ましてやキスやそれ以上何てもってのほか。
「それを言うならだ。羽飛、現在の一年生とはどういう付き合いをしているんだ？」
「付き合ってなんかねえよ。きちんと俺は断ったぞ。だが、相手がそう思ってないみたいなんで、九月までようすを見るかってことで、一回くらい会った程度だって」
「断った相手に会うって奴か」
　少しむっときて上総は言い返した。
「それはちょっと、失礼じゃないか」
「だってさあ、相手なんて話を全然していないだろ。俺の場合は一回でもしゃべらないとピンとこないんだよ」
　貴史の言うことはわからなくもない。特別に好きでも嫌いでもないという状態だったら、ためしに付き合ってみるのも一つの手だろう。実際、上総はそういう 気持ちを残したまま、美里と「はじめてのおつきあい」を始めている。ただ、貴史にはどうも、カモフラージュの匂いが消せない。
　もしこれが、古川こずえだとしたら話は別だっただろう。
　上総としては、授業中の下ネタ振りにほとほとまいっていたので、いいかげん貴史とくっつけて、おとなしくしてほしいと思っていた。それなりのお付き合い でもいいだろうと思う。しかしながら、告白された一年生については、どうも気がなさそうなのだ。いろんな考え方はあるだろうが、「好きになら女性との交 際」だけは避けたいと思っていた。
　最近、南雲の恋愛観に感化されているかもしれないが。
「どうせお前らとは違うんだからな。立村、お前も人のこと気にしてる暇があったら、美里をもっと口説いてなんかしろよ」
「人にそんなこと言われたくないね」
　上総は軽く受け流し、しおりの日程を読み直した。
「黄葉市に到着するのが、十時くらいか。それから荷物をホテルに預けて、昼からバレーボール大会か。やってられないよな」
「その後で、街並みめぐりとくるわけだな。三十人ぞろぞろぞろと歩くわけかよ。みっともねえよな。もっと遠くから来た奴ならともかく、青潟なんて言ったら、近いし、制服姿だろ。恥ずかしいよな」
「全くだ。菱本先生の考え方はどうしても、納得いかないよな」
　貴史が頷く頃に、菱本先生がジュースを持って帰ってきた。
「お前ら早いなあ、おい、立村、外の空気吸わないで大丈夫なのか」
「一度外に出ましたから」

　わざと冷たく反応する。最低限の会話のみ、にとどめたい。教師としても、また一人の男として、生理的に好きになれないタイプだった。もっとも菱本先生も 同じ感じを持っているのだろう。上総に対しては、評議委員という扱いよりも、一段下の小学生並みの怒鳴り方をする。頭越しに怒鳴られるので、思わずかっと なって言い返したくなる。でもここで負けてはだめだと言い聞かせ、唇をかんで頭を下げる。去年はその繰り返しだった。どうして貴史は平気でいられるのだろ う。そちらの方が不思議だった。
「それにしてもなあ、羽飛。今日のバレーボール大会、お前のポジションにすべてがかかっているからな。頼むぞ」
「わかってますって。先生。俺のチームはその辺みんな心得てますから」
「やる気のなさそうな奴もいるけどな。全員で思いっきり勝負をするってのもいいもんだぞ、立村」
　答えるのもうんざりだ。上総は眠気が来た振りをして、窓辺にもたれた。目を閉じた。朝早かったから、ふりが本当に居眠りになるのも時間の問題だった。わしゃわしゃと人が戻ってきても、上総は目を閉じたままでいた。が、ぱしゃりと、ふたたび音が聞こえ、ぱちりと開いた。
「羽飛、いま何やった！」
「俺じゃねえよ！」
「ごめーん、立村起きちゃた？　寝顔写真撮らせてもらったからね」
「ああ、もしかして古川・・・！」
「大丈夫よ、渡すのはどうせ美里だけだから」
「そんな問題じゃないだろう！」
　隠し撮りすることに情熱を燃やしている古川こずえの存在を忘れていた。これはうっかり、変な顔して眠れない。
「その写真、あとで返せよ。全く油断も隙もありゃしない」
「でもな、今のは立村、お前が悪いんじゃねえの。勝手に狸寝入りこいていたんだから」
　貴史につつかれても、上総の気分はすっかりめいっていた。
「全くなんだよ、まだ旅行、始まったばかりだっていうのにさ」

　騒ぎは収まることもなく、バスは順調に黄葉市に向かった。バスの運転手さんも、口が少ないながら笑顔がやさしい人だった。大体二十歳後半あたりだろうか。上総が
「二日間、よろしくお願いします」
と挨拶すると、
「青大附中の生徒さんは礼儀正しいから、運転していて気持ちいいよ」
と答えてくれた。去年もやはり、この時期の宿泊研修を担当したらしい。休憩所でちょっとだけ聞いたところによると、どうやら本条先輩たちのクラスだったらしい。
「あの時やはり、クラスの会長さんみたいな子がいて、『お前、酔い止め飲んだか、お前体調大丈夫か、お前歌の順番どうだ』とか全部仕切っていたんですよ。で、最後に全員で『どうもありがとうございました』ときちんと礼をしてくれてね。びっくりしました」

本条先輩ならば、自分のクラスにそのくらい徹底させるだろう。
上総は運転手真後ろの席に座り、少しだけ椅子をリクライニングさせた。
「悪い、大丈夫か後ろ」
「立村もう寝るのかよ」
「まだ一時間あるだろ。頼むからちょっとだけ寝せてくれよ」
仕方ねえなと、後ろの席の奴らは椅子を斜めにしてくれた。奴らはまだ寝るなんてとんでもないというのりだろう。元気な奴はうらやましい。
すでにこの段階で胃がむかむかしていきたなんて、いえない。
理由はわかっていた。ひとつはだんだん山岳地帯に入ってきたため、横揺れが激しくなってきたこと。またもうひとつは、運転手さんのタバコが匂ってきて、窓から直撃を受けていること。
もともと上総はタバコの煙に強い方ではない。父は自室以外で喫煙はしないし、学校ではもちろん禁煙となっている。青大附中の職員室でタバコを吸う先生は 誰もいない。生徒に喫煙を禁止している以上自分たちが吸うなんてもってのほか、という考えだからだという。ゆえに、喫煙者が見つかったりなんかしたら、す ぐに停学、場合によっては退学となってしまう。
いろいろ悪いことを教えてくれる本条ですらも、タバコについては手をつけていなかった。めったにタバコの煙を吸うことなんて、なかったのだ。
しかし、運転手さんはかなりのヘビースモーカーらしい。
運転席の灰皿を覗いてみた感じ、すでに朝から二十本くらいの吸い口が残っている。
本当だったら、菱本先生に頼んで、
「すみません、タバコやめてもらえますか」
と頼みたいところだった。全く口を利かない、感じの悪い運転手相手だったら、たぶんそうしていただろう。
しかしながら、ついさっき話をしてみたところの運転手さんは、上総にとって非常にいい人だった。
白くゆるやかな煙が窓からぱっと散る。
窓を開けたままにしているとその煙がすみからするすると顔真っ正面にたゆたってくる。上総も窓を半ば開けっ放しにしているので、新鮮な空気は吸える。で も一回口から思いっきり、煙を吸い込んでしまった。それがまずかった。咳き込む次いでに、さっき食べたサンドイッチを戻しそうになる。ぐっとうつむいて、 片手では万が一のために「エチケット袋」を手探りする。こんな早く使うかもしれない事態に追い込まれるとは思わなかった。
幸い、隣の貴史も、当然向こう側の美里も、そういう上総の苦悶には気付いていない様子だった。一年半つきあってみて分かったのだが、ふたりとも乗り物にはかなり強い。進行方向反対側を向いても平気な顔してはしゃいでいる。
「立村、死んだように寝てるな。お前も入って「古今東西」やろうってさ」
「頼む、何も言わずに寝させてくれ」
これ以上口にしたら本当に修羅場となってしまう。
「本当に立村、身体弱いよなあ」

　貴史はそれ以上なにも突っ込まず、男女対抗、「古今東西」ゲームを楽しげに仕切っていた。女子チームのリーダーは当然美里だった。
「古今東西、青潟市内のスーパー名はなーんだ！」
　つくづく思う。元気な人たちだ。
　こんな暑い盛りに、本当にうらやましい。

その三　黄葉山でのよしなごと

１　ホテル到着よしなごと

　なんとか最悪の事態は免れ、朝十時、ホテルに到着した。

　『黄葉シルバーライトホテル』という、一見ビジネスホテル風の宿を強く推したのは上総の一存だった。父に頼んで一通りホテルの資料と口コミ情報を集めてもらい、
「二人部屋で、ほとんどこの時期借り切り状態にできて、しかも夕食がついていて、大部屋も借りられる。値段も普通の旅館よりはるかに安い」
という点で満足の行くところを選んだ。本当はしたくなかったのだが、父親の仕事関係で得た情報という後ろ盾もつけ、菱本先生を説得した。これもまた一苦労だった。
　なにせ菱本先生は
「絶対に民宿のような、アットホームな環境で、男女別の大部屋にする」
ことにこだわっていたからだった。もちろん今までの宿泊研修、合宿はそのパターンだった。しかし、上総にとっては集団で風呂に入ったり、十五人集まっての 大部屋に寝たりとかそういうのがどうも好きになれなかった。一年時の宿泊研修では五人ずつの部屋でかなり神経をすり減らした。帰ってから高熱を出して学校 を休んだことを覚えている。もちろん学年で行動する修学旅行の時はがまんするつもりではいる。見境なくわがままを言っているわけではない。
　でも今回は、「二年Ｄ組評議委員によってプランニングできる」というものなのだ。自主企画なのだ。だったら絶対に譲りたくない部分だった。
　当然のことながら、菱本先生には何度も怒鳴られた。
「だからお前はわがままなんだ、立村、みんなはもっとこの機会に、裸の付き合いを求めているんだぞ。学校ではみんなのことを思いやって行動するのが当然のことじゃないのか？」
　一歩も引かなかった。
「一泊程度だったらまだかまいませんが、やっぱり二泊になるとみな、身体の具合を悪くする人もでてきます。また、いろいろな人と一緒に過ごすことが困難な人もたくさんいます」
　できるだけ冷静なままで話を進めようと決めていた。感情のフィルターをかけて、美里と相談した譲歩案を出した。
「どうしてもそれが問題あるのでしたら、生徒の部屋にはカギがかけられないようにしてもらうというのはどうですか。それだったら、先生も安心して様子をうかがうことができるんじゃないですか」
　あまりにも険悪な流れに美里も不安を感じたのだろう。何気なく言葉を挟んでくれた。
「先生、電話で他の人たちに意見聞いてみるから、それから決めていいですか？　立村くんだけの案じゃないから。そうしたら、安心できるんじゃないですか？」
　夏休み最初、さっそく連絡網で意見を募ったところ、Ｄ組の男女ともにホテル案が受け入れら

れた。陰で上総がもっともらしい説明の暑中見舞いを男子全員に送ったことを、たぶん美里は知らない

　部屋割りもツインルーム、二人ずつだった。ひとりだけ三人部屋として補助ベットを出してもらうことになった程度で、問題も特別起きなかった。
　上総の同室は貴史だった。端から二番目。一番端に菱本先生の部屋があるのが気に入らないが、それ以外に不満はない。
　女子の部屋は男子部屋の真向かい一列だった。
「女子と話をしたい時はロビーを使いなさい。ただし、夜九時になったら自分たちの部屋に戻ること」
　別に、無理して夜這いする気もない。上総は冷めたまま菱本先生の注意を聞いていた。むかむかして今にも吐き出しそうな状態をこらえたまま、急いで自分の 部屋に向かった。番号はあるがカギはない。勝手に入ってこられてもしかたない。ただし、女子は別だった。男子はともかく女子だけは、カギを持たされてい た。美里がそのあたり、女子への電話連絡網で意見を集め、自分なりに交渉した結果だった。上総と違って美里の受けはかなりいい。あっさり受け入れられたようだ。

「お前大丈夫か、本当に今にもぶっ倒れそうだぞ」
　貴史が心配そうに上総を見る。
「とにかく、部屋に行ってから、少し寝たい」
「まだついたばっかりだぜ。これから黄葉山に上るっていうのにか？」
「一時間だけでいい」
　部屋に入るなり、上総はベットに倒れこんだ。
　窓が大きい。カーテンの隙間から白い光がじゅうたんに落ちている。寒すぎないけれど熱すぎない。貴史が窓をすぐに開けてくれた。
　部屋の中から見える景色は、黄葉山と名のあだけあり、薄黄色の粉末がはたかれているようだった。空気の匂いも青潟とは違う。木々のかすれた粉っぽさが鼻 の中に流れるようだった。ななかまどの実が青く、ぶら下がっている。山といっても、むしろなだらかな丘に近い、広々とした原っぱだった。登山遠足のように 息切れしないですむ。だから行かなくてはならないと分かっている。でも、どうしようもなく、胃が気持ち悪くてめまいがする。
　まあもっとも、上総の場合は夏、すかっと気持ちのいい日なんて一日もないのだが。
「バレーボール大会はさ、絶対優勝しようぜ」
「元気だな、お前も。でも俺は戦力から外してくれよな」
「どうしてだよ」
「レシーブをちゃんと決める自信がない」
　男子、女子五人ずつ３チームをつくり、原っぱのあいまいな線をしるしに、男女対抗戦をやろうというのが、菱本先生の強行な意見だった。上総にとってはもう、いいかげんにしてくれとい

うのが本音。制服から軽いデニムシャツに着替え、もう一度上総は枕に顔を伏せた。
五分くらいしか寝てないつもりだったが、貴史がいうには、
「もう三十分近く死んだように寝てたぜ、お前」
　なのだそうだ。髪はぼさぼさ、目の周りには隈。学校で身なりをきちんとしている上総の顔とは思えない。大急ぎで髪をとかして抱えるかばんを持っていくこ とにした。父のお下がりである、よくしらないブランドのバックだった。中には手帳も入っている。今回の旅行をすべて計画した上総の記録である。でもあま り、見られたくないことも書いている。かばんは絶対に手放してはいけないと思っている。

２　青潟大学附属中学２年Ｄ組ファッションチェック

　まずはロビーに全員が集まった。決して広いホテルとは言い難い。三十人も集まるととにかくうるさい。多少なりとも『山登り』なので私服が許された。しかし明日は街の散策中心なので、制服着用が厳命されている。
　そんなのどうでもいいのに、とは上総の本音だがさんざんわがままを通してきた以上、無理に逆らうこともなかった。

　女子の格好はさすが、ジーンズ姿がほとんどな中、キュロットスカートを短めにはいている子もいたりして、何気なく男子は目が足元に行っている様子だった。そのくせ隠そうとしているのが見え見えだ。むしろそういう野郎の様子を観察するのが面白かった。

　美里の格好は、何度か夏休み中に見たツーピースのキュロットだった。マドラスチェックの橙系上下で、ブラウス風の半そでジャケットと、膝丈ぎりぎりの キュロット。贔屓目なしに見ても、結構似合っていると上総は思っている。しかし口にはしない。何言われるかわからないから。

　しかし、平気で自分のお気に入りを褒め称える男子もいないわけではない。
「すっごく、似合ってるよ。彰子さん」
　奴しかいない。
　南雲の格好はまさに、真っ白いパーカーに少し余裕のあるターコイスのジーンズ姿。濃紺のＴシャツには錨の柄がさりげなく施されている。上総もあまり詳し いほうではないが、ある男性芸能人の生き写し、そのものだという。髪がシャギーなのは相変わらずで、どうもきっちりとブローしてきている。一部では「化粧 道具まで持ってきているらしい」という噂まであるくらいだ。
　そんな南雲が、本日一緒に連れ歩く予定の奈良岡彰子は、決して似合わない格好をしているわけではない。ちょっとフリルのついたジーンズ系のブラウスに、 やっぱりデニムのロングキュロットだ。膝まで隠れるくらいだが、丈がちょっと合わない。一番足が太く見えるラインで切れている。あれは誰か、気遣ってやれ よと上総は密かに思っている。ぽっちゃり体系の奈良岡ではあ

るけれども、周りが言うほど不細工だとは思わない。むしろ、目が大きい分あどけなさが垣間見え て得をしているのではという気がしていた。
　ただ、誰かセンスのいい子がもう少しなんとかしてやるべきではないか。
　その相手は、南雲、お前じゃないのか。

　貴史はというと、シンプルな黄色のＴシャツにジーンズ。
　大抵の男子はジーンズが多い。チノのスラックスを着るようなのは上総くらいのものだった。どうも上総は、ジーンズといわれる系統のものが好きになれな い。親類のお下がりで全く持っていないわけではないのだが、もともとからだが細いこともあって合わない、という言い訳のもと一度も着用していない。
　好きになれないというただそれだけなのだが、周りからは「立村のこだわりって理解できない」と言われる。同じように、丸首のＴシャツ、さらにポロシャツ のようなものも、よっぽどのことがない限り、絶対に着なかった。体育の授業で否応なしに、学校指定のポロを着用するくらいだ。

　ひとりだけ、ジーンズのオーバーオールを着ている、妙に似合う男子がいる。水口要（すいぐちかなめ）だった。中に来ているのはやはり襟のついた半そでのチェックシャツだった。暑苦しそうだった。
　上総は水口に声を掛けた。
「すい君、大丈夫か？」
　年齢こそ同じだが、精神的にかなり幼いところのある水口は、クラスで「すい君」と呼ばれていた。いじめるなんてことは誰もしない。クラスのいわば、「赤 ん坊」のような存在だった。菱本先生もその辺はよく心得ているようで、クラスメートの中で一番気にかけている様子だった。
　水口は小さな布リュックを背負い、頷いた。
「うん、ちょっと暑い」
「もし、具合悪くなったら無理するな。俺も体調崩したらすぐ帰るから遠慮するなよ」
　水口は見た感じも、さらに行動も小学校中学年程度にしか見えない。ちょっとしたことでからかわれるたび物を投げつけて泣きじゃくるところも、手がかかる のはわからなくもない。こういう奴がよく青大附中に入れたというのが正直なところだ。ガキっぽすぎるとはいえ、成績はトップクラス。そのアンバランスさが かえって、頭を抱える原因になっているらしい。
　だが菱本先生の水口に対する接し方は『幼稚園児』ターゲットだ。
　体調の是非をこまめに確認するのはいい。
　給食の食べ残しをチェックされるのも、まあ仕方ないだろう。
　だけど、周りの連中と一緒に遊んでいる時に、「お前ら水口にあわせてやれよ」と、本人のいる前で声を掛けることはないだろう。もちろんこちらも気を遣っていないわけではない。
　目の前で自分をみそっかす扱いされた水口の気持ちを全く考えようとしない菱本先生に、上総はいつのまにか憤りを覚えていた。

もっとも、水口本人はあんまり気にしていない、風に見える。
だから、菱本先生も平気で接するに違いない。

上総は水口を人のいないクロークに引っ張っていった。他の連中に聞かれるとまずいことだった。
「あのさ、すい君。この前のことなんだけどさ、一晩徹夜する自信はあるか？」
「うんと、わからない」
「だよな、その時になってみないと、わからないよな」
表情を変えないよう気をつけながら、上総はささやいた。
「わかった。じゃあ、どっちにせよ夜中の二時過ぎに、俺がすい君のいる部屋に、用事がある振りして入っていくからさ。無理やり起こすかもしれないけれどいいか？」
「うん、ありがとう」
水口の表情に陰りが見えた。今にも泣きそうになっている。理由は上総も重々承知だった。
「それとさ、この前も電話で話した通り、バスの中で間に合わないと思ったら、ペットボトル、あれを使えよ。すい君の隣は、金沢だろ？　隠してもらって、膝にタオルをかけてすれば、絶対に女子に気付かれないからさ」
「すごい、どうしてそこまでできるの」
水口のきょとんとした幼顔に、表情を変えず上総は頷いてから、素早く貴史たちのグループに混じった。だいたい男子のグループには三種類あって、ひとつが 貴史の率いるクラスの中心元気いっぱいの連中、ひとつは南雲たちのいる、ファッションやハードロックにやたら詳しい、ちょっと派手目の連中、もうひとつが 水口たちのいる、クラスにちょっとなじめないタイプの連中だった。上総の場合いつも、三グループをふらふらと行き来しているが、メインはやっぱり貴史の補 佐だった。
「よし、それでは全員揃ったか！　ではいくぞ！　黄葉山ハイキングだ！」
「わーい」
元気な女子たちが歌を歌いながら玄関に走っていった。本当にみな、元気な連中だ。上総はまだむかむかする胃を抑えながらついていった。
貴史がミントガムを差し出した。口の中だけでもさっぱりさせたくて、ありがたく頂戴した。

３　坂をのぼって千畳敷へ

バスに乗って三十分。
運転手さんは笑顔で迎えてくれたがタバコは手放さない。
貴史と美里の二人がバスガイド用マイクを使ってカラオケ大会を催し始めた。その脇で、上総はひたすら目を閉じていた。油断したら大変だ。そのへんお好み焼き状態になってしまう。

　貴史はマイクを近づけてくる。
「ほら、立村、お前もなんか歌えよ」
「悪い、頼むからそれだけは勘弁してくれ」
「なに嫌がってるのよ。立村、あんた音程狂ってないくせに」
　一年時の音楽歌唱テストで、みな好きな曲を選び、カラオケつきで歌わされたものだった。二時間たっぷり音楽の時間を取ってあったので、結局は紅白歌合戦 状態だった。企画を立てるのはかまわないのだが、自分でも歌わなくてはならないと知った時、上総はめまいがして卒倒しそうになった。結局、シンプルなバ ラードっぽい曲を必死に探して事なきを得た。あの時の恥ずかしさといったら、三ヵ月後の『評議委員会ビデオ演劇・赤穂浪士』に匹敵するものがあった。
「無理させないほうがいいかも。立村くん顔色真っ青だからほっときましょ」
　よくできた彼女がいると助かるということを、再認識する。
　清坂氏、ありがとう。この一言をささげたい。

　幸い、横揺れが少なかったこともあって、黄葉山に到着したのは十二時近くだった。山といっても、実際は自然公園に近いつくりとあって、ある程度舗装され た坂を十五分くらい歩く程度だった。が、その坂が傾斜きつく、いくら歩いていっても平行線が見えない。何にも持ってこない方が正解だったと上総は思った。 バックもそんなに重たいわけではない。洗面道具を入れる袋程度のものだけど、歩いているとやっぱりしんどい。
　でもみっともないところは見せられない。なにせ女子が元気すぎるのだ。美里は古川こずえと一緒に楽しそうに走っていった。
　歩いているのではない、走っている。
「立村くん、上で待ってるね」
　追い越しぎわにささやいていくのはなぜだろう。
「あんたも持久力足りないと、将来困るよ」
　とはこずえの言葉。何を言いたいんだ。全く。
「立村、お前そんなに体力ねえのか。手、ひっぱってやろうか」
　とは貴史のお言葉。結構です。そのくらいのプライドは持っている。

　後ろの連中を心配する振りをして、一歩一歩踏みしめていくことにした。振り返ると、下の方では南雲と奈良岡彰子が仲良く昇っている。よく見ると、奈良岡 の方がかなり疲れきっている。苦手だろう。こういう体力を使うのは。手を差し伸べて、「握れるし、一緒にいてもおかしくないし」と笑顔でひっぱっているの が南雲だ。隠したい気持ちもあるだろうに。奈良岡は目立たないように隅によろうとする。
「どちらかいうとさ、内側に沿って上ったほうが、楽だよ」
　上総は南雲と目が合い、軽く手を振った。
「りっちゃあん、そっちはどうですかあ」
　気持ちよい声の響きに上総も答えた。

「あと、もう少しだよ」
　さらに後ろの方はと見ると、菱本先生が手をつないで水口を引っ張っている。ほとんど半べそ状態だ。心配そうに、金沢卓（かなざわすぐる）がくっついている。
　もっとも金沢の場合、荷物がやたらと多いので、かなりしんどいだろう。荷物の中身は公認だ。水彩画道具一式。去年の文集作りで、もっとも活躍したのが金 沢だった。クラス全員の横顔を、一枚一枚書き上げて、全部掲載したという兵だ。くっきりとしていてひきつけられる雰囲気だった。
　冗談で上総は
「これ、売ってくれないか？」
とからかったことがある。今考えるとかなりするどいところを突いていたと思う。
　その後金沢は別の絵で青潟の展覧会に入選した。学生だけではなく、プロの人も混じっている絵画展でだった。もう冗談でも、「売って」なんていえない。身上つぶさないでよかったと上総は思ったものだった。。
　菱本先生たちよりは先に登りたいので、上総は無理やり走り加減で足を動かした。かなり無理している。咽奥からのかすれた響きでわかる。

　到着してみるとそこは通称「千畳敷」と呼ばれる叢だった。ちゃんと観光客用に食事場所もある。その辺はきちんと整えられている。秋の草花らしきものもた くさん咲いている。青潟には咲いていない黄色い野草もあれば、薬に使われるらしき薬草も生えているという。詳しい奴にその辺は、今度レクチャーしてもらお う。
　まずは腹ごしらえとして、近所の売店でお弁当を購入することにした。

　「余計な出費を防ぐため手作りの弁当を用意した方がいいんでは」という、菱本先生の意見をあっさり切ったのも上総だった。
「お母さんがいる人とか、作ってくれる人だけならいいですよ。うちなんかどうするんですか。俺も二食分作って持っていく根性ありませんよ」

　本当のところ料理そのものは得意なのでたいしたことじゃない。でも連絡網を使い、電話でいろいろ他の連中と話をしているうちにそれぞれの家庭事情が見えてきた。
　お母さんだって、好きで弁当をこしらえているわけではないとか、腐りやすいとか、いろいろあるのだ。
　菱本先生が心配していたのは、三十人分の弁当がちゃんと手に入るかということだったが、売店はなんと三箇所もあった。この小さいところで、よくも。と関心した。きっと同じこと考えている学校の生徒がいるんだろう。
　上総が選んだのは山菜弁当の方だった。腹持ちのいいごはんものが食べたかったのと、でも油物は避けたいという、二点だった。周りの連中はサンドイッチや 菓子パンで済ませているようだった。腹空かないのか？と聞きたかったけれども、空腹には勝てない。貴史たちのグループで集

まり、シートを敷いてまずは食べ 始めた。
　隣には美里たちが女子五人でかたまっていた。こずえの他、今日は奈良岡彰子も混じっていた。
「彰子ちゃん、珍しいね、今日どうしたの。サンドイッチだけなの？」
「やっぱり、いろいろ考えるのよ」
　丸顔に前髪をすくって、ぼんぼんのついたゴムで止めている。額をきちんと上げているので、よく見るとあどけなさが見え隠れしている。南雲の影響か、上総 も最近は奈良岡彰子のルックスがさほど、とは思わなくなりつつあった。たぶん、損をしているとしたら、身体のぽっちゃり加減だろう。
　それさえなくせば、かなり。
　ということは、今、ダイエットしているんじゃないだろうか。
　俺みたいに食べても食べても太らない体質ならともかく、反対の人もいるしな。
　上総は、わびしそうにサンドイッチだけかじっている奈良岡に隠すように、ご飯を口に運んだ。他人から見ると、非常に「まずそう」に食べているよう思われるとのことだった。

　旅行一日目のメインイベント、ということで、菱本先生は網に入れたバレーボールを取り出すよう、上総に指示した。持ってきたのは菱本先生だ。上総は意地でもタッチしていない。やること自体を無視していた。
　なんでこの先生って、やたらと「集団」でやることにこだわるんだろうか。
　なんでこの先生って、みんなで感動を求めたがるんだろうか。
　ほっといてやってほしい奴には、ほっといてやってほしい。
　例えば、この俺みたいに。
　指で押すと滑らかでやわらかいボール。白い、さわり心地のよいものだった。しばらく撫でていると、やっぱり見つかった。こずえの一声だ。
「なんだか、すごく卑猥なさわりかたしてない？　立村の指って」
「古川さんも触ってみろよ。気持ちいいよ」
「え、気持ちいい、ってまで、言っちゃっていいの？」
　にやりとして、こずえは続けてきた。まただよと、周りではやし立てる声がする。
　こずえと上総とのしょうもない、下ネタの突っ込みあいは、すでにＤ組での年中行事となっていた。
　人よんで「朝の漫才」ともいう。また別の奴らは「夫婦漫才」と名づけているのもいる。
「だれかさんの、ふとももみたいな感触でしょ。触らせてもらったことって、ないの？」
「そういうあなたはどうなんですか、よく細かいところまで知っていることだ」
　ぽんと、上総はこずえにボールを投げた。反射的にすぐ、受け取ってくれた。よしよし。
「うわあ、ほんと、新品。ねえ、もしかして菱本先生、この日のためにボール買ったんじゃないの？」
「たぶんな。あえてその件については何も言いたくない」

　コートは原っぱそのものだから、線を引いているわけでもないし、アウトラインがどこなのかも目見当で決める。
　菱本先生が一応、小枝で線を引いて、ご丁寧に落ちている色つきの石まで並べてくれた。
「じゃあ、始めるぞ！」
　全く、元気な先生だ。付き合わされる方はやってられない。
　各五人ずつ、チームを分けた後、美里と相談して男女総当り戦試合をしてもらうことにした。
「立村くん、ほんっとに、今日はやる気ないでしょう」
「ない、全くないね」
「運動嫌いじゃないくせにね。変なの」
「深い理由はないよ。ただ、押し付けられるやり方が、いやなんだ」
美里は、納得顔をして頷いた。
「立村くんって、そういうの死ぬほどいやがっているよね」
「当たり前だよ。清坂氏は平気なのか？」
　ちらりと周りを見て、誰もこちらに視線をやっていないことを確認し、美里は耳もとにささやいた。息が耳の穴に溜まりそうで、熱かった。
「大丈夫、私が免疫になってあげるから」
　こういう時、上総の感覚はふわっと麻痺してしまう。
　言葉がではない。
　吐息の熱さって、こういう時に感じるものなんだ。
　世の中には、信じ難い感覚があるんだ。
　これが「つきあっている」同士の特権、なのかな。
　「好き」という感情とは違うものだけど、気持ち悪くはない。

　バレーボールの試合は、やたらと盛り上がる美里と貴史の掛け声によって、騒がしさだけは倍増していた。半病人状態の上総は、適当に貴史へボールを回すだけで精一杯。結局、一部の人間が疲れ果てた段階で休憩となった。
「お前ら、若いくせになんだそのだらしなさは、全く泣けてくるよなあ」
　一人で泣けよ。うっとおしい。
　心で罵詈暴言を吐きながら、上総は貴史たちの陣地に坐ってぼんやりと景色を眺めた。青潟の夏は短いと言われる。特に山の方はあっというまにナナカマドや銀杏が色づき、九月半ばには紅葉狩りもできそうな風情となる。ましてや奥まったここ、黄葉市は半月近くそれが早い。
「金沢、お前、絵、かかねえの？」
　水口と一緒に坐って水彩セット準備に余念のないのが金沢だった。
　貴史が気付いて、水を汲んでやった。
「描きたいけど、でも」
　金沢と水口は顔を見合わせて、菱本先生の方にちらっと視線を走らせた。

「先生がたぶん、山の方の景色を描けっていうんだろうなあ」
「不満かよ」
「本当はあの、原っぱを書きたいんだけどな」
　ずいぶん地味な趣味だと思う。でも、珍しい花も咲いているし、かなり面白い着眼点だ。聞きつけて上総もささやいた。幸い菱本先生は南雲たちのグループと、なにやら音楽の話で盛り上がっている。聞こえない。
「黙っているうちに描いてしまえばいいんだろ。なあに、決めるのは自分なんだからさ。鉛筆でスケッチしてしまえばこっちの勝ちだろ」
「そうか、そうしちゃえばいいんだ」
　金沢は水口に
「すい君、そこの草をむしって、ついでに虫とかいたら、なんでもいいからとってくれないかな」
と、声を掛けていた。
「いったいあいつら何を描くつもりなんだ？」
　貴史がささやく。
「わからん。たぶん、宿泊研修後の文集表紙には出来ないようなものだと思う。俺の直感だけど」
「はあ？」
　上総のにらんだ通り、二人はにこにこしながら土を掘り、そこからコガネムシやらアリを連れ出し、わざわざルーペまで持ち出して細かく観察していた。写生だとしたら、かなり怖い。女子には思いっきり怒られそうだ。つくづく思う。天才の考えることはわからない。

４　ちょっとしたわすれもの

　気付かないうちにふたりの写生も終わったようで、ようやく日も斜めに翳ってきた。もちろんまだ遊んでいられる時間、三時になったところだけれども、バス三十分のことを考えれば、そろそろ潮時という気もする。
「じゃあ、お前ら、ごみは持ったか？」
　菱本先生は弁当箱およびそれぞれのごみを、大きなビニール袋にまとめ、
「ほい」
と、上総に手渡した。
「お前、最後に忘れ物がないか、見てから最後に降りて来い。それが義務なんだからな」
　別に異存はない。菱本先生は歌を歌いながら先頭に、水口と金沢のお絵かきコンビを連れて降りていった。くだりは早い。あいつら、走ってるよ。逃げ足の速い連中にあきれつつも、上総はさっと見直した。
　かならず忘れ物があるんだよな。

　別にそれはいいんだ。俺が持ってかえればいいんだから。
　問題は、俺ひとりだと、それを見つけられないてことなんだ。
　こういう時に、美里がいると安心して探してもらえるのだが、ちょっと声は掛けずらい。すでに美里はこずえたちと一緒に、坂を降りていってしまった。残っているのは貴史だけだった。
　いらいらしながら待っているようだった。
「おい、立村、先行っちまうぞ」
「悪い羽飛、一通り見てもらえないか」
　上総の場合、なくしたものを探すのに尋常ならざる時間がかかる。ちゃんと自分では見ているはずなのに、いつのまにか見落としていることの多いこと。よく 忘れ物の鬼にならないですんでいると思う。答えは簡単。とにかく、自分の荷物はきちんと、片付けすぎるくらい片付けてあるからだ。場所も順番もすべてきっ ちりと決めてある。ただし、それを誰かにいじられたりするともう目の前がパニックになる。もちろん人には見せないけれども。
　貴史はぐるっと原っぱを足早に一周し、ふと立ち止まった。
「こんなの落ちてたぞ」
　拾い上げたのは、黒い定期入れだった。
「誰だろ、金なんか入ってないよな」
「それはないけどさあ」
　ぽんと渡した。開いてみると、青大附中の学生証がモノクロ写真入りで刺さっていた。「２年Ｄ組南雲秋世」とある。前髪をきちんと整え、幼さ残った顔が写っている。妙に厚ぼったいのが気になるが、人のものをそう覗くのはまずいだろう。
「わかった。渡しとく」
「お前南雲と仲いいもんな」
　感情を入れない声で貴史がつぶやいた。その通りだ、と上総も頷いた。
「てっきり奈良岡の写真でも入れているかと思ったぜ」
「いや、それはたぶん」
　上総はバックにきちんと入れたのち、
「肌身はなさず持っているから、落としようがないんだろう」
「全くだ」
　Ｄ組連中が誰もいなくなったゆえに、貴史は響き渡るくらい笑いこけた。声はかすかにこだましていた。

　予定されていた庭園散策が時間の都合で次の日に延びた。
　上総と貴史は、最後に到着し、ごみを処分した後ゆっくりとバスに乗り込んだ。
「お前らいったい何をしてたんだ」
「みんなの忘れ物がないか確認していたんです」
　菱本先生の質問にそれ以上答えず、上総は一番奥の席に進んだ。南雲はやっぱり一方的に、奈良岡に張り付いていた。奈良岡彰子はというと、もう一人隣の子 に、懸命に話し掛けている。あ

まり、男子とばかりくっついていると思われるのが嫌なのだろう。気持ちは大変よくわかる。南雲も少しは気を使ってやれと思う のだが、それなりに考えもあるんだろう。
「ほら、なぐちゃん、忘れ物」
「あ、ありがと。助かったよ。あれ？　俺の定期入れだな」
「全く、こんなにバスの期限が残っているんだからさ」
　さりげなく渡して、さっさと戻った。さて、これからはホテルに一直線だ。思いっきり発車する前に、窓を全開にした。誰がなんと言おうとも、これだけは譲れない。
「立村、もう少し窓を狭くできないか」
「すみません、酔いやすいものですから」
　冷たく答える。貴史も、
「先生、しょうがないよな、こいつほんっと、行きのバスで死人面してたから仕方ねえよ」
　とフォローしてくれる。ありがたい。
　しかし敵もさるものだ。
「清坂、古川、そっちは寒くないか？　寒いよな」
　上総の方をちらっと見ながら、女子に声をかけてくる。味方を増やして反撃しようという手だろう。
「別にいいけど」
　とはこずえの答え。しかしながら、今回敵は美里だった。
「立村くん、体調が悪いのはわかるけど、あんた一人だけじゃないんだから」
　たしなめるように、ゆっくりと。
「後ろの子も、風邪引いてる子いるんだから、少しは譲歩してよ」
　あのな、なぜそう、そういうこというかな。
　美里の言葉に説得させられたわけではない。最後にとどめ。
「な、だからお前はいつも自分のことばっかり考えてるって言うんだ。全く、本当に立村、それでも評議か。情けない奴だ」
　結局それか。しぶしぶ上総は半分だけ締めることに合意した。
「大丈夫だって、立村。本当にやばくなったら、俺が面倒みてやるってさ」
　貴史の言葉は、本当のところありがためいわくだった。
　冗談じゃない、こうなったら意地でも耐えてやる。

　バスが出発した。感じのいい運転手さんはやっぱりタバコを吸っている。
　ちゃんと気を遣って外に逃がすようにしてくれている。
　上総の顔に煙が直撃するという問題はさておいても、本当にこの人は、いい人だと思う。まだめまいもないようなので、しばらく貴史としゃべっていた。
「あのな、立村、さっきのことなんだけどな」
　菱本先生に聞こえないように、小さな声だった。
「さっきのことって？」

「ほら、南雲の定期入れだよ」
　黒い皮のバス定期入れだった。やたらと厚みがあったのをまだ覚えていた。きっと貴史も同じことを考えたのだろう。
「渡したよ、ちゃんと」
「中、見たか？」
「まさか。南雲の写真見てどこが楽しいって言うんだ」
「違う、もう片方の、厚みのあった方」
　貴史は美里たちと、後ろの様子をちらちら見ながら、ぐっと上総の耳もとに口を近づけた。
「ゴムが入ってたみたいなんだ」
「ゴム？」
　ピンとこない。普通に響く声で答えた上総を、貴史は慌てて口をふさいだ。
「お前本条先輩から見せてもらったことないのか？　ゴムってあれだよあれ」
「本条先輩？」
　「本条先輩」という名前によって引き出される答えは、簡単だった。
　本条先輩が日常的に使用しているといわれる、あれは、もういやというほど、見せ付けられてきた。「お前もいつか使うことになるんだからな、よく選び方見とけ」と半ば強引にだった。
「あの、もしかして、俗にいう、避妊具って奴か」
　貴史の耳もとにこれ以上聞こえないであろう声で、ささやいた。
「それしかないだろ」
「でもさ、まさか」
「でもそれしかねえだろ」
　少し先走った話題で、仲間内だけだと思いっきり馬鹿になる貴史だが、なぜかそういう気分ではないらしかった。おちゃらける気なんてさらさらないようすだった。
「別に、それはいいけどな。奴がどう考えているかわからねえよ。お互いがお互いだったら知ったことじゃねえよ。ただな、そういうものを平気でよく、持ってられるよな」
　あれ、普段の羽飛の意見じゃないな。
　上総は言い返したくなるのをやめて、ふっと天井を見上げた。
「人のことなんだから、そんなのどうでもいいだろ」
「お前は南雲びいきだからなあ」
　こいつはなにげなく、妬いているんだろう。
　おそらく、ゴムを使うチャンスのある南雲を、やっかんでいるんだろう。
　そりゃそうだよな。
　できるだけさらりとしたまま、上総は答えることにした。自分の個人的感情は風に流してしまいたかった。
「本条先輩に言われたんだ。使うことは最低限の義務だって。俺はとりあえず、本条先輩の主義に従うことにしているから、ノーコメントだ」
「全く、立村。お前本条先輩絶対主義だもんな」

　貴史がもともと、南雲のことをあまりよく思っていないのは知っていた。
　グループが別ということもあるだろうし、あまりちゃらちゃらした雰囲気の連中を好まないところもあるのだろう。意外と貴史は硬派だった。洋服などにも、過剰に気を配ったりしない。美里にはよく
「貴史、いいかげんあんたも、もう少し洋服のセンスを磨きなよ。立村くんに習うなりしてさ」
ときついことを言われ、むっとしていたりするけれども、まあそれは否定できない。
「女子みたいにそんなもの、着る必要あるかっての」
　言い返すものの、上総にはさほどつっこんだりしない。
　上総もかなり、服装には神経を遣うし、好みもうるさいと思う。
　貴史にいつ、いやがられてもおかしくない。
「あのさ、羽飛」
「なんだよ、立村」
　すでに顔を窓辺に向けたまま、上総は尋ねた。
「そんなに、服に気を遣う人間って嫌いか」
　裏の意味を匂わせないで尋ねたかった。
「いきなりなんだよ」
「いや、なんとなくさ」
　向こうを向いたまま答えたので、貴史の様子は窺えなかった。
　軽く答えるかと思ったけれど、しばらく黙っている。
　言い方に険があったのかもと、上総は息を殺した。
「立村、あのな」
　振動音の間に言葉を滑らせるよう、貴史の返事が聞こえた。
「俺が見かけだけで人を決めつけるような奴に見えるのかよ」
　怒らせてしまったか。
　振り向くべきか否か迷っているうちに次の言葉が飛んできた。
「別にお前は女子受けするために服を選んでいるわけじゃねえだろ」
　ちょっと棒読み風に、投げやりに。
「お前はお前だ、それで十分だろ」
　そのまま動かずにいたら肩にぽんと、ひとつ手をのっけられた。
「ま、しばらく寝てろよ。着いたら起こす」
　答えないですんでよかった。ガラスにうっすら映る自分の顔には、情けないくらい泣きそうになっている小学校時代の上総が見えた。自分にしか見えないその顔を隠して、二年間、青大附中で生きてきた。

５　ひとりしずかにゆめのなか

貴史の言葉に甘え、ずっと目を閉じていた。幸い、こずえのカメラ攻撃はこなかった。あいかわらず元気な貴史と美里のコンビが、いきなりカラオケ大会を始めたからだった。菱本先生も楽しそうに最近流行の曲を、英語で歌ったりなんかしている。
菱本先生が社会担当であることを知っている上総としては、たとえ発音がひどかろうが、果てしなく日本語に近い歌い方をしていると思っても口にしたりしない。自分にかまわないで、寝させてくれればそれ以上なにも求めない。美里がその辺はわかってくれているようで、
「あれ、立村は歌わないの？」
というこずえの声に、
「いいのよ、どうせ具合悪いんでしょ。明るい人だけでいこうよ」
と交わしてくれた。とってもだが「つきあっている」相手の言葉とは思えないけれど、その奥にちゃんと、意味があることを上総は知っている。だから、かま わなかった。たとえ美里が女子同士の集まりで「所詮、情が移っただけよ」と笑い飛ばしているのを聞いても、腹なんか立たなかった。

つきあいはじめてから、美里はずいぶん上総への態度ががらっぱちになった。以前だったら懸命にかばってくれていたらしいのに、両思いになったとたん
「全くあんたって人は！」
と、かなり言いたい放題だ。貴史にも影でたしなめられているのを聞いた。
「お前、ほんっとに、立村の彼女なのかよ。しんじらんねえな。あれだけ熱上げてたくせに、これかよ」
と。
たとえば南雲のように、奈良岡に対して「彰子さん彰子さん」とべったりすることなんて、上総には絶対できない。奈良岡彰子がため息をつきつつも南雲をやさしくあしらっている、あれが限度だろう。その点、女子だけれども上総には奈良岡の気持ちがわかる。
上総と一年以上、友達付き合いをしてきて、美里はだいぶ理解してくれたのだろう。生々しい「恋愛」の匂いを上総は好まなくて、むしろ突き放したように友 達づきあいしてくれる方が、楽だということを。上総が一番望んでいるのが、何かってことを理解してくれるから、美里は思い切りつっぱなした言い方をするの だろう。
別に、私になんにもしなくてもいいのよ、と。
べたべたしなくたっていいよ。
立村くんの、一番望む形で、お付き合いしていいんだからね。
つくづく思う。俺は本当に、この学校で、人間関係に恵まれている。

うるさければうるさいほど、気がまぎれた。目を閉じていると太陽の日差しがまぶたに映って虹らしきものに見とれたり、橙色の花火の幻想を見つけたりと、 それなりの面白い画像を楽しめた。隣では貴史と美里が何を考えたか、いきなり二人でデュエットを始めている。菱本先生のリクエストらしい。

「羽飛、清坂、お前らやっぱり一度は歌わねばならないだろ！」
　当然、隣に清坂美里の彼氏がいるなんてことは一切無視だ。
「先生それはまずいっすよ。だって清坂には・・・・」
　とのよけいなおせっかいも、あっさり切り捨ててくれる。
「いや、やっぱりベストカップル同士の方が、聞いていて楽しいだろ」
　菱本先生にとって、二年Ｄ組のベストカップルは決して評議委員コンビではないらしい。
　これが普通の恋人同士だったら激怒するんだろうな。
　寝ている振りをしたまま、上総は思った。
　俺は全然、そんなのに関心ないから、別にいいんじゃないかと思うけどな。
　かえって、話しかけられるよりそうしてくれたほうが退屈もまぎれるし。
「立村、お前起き上がって抗議しろよ！　ったく、だからお前女子に『昼行灯』って言われるんだぞ」
　好意的な応援をありがとうございます。
　でも、周りからひゅうひゅう言われて結婚式ののりになるよりはましだ。
「なんでお前とまた、組まなくちゃなんねえんだよ。全く、相手のいる女子と歌うなんてさ」
「私だって、なんでまた貴史となのよ。で、何にする？　いつものあれにする？」
「あれかあ」
　「あれ」とは、どうやら二人の小学校時代、しょっちゅう歌っていた一曲らしい。付き合いが長いとレパートリーも増えるようだ。
「でもなあ、じゃ、新曲でいくか。『砂のマレイ』の主題歌あるだろ、あれでいくか」
「ミーハーなんだから、貴史は」
　やり取りを聞いているだけで顔がにやけてくる。ちなみに「砂のマレイ」主題歌「サンドルージュ」は、男女コンビで歌われている。途中にせりふが入るの で、そこをうまくやり取りするのが、コツと言われている。毎回、作品中で遣われるせりふを用いるので、お互い息が合わないとまぬけに終わる。
　なかなかやるじゃないか。
　やっぱり、これは羽飛と清坂氏でないと、できないよな。
　寝ている振りしてたっぷり堪能させていただいた。

　まだ二十分くらいある。時計を薄目で確認し、タバコの煙を吸わないうよう息を止め、振動にあわせてめまいをこらえていた。目をつぶるだけでだいぶ楽にな る。そうしているといろいろなことが、ぐつぐつ煮込むような感じで煮えてくる。ずっと気になっていたのに、いえなかったことのひとつひとつが、灰汁のよう に、浮かんでくる。掬い取ると、ぺったらした灰汁が、いつしか自分の本音に思えてぞっとする。
　なぐちゃん、本当にあれを使っているんだろうか。
　なんだか、信じられないけど、おかしくないとも思うんだよな。
　やっぱり、夏に、そういうこと、あったんだろうか。

貴史に言われた「ゴム」の話を、無視しようとしていたのに、黙っていると勝手に頭にへばりつく。
南雲も上総たちより一ヶ月早い程度の、「おつきあい」だ。たとえバスの最後方で奈良岡に甘ったれていても、まさか「ゴム」を使うところまでは行っていな いだろうと信じていた。南雲よりも奈良岡の態度がまだ、ぎこちなかったからだろう。そりゃあ、本条先輩のように二股かけて、どちらとも深いお付き合いをし ている人もいないことはないが、でも自分にはまだ関係ない話だと思っていた。
でも、決して、出来ないわけではない。
ふたりがそういう気持ちだったら、場所を確保して、「する」ことは出来るだろう。
今は特に夏休みなのだ。チャンスは山とあるだろう。
もしかしたら、今夜だって菱本先生の目を盗んで夜這いするのも可能だ。
南雲はそこまで強い思いを奈良岡に抱けるんだろうか。

もし今ここで目を閉じているのが南雲で、「サンド・ルージュ」を楽しくデュエットしているのが奈良岡だとしたらそりゃあもう、大変なことだろう。南雲が やきもちやきかどうかはさだかでない。でも、あれだけ仲良くしている相手が、あまり相性の合わない野郎といちゃいちゃされていたら、おもしろくないに決 まっている。もしかして、それを楽しんでいる上総自身が、変なのかもしれない。
普通は、こういう時、もっと妬くんだろうなあ。
俺はもっと、羽飛と清坂氏の漫才を聞いていたいんだけどな。
それでも一応、俺は清坂氏とつきあっていることになっているんだ。
二年Ｄ組の公認カップルってことだ。
事実だけがずっと手の届かないところにあって、自分がまだ間に合わないって感じだ。リレーのバトンタッチみたいな感じだろうか。どんなに走っても、前の走者が離れていくっていうような。で、思わず転んでしまってバトンを落としそうになるというのかな。
夢の中でたまに見る、顔のない少女との戯れ。いつか本条先輩がくれたグラビア写真集でみつけた、ボブカットのたおやかな、哀しげなまなざしをしたシュ ミーズの少女。いくつかの記憶が「ゴム」という言葉から溢れていき、まぶたの裏を走っていく。薄暗い橙色のベールを、閉じたまぶたの奥にみつめながら、い つしか上総はほんとうの夢に落ちていったらしかった。

「おい、立村、もうついたぞ」
貴史にゆさぶられて目を覚ますと、すでに全員、バスの外に出ていたようだった。ホテルの入り口でまだ数人がうろちょろしている。バス運転手さんも、にこやかに振り返っている。
「大丈夫でしたか？」
「はい、大丈夫です」
たぶん、顔はまた、朝と同じくらいひどい状態なんだろう。寝起きの顔はもう、同一人物と思われないようなやつれ方なのだ。上総は貴史に軽く手を引いてもらい起き上がった。運転手さん

に無理やり笑みを作って頭を下げた。
「しっかし、あれだけうるさい中でさ、よくもまあ、寝られたよな。ある意味でお前尊敬するぜ」
「たぶん夜は寝られないかもしれない」
「へえ、お前寝る気でいたんだ。甘いな、それは。宿泊研修一日目の夜は、徹底して付き合ってもらうって約束だろ。な、立村」
　軽口を叩きながらバスを降りると、玄関の方を振り返る女子の姿が見えた。
　美里かどうか、判断はつかなかった。
「しっかし、美里って薄情な女だよな」
「慣れてるから別に」
　一歩踏み出したとたん、急に溜まっていためまいが頭の中をわんわん鳴らした。今ごろになって酔いが出てきてしまったらしい。ぎゅっと貴史の手を握り締め、すぐに緩めた。恥ずかしい。
「いきなりなんだよ。あ、そうか、夢の中でさ、美里と間違えたのかよ」
「そんなんじゃない。たった今、俺が望んでいることはひとつだ」
　顔を上げて上総はゆっくり、貴史に答えた。
「何も考えず、横になりたい。それも当然、ひとりでだ」
「わかった。要はお前、吐きたいくらい具合悪いんだな」

その四　一日目おやすみまでのよしなごと

１　臨時個人面接の時間

　上総は貴史と共に、自分たちの部屋に戻るつもりでいた。一度、クラス全員で大部屋に集合し、そこで夏休みなにをやらかし、どこらへんで遊びほうけたか、最後に宿題はどこまで進んだかなどを報告しあう予定だ。どうせ、三十分くらい余裕があるのだからと思っていた。
　まあ、一応は、研修らしきことも、まぜておかねば。
　上総なりの考慮点だった。菱本先生も待ってましたとばかりにＯＫを出した。

「おい、立村、ちょっと来い」
「なんでしょうか」
　奥歯をかみ締めて理性を保つよう、自分に鞭を入れた。
　気付いているのかいないのか、菱本先生は時計をちらりと見て、次に貴史の方に軽く頷いてみせた。
「悪い、羽飛、ちょっと立村とふたりっきりにしてくれないか？」
「先生、まさかそういう趣味だったのかよ」
　からりと貴史が言ってのける。
「ばかだなあ。俺は完全なノーマルだ」
　よくもまあそんなことがいえるもんだ。貴史に救いの目を向けたが、あっさりと階段を昇ってしまった。
　こんなはずじゃなかったっていうのに。
　ただでさえ車酔いが消えていないっていうのにだ。
　一体何を言いたいんだろう。
　また予定変更して外に出ようなんて言うんだろうか。
　たまったもんじゃない。
　真っ正面に坐ろうとした。菱本先生は首を振って、隣のクッションを軽く叩いた。
　要は、隣に来いってことか。
　冗談じゃない。
　耐えているのは自分が二年Ｄ組の評議委員だというプライドだけだった。冷静沈着でありたいという意地でもある。
　上総はかばんを、菱本先生との間に区切り線代わりに置いた。

「立村、お前、夏休みはどうしてたんだ？」

　言葉はいきなりがらりと砕けた。いつものようにしかりつけたり頭ごなしに怒鳴りつけたり、そんなもんではなかった。
　ぞっとする。気持ち悪い。
「いえ、別に」
　そっけなくも、礼儀は忘れないように答えた。
「お父さんと、どこかに行ったりしなかったのか？」
「別にそういうことはありません」
　ぴんときた。
　もっとも上総の嫌っているパターンだった。
　防御しなくては。
「大変だなあ、お前のうちも、野郎がふたりだったら大変だろう？」
「たまに母が来ますからそのへんは」
　本当のことを言ってやった。
「そうか、お母さんも心配なんだなあ。そりゃそうだな。一人っ子だったもんなあ、お前は」
　だからそう、お前なんてなれなれしい呼びかけするなよな。
　胸焼けで倒れそうなのに、ますますひどくなる。
　一人っ子と、心配と、どう関係があるのかわからかった。
　銃があったらぶっ放してやっているだろう。
　一時期、巷では「教師を殴る生徒たち」という現象が取りざたされたことがあった。青大附中ではあまりそういうのを見かけないが、他の学校では今でもなんとなく起こっているらしいという。菱本先生に対してだけは、そうしてやりたい。
　少しずつ離れようとした。

「まあ、いいだろ。少しくらい。ところでだ、最近立村は、何か悩んでいることとかないのか？」
「別にそういうのはありません」
「ほら、清坂のこととかあるだろ」
　やっぱり来たか。
　クラスで公認カップルになったのは事実だった。でもクラスの連中はさほど変な目で見ていないはずだ。要は一番色眼鏡で除いているのが、菱本先生だってことだ。上総は答えを探して軽く指同志を絡めた。あれかこれかと、迷っていた。
「別に、そういうことはありません」
「まあ逃げるなよ。初めて付き合ったんだろ。清坂は面倒見いいからなあ。気持ちはわかる」
　だからなんだっていうんだよ！
　言葉にならない言葉で口がねばねばしてきた。
「夏休みは、ふたりっきりで会ったりしたのか？」
　よかった。これなら答えは用意されている。

　堂々と答えてやった。
「はい、羽飛と三人で、宿泊研修の計画を練っていました」
「ほお、羽飛かあ」
　にやけだした。何を言いたいのかがおぼろげにわかる。
「羽飛と清坂は仲がいいもんなあ。お前、妬けるだろ」
「別にそういうことはありませんから」
　早くこの不毛な会話を終わらせたい。上総は必死に席の立ち方を考えた。思い切ってぶっ倒れてしまおうか。でも介抱されるのは絶対にいやだった。周りには誰もいない。みんな自分の部屋に戻ってしまっているんだろう。
　羽飛、一生恨むぞ。
　上総の本音を気付かぬかのように菱本先生のお言葉はさらに続いた。

「まあなあ、お前からすると、あの二人は親みたいな存在だろうなあ。羽飛はやんちゃだが性格はあったかいし、清坂は清坂で面倒見がいいもんなあ。立村、お前もあの二人みたくなりたいから、必死に評議委員をやっているんだろうとは思っていたよ」
　顔をほころばせてで上総を見つめてきた。
　うっとおしい。吐き気がする。身をかわそうとした。
「でもな、人間にはそれぞれ向き不向きってものがある。いくらお前が懸命に努力しても、受け入れられる部分とそうでない部分それぞれがあるものなんだ。立村、お前、青大附中に入学してから無理してないか？」
「別にそういうことはありません」
　目を逸らせたまま上総は答えた。
「自分に不釣合いな立場に立ってしまって悩んでなんかいないのか？」
「別にそういうことは全くありません」
　もう耐えられなかった。これ以上菱本先生の側にいたら、自分が何をしでかすか分からない。それこそ、手元にあるバックで殴りつけるか、ソファーをひっく り返すか、握りこぶしで頬を張り倒すか。そのどっちかだ。今まで、自分の手で人を殴ったことは一度もない。大人に対して怒鳴り返したこともついぞない。必 死に押さえてきたからだ。
　しかし、この状態、この現状。
「ありがとうございました。少し気分が悪くなったので、先に戻ります」
「おい、立村、逃げるのか」
　頭の中で何かが破裂するような音がした。
　上総は一気に立ち上がって、まだ微笑みを絶やさずに見上げている菱本先生に一礼した。
　どういう顔をしていたのかは想像がつかない。きっと泣きそうな顔をしていただろう。
　みっともないくらい、顔がゆがんでいただろう。
　上総が自分の中で理想とする、「青潟大学附属中学二年Ｄ組評議委員」の、端正な表情では、決してなかっただろう。

「言いたいことがあるんだったら、はっきり言うんだ。俺はなんでも答えるぞ。ほら、何が言いたい」
「別に何も言いたくありませんから」
　殺意すれすれの感情を胸元のあたりに貼り付けたまま上総は背を向けた。

　こんな言葉に他の連中は感謝したり感動したりできるんだ？
　どうして誰も、一発殴りつけようとかしないんだ？
　第一、どうして二年Ｄ組の担任としてあいつは評判いいんだ？
　絶対、絶対殺してやる。
　それともなにか？　そう思う俺の方がおかしいのか？
　なにが「親のような存在」なんだ？
　「逃げる」だと？

　階段を昇って後、ホテルの部屋をノックするまでの間、誰にも顔を見られないですんだのが救いだった。独り言をつぶやきながら、げんこつを握り締めていた自分の姿は即座に抹殺してやりたいものだった。それは自分がよく知っている。永遠に見せたくない表情だった。

２　サスペンスドラマを見ながら一言

「どうした、立村。菱本先生としゃべっていたんだろ。なにつっこまれた？」
　テレビをつけたままベットにねっころがっている貴史がいた。
　こいつのことを、なんで「親」と思わなくちゃいけないんだよ！
　深呼吸をした後、上総はゆっくりと首を振った。
　口元だけは笑うように。
「羽飛、あのさ」
「なんだ？」
「噂に聞いたんだけどさ、うちのクラスは父兄およびよそのクラスからも人気が高いんだろ。菱本先生のクラスになりたいと願うやつらがいっぱいだって聞いたことある」
　貴史はゆっくりと寝返りを打ち、身を起こした。テレビの音量を低くするため、スイッチをひねりながら、
「ああ、そうだってなあ。だってＡ組みたくさ、成績と進路の話しかしないとこもあるだろ。盛り上がらなくて一人、退学する奴が出たって話を聞いたぞ。学校 行事に全然燃えないところとかも、ほら、Ｂ組なんてそうだったらしい。部活に入っている奴がほとんどだから、委員会活動にも情熱がもてねえとか言って。Ｃ 組はＣ組で、女子が死ぬほどうるせえだろ。それ考えたら、Ｄ組ってさあ、妙に仲いい。俺は好きだぜ。このクラス」
「そっか。羽飛は好きか」

口の中で舌打ちし、ベットの上にバックを投げた。時計を見て、まだ余裕があることを確認した。
「立村は嫌いなのかよ」
「嫌いじゃないよ。たださ」
言ってしまおうか、隠しておこうか、迷った。
テレビの画面をちらりと眺めた。
ちょうど二時間ドラマの山場らしく、探偵と犯人の対峙シーンが流れていた。ナイフを持って脅している女と、冷静に答えを出そうとする男。ストーリーは終盤に入っていると分かる。
「なんていうか、とにかく、こうしてやりたいって思うのは俺だけか？」
指差した。犯人の女に向けた。貴史も画面に改めて目をやり、ほおとため息をついた。
「菱本さんにか」
「あったりまえだろう。どうして羽飛、お前冷静でいられるんだ？」
「へえ、何か言われたのかよ、また。美里と付き合っていることでからかわれたんだろ。まったく、立村はそういうところがうぶだよなあ」
「お前にしょっちゅうつっこまれているから慣れてるさ。それより」
言いたいことを口にするのははばかられる、何かがあった。
貴史の顔を正面からにらみつけてしまったらしい。ぎょっとした表情をして、身を引かれた。
「ごめん、別にお前のことを言ったんじゃ」
「驚いたぜ。立村すげえ目でにらむんだもんな。ま、落ち着けよ」
貴史はガムを一枚差し出した。枕もとにおいてあったらしい。今朝もらったミントではなく、なぜかブルーベリー味だった。すぐに口に入れた。甘いものを舌先で感じると、なぜだか落ち着いた。つばがちゃきちゃき音をさせる。ふたり、その音だけが響いていた。
「犯人、どうなるかな」
「たぶん包丁で自殺すると思うよ」
上総は、予想通りの場面を眺めながら、ぼんやりと血しぶきを見つめていた。絶対に言えないことだけど、たまにこうやってしまいたくなる時がある。人からは大げさすぎると言われるかもしれない。こんなことを考えるお前が悪いと言われるだけだろう。
でも、菱本先生の話を聞いていた時。
もし、刃物を持っていたら押さえられていたか自信がない。

３　てさぐりのクラスミーティング

結局、十分くらいしか部屋にいられなかった。部屋から出て、一階の大広間に向かった。第一日目のクラスミーティングだ。菱本先生には説教をしないよう、遠まわしにお願いしておいたのだが、果たしてどこまで通じているだろうか。
誰か反抗しろよ、とつぶやきながら畳に上がった。

　すでに女子全員、男子の半数以上が足を伸ばしてわやわややっていた。
　菱本先生が上座である。
　背後にはカラオケセットを始め、敷き板がやたらと光る小上がりの舞台。幕の端っこには「祝・浜松組」と金の刺繍が施されていた。
「おい、ここなにか『組』の何かなのかよ」
　貴史が耳元でささやいた。明らかに勘違いしている。
「建設会社の名前だよ。まかりまちがってもまずいとこからじゃないって」
　上総は紫色の幕側にすわり、片膝立て、片膝は伸ばしたまま落ち着いた。全員が揃うまで始められないけれども、たぶん大丈夫だろう。仕切り役は一応自分でやらなくてはならないけれども、たいしたことではない。
　夏休み、みんな何処に行ってましたか？
　何をしてましたか？
　小学校レベルの内容だ。菱本先生が知りたがってるんだからしかたない。前もって電話連絡で
「ちゃんと、一応もっともらしいこと、作っとけよ」
と伝えておいたから、みなそれなりの『思い出』を捏造しているはずだ。
　南雲がひとりで入ってきて、ふすまを閉めた。
　ということはもう全員ってところか。
　すでに奈良岡との行動は別々らしい。
　当然だ。
　まさかホテルの中までも、部屋の中までもべたべたしていたら大迷惑だ。
　さすが次期規律委員長、本能より理性を優先している。
　坐る場所もちゃんと野郎連中と一緒だ。
　数えようと立ち上がり見回すと、美里も一緒に腰を上げた。
　ざっと見渡し、上総に向かって大きく二回、頷いた。
　何を言いたいのかわからなくて近寄ろうとしたら、手を振って押しとどめるしぐさをした。
「いるよ、全員。始めて大丈夫」
「数えたのか？」
「当たり前でしょ！」
　美里はすぐに古川こずえたちと混じり、膝を抱えてさえずりだした。
　菱本先生にそう言ってくれればいいのに、なんであっさりと。

　疑問はあっさり貴史が解いてくれた。
「お前、数えるの苦手だろ。人にしろ物にしろ」
「ああ、確かに」
「去年の遠足の時、お前何回、集合した奴らの頭数、数えなおしたか覚えてるよな。立村」
　答えるしかない。あっさりと。
「五回、よおく、覚えてるさ」

「だろ。その時美里もいたよな」
　思い出した。隣でじっと見ていた様子だったが何もあの時は言わなかったはずだ。黙って、ようやく数が合ってほっとした上総の後から乗り込んでいったはずだ。
「つまり、あいつお前の行動を、頭の中にひとつひとつインプットしてるんだなあ。やっぱり美里は怖い女だ」
　要は、よく出来た彼女がいて幸せだなって言いたいんだろ、羽飛。
「よく出来た評議の相棒がいて、俺は幸せだって思うよ」
　言い捨てて、上総は菱本先生に声を掛けた。まだ声がくぐもっている。響きが荒い。咽がちくりとする。
「先生、全員揃いました」

いわばなおざりに、菱本先生の指名により答えていく形。円陣で適当、一応はみな旅行もしていたようだし、ネタに尽きることはなかった。
「そうか、じゃあ、清坂、お前はどうしてたんだ？　夏休み」
　こそっと一声、
「デートでしょ、デート」
　と響き、ほとんどの視線が上総と、なぜか貴史の方に向いた。笑っちゃいけないけれど、笑いをこらえられない、そんな雰囲気だった。首から上の空気がぼ こっとふくれてあわ立ったみたいだった。隣り合った貴史と顔を見合わせ、すぐによそを向いた。意識してるなんて、思われたくなかった。それは貴史も同じよ うで、反対方向の天井を見上げあくびをした。
　そんな雰囲気を無視できるのが清坂美里たるゆえんだろう。
　ちらっと視線を男子一同に投げかけた後、
「小学校の時の友達と、泊りがけで海に行きました。みんな思ってるとおり、羽飛くんとも一緒ですよ。ええ、みんな、期待してたでしょ！」
　確信犯。お見事だ。
　毒気を抜かれた格好で、みなぼそぼそと隣同士でつぶやき始める女子たち。男子はあまり反応がなかった。
　もちろん、清坂美里の彼氏が誰であるかを、よおくわかっているからだろう。
「ほお、そうか。じゃあ、羽飛も一緒か」
「そうです。でも、ちゃんと、大人もいましたから安心してください。うちらの両親と、あと別の友達の両親と」
「つまりなにか？　家族旅行か？」
　菱本先生が身を乗り出して訊ねた。
「うん、だよね」
　貴史もはっと気がついて、こくこくと頷いた。
　恐るべし。この二人に照れとかはにかみとかは無縁のようだった。いまさら気付いたというわけでもないけれど、上総からしたら貴史と美里とのつながりは、想像を絶するものがある。気

を遣っていないくせに仲がいいなんて、上総の感覚ではまず理解しがかった。
「そうか、お前ら仲がいいなあ」
「だっていつものことだもんね」
　普通だったら貴史がここで、冷やかされる羽目になっていただろう。ひゅうひゅう攻撃だって仕掛けられるはずだ。なのに男子のみ、知らん振りを通している。そんなのどうでもいいから早く終わろうぜ、と言いたい男子達の本音が、鼻息、吐息、鼻水の音でよく、わかった。

　上総はふと、古川こずえの方を覗き見た。
　美里の隣で思いっきり唇をかみ締めている様子だった。上総と一方的下ネタ漫才をかましている時とは大違いだった。もちろん隠しているつもりなのだろう し、立場としては美里と一番の仲良しだ。言いたいこともあるだろう。しかもクラスの大多数は、貴史への片思いを重々知っている連中だ。
　どうでもいいけどさ、入り組んだ人間関係だよな。
　海辺の思い出や、拾った貝殻でこしらえたアクセサリー自慢やら、いろいろ説明する美里の声。
　すでにふたりから聞いていた。
　妬く必要なんて、さらさらない。
　周りだけが上総のいる方に向けて、吐息攻撃をかけてくる。
　意識はしていないだろう。でもなんとなく、「ふわあ」という、様子をうかがうような音。
　別に関係ないだろ、人のことなんだから。
　上総は空気に、色をつけてみたかった。男子から来る吐息と、女子から来る視線の色は、果たしてどんなものなんだろう。円陣の真中に空気がたまって球にな り、やがて光りはじめる、そんなSFドラマを観たことがあった。その球がゆっくりと上総の前に近づいてきて、やがて頭の上に乗っかる。そこでうわっとばか りに液体となってこぼれおちる。頭の上にマーブル模様の液体が零れ落ちる、またそこでぐるぐると首の周りを浮遊しはじめる・・・・。
　俺が感じているのはまさにそれなんだけどな。
　でもそんなこと言ったって、変だと思われるだけだよな。

「立村、どうした、妬いてるのか？」
　かしいでいた頭を建て直し、上総は空気の妄想から抜け出した。まだ首筋にはもやもやとした視線がまつわりついている。声は、菱本先生だった。許されたとばかりに、周りから笑いが小さく沸いた。
　下手に答えるとどつぼにはまりそう。無視した。
「まったくなあ。ほら、立村、お前の番だ。どこ行ったんだ？　さっき答えなかっただろ」
　マーブル状の空気の輪で、咽を締められたようだ。苦しくて痛い。
「どこにも行きません。家にいました」
「海には行かなかったのか？」

「いいえ、ほとんどこの合宿の準備でした」
　海なんて大嫌いだからなんて、ことはさすがに言えなかった。
　暑いだけならまだしも、咽が渇いて熱が出て、動けなくなって、食べられなくなってと、ろくなことがない。一日中ベットにひっくりがえっていて、麦茶を飲みつづけていたなんて絶対に。
「そうか、そうか、だからお前いまだに焼けないんだなあ」
　「妬ける」は「焼ける」と同じ発音だった。
　掛詞ってやつだろうか。
　悔しいことに、上総はそういう言葉の当てこすりについては非常に敏感な性格だった。
　感じたくないのに、かっとなってしまう。
　言葉がみつからないのに、怒鳴りたくなってしまう。
　ねじを巻かれたように、じきじきと音が体中からするのはなぜだろう。
　右手を開いたり閉じたりして、なんとか体の響きを落ち着けた。

「ほら、先生、俺と立村と、美里と三人でさ、やってただろ。宿泊研修の準備をさ。結構大変だったんだぜ。ほとんどこいつが電話掛けたり、ホテル調べたり、観光案内取り寄せたりしてさ。悪いけど、遊んでる暇ねえよな」
　貴史がのほほんとした顔で、割って入った。
　ほうと、菱本先生も反応する。
　貴史は上総にちらっと目をやってから続けた。
「あ、でもさ、立村。お前と一緒に行ったよな。あそこ、青潟市立美術館。ほら、観光するとこ決める時に、美術館に行こうって話になっただろ。あれもどっか行ったってことにならないのかなあ」
　美術館。
　ちろりと何かが火を噴いた。
　咽と、そして目の裏で。
　上総は目を閉じてうつむいた。思い出すようなふりをした。
　がっと閉じると、買った絵葉書と、静かな館内の冷たい空気がよみがえる。
　そして思い出したくないことまで思い出してしまう。
「ああ、行ったな。やたらと直線が多い画家のだよな」
　かろうじて言葉を搾り出すと、貴史は頷いて答えた。
「現代抽象画展示会っていう、あれ。先生も観にいかなかったのか？　な、あれすげえおもしれかったよなあ。いろんな線がさ、変なものいっぱいこしらえてて見ているうちにいろんなことが思いついてくるんだよ。な、美里、お前もああいうのり、好きだろ」
「だからといって美術館の中でやたらとしゃべりまくるのはやめようね貴史」
　いかにもうんざりといった風に、美里が答えた。貴史のほうに人差し指をさし、数回振りながら続けた。
「なんでだよ。誰もいなかったじゃねえか」

「あのさ、あんたが芸術的感性に目覚めたのはよっくわかったのよ。それは認める。でもでもね。なんで見張っている美術館のお姉さんたちの前で、『これは野 良猫の家』『ここは青大附中の影にある謎の銅像に似てる』とか『これは鈴蘭優が歌う時のセットに使うといい』とか、意味不明なことをしゃべりまくるのはや めてよね。人がいなかったからよかったけどさ、ひざ掛けかけて坐ってた美術館の人たち、ずっと私たちを変人って目で見ていたよ」
　上総も含まれているはずだ。何にも話していないのに、貴史と美里だけがひたすら騒ぎ立てていたので、上総の方に「少し静かにしなさいや」といわんばかりの、冷たい視線を覚えていた。
「いいじゃねえか。素直な感想を言ってるだけなんだからなあ。そうだろ、立村」
「立村くんはああいうのり嫌いでしょ。あまり関心なかったみたいだもんね」
　いつもそうだった。貴史と美里が話し出すと、まわりがなくなってしまう。最初は「羽飛くん」と、ご丁寧に「くん」付けをしていたのに、関心のあることになるやいなや周りの視線も気にせずにしゃべる、語る、身を乗り出す。
　隣には複雑な気持ちでいるであろう、こずえがいるのにだ。

　わけのわからなかった幾何学模様の絵画や、現代美術と呼ばれる針金をぐしゃぐしゃにした「オブジェ」。ただキャンバスを真っ黒く塗りたくったよう絵。ペンキをぶちまけたような、見た目手抜きにしか見えないもの。文字だけを耳なし法一のようにずらっと書き並べたもの。
　上総は何も言わなかった。
　口にするとすべてが壊れてしまいそうだった。
　いつものように、無表情のまま、膝を抱えて坐っていた。

４　めにみえる危険性

　大抵黙っていると噛み付きたくなる気持ちも落ち着き、冷静沈着な自分に戻れるはず。だがミーティングが終り、夕食時刻を迎えても、上総はまだ、元に戻れなかった。
　もちろん人前で怒鳴り散らしたりとか、菱本先生に味噌汁をぶっかけたりはしない。精一杯の努力でもって、普段どおりの自分で振舞ったつもりだった。あくまでも、つもりだが。
　でも隣の貴史をはじめ、離れた席の南雲、さらには美里とこずえまでもが帰り際、寄ってきたのはどういうことだろう。

　廊下で呼び止めた美里は、
「どうしたの？　私立村くんが何かしでかすんでないかと思って、気が気でなかったんだから。あんたが菱本先生嫌いなのはわかるけど、でもああまでにらまなくたっていいでしょが」
　うなずくこずえの姿もあった。
「全くいつものことながら、立村、あんたはほんっとガキだねえ。菱本さん、思いっきり勘付いていたよ。さっき私たちにもね、聞いてきたんだよ。『立村の様子、なんだか怖くないか？』って」

　いいかげんにあしらって部屋に戻ったら、別部屋の南雲から内線電話が入った。貴史が風呂に入っている間だった。
「あれ、りっちゃんさあ、これから夜の散歩ってやるらしいけど、行く気あるのか」
「どうしてそんなことを聞くんだ？」
　上総の疑問にあっさり南雲は答えてくれた。
「いや、なんとなく菱本さんに闇討ちくらわせたさそうな顔して、ずっと箸の先、かじってただろ。先、はげてないか？」
　まずい、完全に見られている。

　整髪剤であらためて前髪をつんつんさせた貴史は、ぼんやりと坐っている上総に向かって一言。
「まさかと思うけど立村、お前凶器とか、持ってきてたりするか？」
　なぜ、と訊ねる前に答えが返ってきた。上総のかばんを軽く持ち上げ、ちろりとにらみ、
「気持ちはわかるけどな。何でも言っちまえばいいのになあ」
　なにをだよ、と言いたいけれど、図星を指されていることはわかっていた。
　貴史の言葉には投げやりだけど柔らか味もこもっていることを知っている。
　気持ちいいかどうか、許せるかどうかは別としても。
　言い返すなんてことはできなかった。
　すぐに風呂に入りたかった。ユニットバスだ。頬骨のあたりが妙に熱くてならないけれど、きっと日焼けしてしまったせいだろう。頭がまだわんわんと鳴って いるけれども、ちょっと熱が出た程度だろう。これから夜九時前に、菱本先生と一緒の夜のお散歩があるのだ。シャワーを浴びた。

　血が氷付けになってしまったようだ。
　これって寒いってことじゃないだろうか？
　今は八月だっていうのに。
　水を浴びるまでは熱っぽいくらいだったっていうのに。
「羽飛、なんか寒くないか？」
　風呂から上がり、上総は靴下を脱いではだしになっている貴史を探した。いないと思ったらなんのことはない、歌謡ベストテン番組を見ているのだった。当 然、愛する鈴蘭優のデビュー曲を聴くためだ。たぶん前もってチェックを前もってしていたんだろう。邪魔するなという風だった。
　上総はジャケットを羽織りなおした。
「寒い？　どこがだよ、立村お前やっぱり感覚狂ってるぜ。それよかほら、優ちゃん、可愛いよなあ。ああいう女子がどうして青潟にはいないんだろうなあ」
　上総からしたら「音程が微妙にずれているのはどういうことなんだ？」くらいだろうか。そん

なこと言ったら殺される。熱狂的ファンには、不要に逆らうべき ではない、ということを、上総は評議委員会で経験していた。お元気だろうか。結城先輩。相変わらず女性アイドルグループの追っかけしているんだろうか。
「まだ時間あるか？　ちょっとだけ横になりたい」
　答えを聞かずに上総は布団にもぐりこんだ。格好は昼とほぼ同じだったけれども、開襟シャツだけは替えておいた。一枚だけでは寒すぎる。ジャケットを羽織っても温まらない。しかたない、薄くてもタオルケットに包まって落ち着きたかった。
　蓑虫感覚でもぐりこんだけれども、体温の感覚が冷え切ったままだった。
　骨だけがアイスキャンディ状態になってしまっているんじゃないだろうか。小学校時代氷に塩をかけて、試験管でアイスキャンディーを作る実験をしたことがある。塩をかけた氷には触れてはいけないと、きつく言われたことがある。手がくっついて大変なことになるからと。
　まさに今は、氷の身体に塩をびっちり塗りこめられたようだった。
「羽飛、悪い、なんかタオルかなにかあるか？」
「あるけどどうするんだよ」
「頼む、寒すぎる、俺このままだと、凍え死ぬ」
　鈴蘭優の黄色いフリルミニスカートに見とれていた貴史は、めんどくさそうな返事でかばんの中を探していた。まだ上総に背を向けたまま、下半身をベットに残したまま、上半身をかばんの上に傾けたままだった。
「ほいな、お前寒いって言葉、八月に使うもんじゃねえだろ」
　寝返りを打って貴史があらためて、上総のベットに投げてよこした。
　受け取った時、急に貴史が身を起こしはだしのまま、上総の顔を見下ろした。靴は履いていなかった。タオルケットの上からさらに貴史のタオルを巻いて暖を取っている上総の様子は、そりゃ変だろう。自分でもそれはよくわかっていた。
　手を置き、貴史は上総の頭をかるくたたいた。
　響く、やめてほしい。
「立村、お前、それって、風邪ってやつじゃねえの」
「かもしれない」
　歯を鳴らしながら上総は答えた。
「それでこれから夜のお散歩、行こうなんて、思ってねえよな」
「休めたら休みたいに決まってるだろう」
「そいじゃ、休めよ。ほら、俺のも使えってば」
　自分のベットにかかっている、まだ形崩れないままの薄っぺらいタオルケットを貴史は一気にひっぱがした。二つ折りにして、ざくっと上総にかぶせた。
　顔が隠れた。
　光が隠れて、視界が橙色に染まった。
　遮られたからだろう。
　まだ濡れている髪のぬめりが頬に触れて、気持ち悪かった。

「じゃあ、行くぜ。菱本先生には言っとく。どうせお前、朝から死んだ魚の目してただろ。誰もが納得するってばよ」
「羽飛、助かる」
　顔をかろうじて出し、再度タオルケットを巻きつけなおしつつ上総は感謝の一礼をした。
　全く寒さを感じていないであろう、貴史。ふと、ドアの前にある鏡をちらとのぞき、前髪をもう一度つんと上げた。一言。
「今の立村、何やらかすかわからねえもん。怖えよ」

　いつも通りの沈着冷静な自分は、もう演じられないってことだった。　二枚重ねると、少しはましだ。
　上総は鼻を覆うくらい深く、タオルケットを巻きつけた。
　勝手に唇からもれた言葉はひとつだった。
「情けないよな……」

その五　丑三つ時のよしなごと

１　丑三つ時にそなえて

　くるまっているうちに眠くなり、気が付いたらすでに十二時過ぎだった。つまり、四時間以上死んだように寝ていたってわけだった。淡い橙色のライトがドア、天井、そしてライティングデスクの側に設置されている。まぶしくないけれど暗くないのは、それだけだからだろう。
　だいぶぬくもってきたが、まだ動くのはきつかった。
　上総はデジタル表示の時計が「１２：４５」で光っているのを確かめた。蛍光色、緑色。目覚まし付。
　あとで朝六時にセットしておかないとまずい。
　たぶん羽飛はそんなこと、していないだろうしな。
　隣のベットには戻っていないようすだった。
　もどってきたって、上総が貴史のタオルケットを奪い取っている状態だから、寝られないだろう。たぶん、真夜中起きている連中の部屋にもぐりこんで、トランプか、はたまた宴会か、なにかやっているのだろう。菱本先生もその辺は大目に見てくれているようだった。
「酒とタバコ、それだけは持ち込むな。いいな」
と、旅行が始まる前にしつこいほど繰り返していた。
　裏を返せば、それ以外はまあ、いいかってことだろう。
　修学旅行や、他クラスと一緒の宿泊研修とは違うところだ。

　夏休みに唯一出かけた旅行らしきものといえば、評議委員会の夏合宿だった。青潟市内の青少年宿泊施設を借りて行った。四人部屋だった。上総と本条先輩とは一緒だった。同室のはずだったふたりが、別の部屋に泊りこんでしまったので実質は二人部屋だった。
　どんちゃん騒ぎをしたけれど、本条先輩の厳命もあってか、酒タバコの持ち込みは一切なかったはずだ。表の活動において、本条先輩は決して脚を出すようなことをしない。

　本当だったら上総も一緒に、貴史たちのグループでだべっていただろう。夜がふけるにしたがって話もだんだん下半身中心になるだろうし、それなりにすけべなネタも出てくるだろう。
　夜、何回やるのか。
　どんな写真集を使っているのか、とか。
　お前はいったい誰が好きなのか、とか。
　すでに経験したのか、とか。
　黙って聞いているうちは平気だけれど、自分にとばっちりがくるとたまらなく腹が立って逃げ出したくなるような話題ばかりだ。
　いつもなら貴史がまぜっかえしてくれるかなにかする。でも、すでに「彼女もち」とされている上総には誰も手加減してくれないだろう。

清坂とはどこまでいったんだ？
清坂さんとすけべなことしたいとか思ったことないのか？
夢でいっちゃったりしないのか？
せめて写真使ったりしないのか？
具合悪くなってよかったことというと、そのくらいかもしれない。
普通だったらきっと、一緒にオールナイトできないってことが悔しいのだろう。
一人で考えている方が落ち着くのはなぜなんだろう。

咽が渇いてたまらないので、冷蔵庫に入れておいた缶ジュースを取り出した。セットされている飲み物は高いので、ちゃんと自動販売機でまとめ買いしておい たのだ。うまく使うとちゃんと入る。ただ、冷蔵庫の温度があまりにも低いので、置き場所によってはシャーベット化していたりもする。幸い、オレンジジュー スを振ってみると、ちゃぽちゃぽと「水」らしい音を立てていた。しゃりしゃり鳴った時はまずいと、経験上知っていた。頬につけて楽しんだ後、一口飲んだ。
同時に時計を見た。
目覚ましだ。
思い出すものがあった。忘れるとこだった。
確か、二時だったよな。起きるのは。
上総は説明下敷きらしきものを時計の下から抜き出し、四回繰り返して読んだ。平たいデジタル式時計のボタンを何度か押した。「２：００」に鳴るようセットした。
びんと耳もとで鳴りそうな、冷たいジュースを全部飲み干した後、もう一度横になった。
一枚タオルケットを貴史のベットに戻すのだけは、忘れないようにしておいた。

うとうとしながらも、神経だけはじりじりしていたのだろう。目覚ましが鳴る直前に目覚めた。
隣のベットに貴史は戻ってきていない。
電子音が三回、ゆるく鳴り、やがて強烈な響きに変わる。かさかさした空気が咽に染みる。さっきよりは少しだけ楽だった。
上総は腕立て伏せの要領で起き上がった。一度果てた後、もう一度回転して身を起こした。
頭の中はまだ、心臓の音が耳もとで響いている状態だった。
目覚めた直後はそんなに痛くなかったのだけど、起き上がったとたん、急にうるさく響きだした。押さえると、耳たぶが熱かった。
約束は、やっぱり果たさないとな。
枕もとのライトをつけて、かばんから「しおり」を取り出した。
すでに折れ目がついている「ホテル内部屋割表」ページを開く。
見るまでもない。少し離れているけれど、一番奥の部屋だった。
脇には自動販売機が並んでいる。

　たぶん貴史たちは真中あたりの部屋でこっそり盛り上がっているに違いない。もしくはベットを占拠して寝ていたりして。できればそいつらとは顔を合わせたくなかった。
　上総はぼろ雑巾状態で眠っていると思っているはずだ。

　金沢と水口。部屋のメンバーは二人だった。
　オールナイトしているんだったら問題がない。できればそれがベストだと、前もって伝えてある。
　でも、もし寝てしまっているとしたら。
　上総の責任は重い。
　あれだけ宿泊研修に参加するのを嫌がっていた水口を説得したのだ。

　はっきりした理由を言わずに「行けない、行けない」を繰り返す水口に、上総は何度か電話を掛け、何気なく、
「もし、間違っていたらごめん。一年の時に菱本先生が起こしに行ってただろ。夜中にさ。もしかしたら、夜、トイレかなにかがまずいのか？」
　かまを掛けてみた。宿泊研修の時に、菱本先生が真夜中、自分たちの部屋にいきなり入ってきたことを覚えていたからだった。図星だったらしく、水口は黙り込み、鼻をくすんくすんと言わせはじめた。
　しばらく上総は受話器の向こうの様子をうかがっていた。
　言葉が返ってこないので、思い切って続けた。
「なら、さ、俺が起こしに行ってやるよ。二時くらいにこっそり、気付かれないように行くからさ」
「いるけど、でもやだよ」
「誰にも気付かれないようにするってさ。約束する」
　もし笑う奴がいたら、俺があとで罠に掛けてやるからな。
　心の中でつぶやき、なんとか参加の意志を確認した。

　寝汗をかいていたので、まずは浴衣に着替えてはだしのまま、靴をはいた。白地に紺でホテル名がプリントされている。ローマ字だった。なぜかそろいで帯も用意されている。濃紺の、無地ものだった。
　正式な結び方を一応は知っているけれど、適当に巻きつけた。蝶結びだけはしなかった。はだけないように胸を掻き合わせ、きっちりと着た。
　音を立てぬようにそっと廊下に出る。
　いくら防音されているとはいえ、向かい側の女子部屋からはかすかに笑い声が聞こえた。美里とこずえの部屋は、ちょうど水口たちの向かいだった。寝ている かもしれない。それとも女子同士で盛り上がっているんだろうか。古川こずえとコンビだったら、また下ネタできゃあきゃあ言っているのかもしれない。赤い じゅうたんを足音させないようそっと踏みしめた。音がするのは

浴衣のすれるしゃかしゃかした響きだけ。ぶうんと聞こえるのは、自動販売機から。本当はもう一本、買いたかった。でもその音が響くとまずいだろう。つばを飲み込んでがまんした。
一歩、一歩、めまいを感じながらも歩く。
さっきまで寒くてならなかったのに、なぜか手だけは熱い。
背筋だけが冷たい。

真中あたりで、南雲らしき声が小さく聞こえた。
やっぱりあのグループも集まっているのだろうな。
音楽ネタだろうか。
そっちには一回混じってみたいんだけどな。

隣の部屋では、はっきりと貴史の声が聞こえた。
意味がよく通る。
立ち止まってみる。
「だったらなあ、言っちまえよ。お前惚れてるんだろ！　その先輩にさ」
「・・・・・・」
「駄目でもともとじゃねえかよ。どうせ向こうは一年たったらいなくなっちまうんだしさ」
「・・・・・・」
「あ、そうっか。お前、附属高校進むんだよな。あとをひくからいやかあ」
仲間内での恋愛相談を受け付けているのだろう。

ようやく、水口たちのいる部屋の前に来た。
おしゃべりしていたらノックだけして帰ろうと思っていた。
ドアは黙っていても開くようになっている。
じっと、ドアの前で集中する。
何も聞こえなかった。
じゃあ、やっぱり、寝てるってことか。
立ち止まってもういちど、念を送って見る。
一点に意識を集中して、見つめつづけると反応するかもしれない。
でも、全く物音なし。
すい君、起きててくれよ。
ふいっと、振り返ったときだった。

２　最悪の展開

いきなり反対側のドアが開いた。

一番奥、一番遠い場所。
上総と貴史の部屋と隣あっているところ。
まさか、奴か。

上総は後ろずさりしながら、自動販売機の側に寄った。本能だった。とにかく部屋のまん前でうろうろしてたら何を言われるか大体想像がつく。頭がぼおっとしてきた。ポケットを探そうとしたけれど、着ているのが浴衣だということに気がついて、手の行き場所を失った。
見覚えある顔がちらりと見える。天井の淡い明かりで、影絵のように写っているようだった。
上総の姿を見咎めたのだろうか。影はすぐにドアを閉め、こちらに近づいてくる。
万事休す。
こんなことだったらドアの前でうろうろしないで、さっさとすい君の部屋に入ってしまえばよかったんだ。全く、何考えてるんだろう、俺は。
首筋の方がきりきりと痛む。すぐに倒れこみたい。でも立ってなくてはいけない。とにかくジュースを買う顔をして待つしかない。こんな時間だっていうのに。怪しまれないわけがない。それによりにもよって。
女子側の部屋は、清坂美里と古川こずえのいるところだ。
ああ、でもすい君とは約束したんだ。絶対に気付かれないようにするってさ。絶対、守らなくちゃいけないんだ。だったら、これしかない。
上総は息を吸い込んで、女子の部屋のノブに手をかけた。音をさせぬよう、ただ、軽くにぎりこむ感じでだった。手の平に冷たく、ぶつかった。

「どうしたんだ」
ドアのノブを握り締めたままの上総に、菱本先生が声を掛けてきた。
静かだった。見たらわかるだろうに、この行動だったら、何をしでかそうとしていたかなんて、簡単に誤解されるだろう。
女子の部屋だ。
しかも一人は自分の「彼女」だ。
真夜中に一人でこっそり、ドアのノブを握っているなんて。
考えていることは一つしかないではないか。
そっと手を離して、ぶらんとぶら下げた。言い訳をしようと、うつむきながら考えた。横でぶうんと、自動販売機が鳴った。
「咽が渇いたので、ジュースを買いにきました」
嘘がばればれだ。全く持って最悪の展開だ。

てっきりすごい勢いで怒鳴られるかと覚悟していたが、やはり夜中の二時過ぎだ。気を遣っているのだろうか。菱本先生はしばらくじっと上総の手と顔を交互に眺めていた。
「お前、体調を崩しているんだろう。早く部屋に戻りなさい」

「わかりました」
　菱本先生は上総の背中を軽く叩いて、促した。優しい感触だった。
　片手で額に触れ、
「思ったよりひどい熱だな」
　とひとりごちた。
「いつからこんな状態だったんだ。ホテルについてからか？」
「わかりません」
　支えられるのを頑固拒否して上総は、小さな声で答えた。
　別に反抗したわけではない。咽がだんだんひりひりしてきて、口を開くのが苦痛だっただけだった。
「無理するな。立村。お前がする予定の仕事は、俺が全部承っている。安心して寝てろ」
　言われた意味がよくわからない。次の朝、バスの中でのしきり役について心配してくれているのだろうか。首を振った。
　先生に見えない片手だけを握り締めうつむいたまま、
「大丈夫です。明日までにはなんとかします」
　じゅうたんをじっと見下ろしながらつぶやいた。自分でも説得力のない言葉だった。
　菱本先生は、唇の端に、何か言いたそうな笑いを浮かべながら、
「でも、今はゆっくり休め。水口のことは、ちゃんと俺が面倒を見るからな」

　水口のこと？
　どういうことだ？

　だって、あのことは、すい君は俺にしか話してないって言ってただろ？
　自分でもどうしてこんなに動揺しているのかわからなかった。鐘の音が鳴り響くがごとく、上総の耳もとでは空気をばんばん揺るがすような音が聞こえ、ふらついた。がまんできず、立ち止まった。
　菱本先生が心配そうに顔を見下ろした。
「立村、本当に大丈夫か？　朝になったら病院に行ったほうがいいぞ」
「いいえ、大丈夫です」
　なぜ、水口のことを知っているのかなんて、口が裂けても訊ねたくなんてない。
　はたして水口が自分のおねしょ癖について菱本先生に相談していたのかどうかもわからない。ただ、話をしていた段階で、水口が泊りがけの旅行にいけないと悩んでいたことだけ、本当だと思っていた。惨めな思いをしていることだけは、十分上総も想像できた。
　だから、なんとかしてやりたかった。
　自分がもし同じ立場だったらどんなに苦しいか、惨めか、そのくらいの想像力は、上総も持っているつもりだったから。

なのに、どうしてだろう。
まさかすい君は菱本先生にも同じことを相談していたのか？
同じくらいの時間に菱本先生も起きて、すい君を起こそうとしていたのか？
それで、俺と鉢合わせして、ってことか？
着崩れた浴衣でふらふらしていて、下手したら女子の部屋に夜這いしようとしている顔を、見られたってわけかよ。

馬鹿だよな、俺って本当に馬鹿だよな。

３　最悪の展開その二

「やっぱりな、羽飛はいないのか。たぶんあいつはバスの中で爆睡するな」
自分の部屋までたどり着き、さっさと布団にもぐりこむつもりだったが、菱本先生はまだくっついている。うざったい。早くどっかいけ、と言いたいのを上総はこらえた。敬語を使った。
「もう大丈夫です」
「薬をもらってきてやろうか」
「いつも持ち歩いているのがあります」
さっさといなくなってくれればいいのに、菱本先生はわざわざ水を汲んできて、冷蔵庫からジュースを一本抜き取った。「この分は、俺が払うから安心して飲め」とのことだった。
「本当に、もう大丈夫です」
再三出て行ってもらうように頼んだが、全く効果なしだ。
かくなる上は、貴史が部屋に戻ってきてくれることを祈るのみだ。
でも、あの恋愛相談が長引くようだとまだまだ先だろう。
菱本先生は教え子がひどい熱だと聞いたこともあって、どうしても気になってしかたないのだろう。いい先生だと美里も貴史も言う。特に貴史は
「俺さあ小学校時代の担任が最低でさあ。俺たちのことを目の仇にしてるんだ。卒業式の時も、俺と美里の方を無視して、記念写真を撮ろうとしてたんだぜ。まあいいけどな。それから考えたら、菱本さんはましだと思うなあ。立村、どうしてここまで菱本さんが嫌いなんだよ」
という。
わからない。自分でもここまで人間を嫌うことは少ない方だと思う。
テレビドラマに出てくる熱血教師や理想の教師はこういう感じなのだろう。わあっと喜んで、怒鳴って、涙して、感情の起伏が激しい一方で、少々大げさすぎるくらいにスキンシップを求めてくる。
美里が言うには、
「女子からするとね、ちょっと触りすぎって気もするけれどね」
とのことだが、嫌がっている連中はそういないようだ。
スキンシップか。

ふたたび菱本先生が、タオルをぬらして顔を冷やしてくれた。
指先が触れる。爪の厚さが頬に伝わる、と同時に顔を背けたくなった。
ああ、これだ。俺が何よりもいやなのは。
誰にも触られたくないんだ、俺はただそれが言いたいんだ。
ずっと小さな頃から、そればかり言いたくて、だから、だから。
まずい、また、やってしまう。
歯を食いしばり上総は枕に顔をうずめた。自分のどこかにスイッチのようなものがあり、そこに触れられるとどうしようもなく涙が流れてしまう。そんな瞬間 がいつもやってきた。触られること。入ってこられるころ、すべてだった。菱本先生のすることはすべて、自分の中の起動コマンドを打ち込まれるようなもの。
貴史や美里の言葉やしぐさにも感じることがあるけれど、それは耐えられた。
でも今の上総には、耐えることができなかった。
「おい、立村、落ち着け。どうした。苦しいのか？」
背中をさするようにして、菱本先生の慌てた声が聞こえる。
「すみません、なんでもないです」
荒く息を吐きながら上総は菱本先生の触る手から逃れようとした。でもだめだった。心配してくれているから、教え子だから、生暖かいやさしさをたっぷりと 浴びせてくれる。それがどんなに上総にとって逃れたいものなのかなんて、一生分からないんだろう。どんなに嫌だと言ったって、伝わらないんだろう。
子供の頃からそうだった。

４　かばってくれたのか、それとも

「あれ、先生、なにしてんの」
ドアを開ける音が聞こえ、聞きなれた間延びした貴史の声がした。
「ははあ、さては立村となんか悪いことしようとしてたんじゃねえの。やっぱりホモなんじゃねえのか」
にやけているような、少しびりびりとくるような声の響き。
上総はタオルケットを頭からかぶって自分の視界を真っ暗にした。
「あのなあ、羽飛、今の時間何時だと思ってるんだ。二時過ぎだぞ。ちゃんと『しおり』にも書いてあっただろ。『消灯時刻は夜十時』だってな」
「そんなお堅いことは言いっこなし。それより、どうしたの立村」
上総が答えようと、そっと顔を出したとたん、菱本先生は軽く額を抑えて、言葉を封じた。
噛み付いてやろうか。
「体調をかなり崩しているみたいだな。こりゃあ、病院に連れていった方いいかとか思ってな。羽飛、悪いけど今夜、様子みてやってやれないか」

「別にいいけど。まあ、こいつ朝から具合悪そうだったもんな」
　貴史は当然のように頷き、にやっと笑った。
「でもさ、先生、一つだけ条件ほしいんだけどいいかなあ」
「なんだ。どうせお前らのことだ、朝食のゆで卵がほしいとかそんなもんだろ」
「食い物はいいよ。っていうかさ、誰も俺たち悪いことしてねえから、見回りは勘弁してほしいんだ」
　目のところまでシーツを下げて上総は様子をうかがった。貴史の姿はどことなく、眠そうだったけれども口調はしっかりしていた。
「先生、俺たちたばことか酒とか持ってきてねえから、その辺はわかってくれよな。たださ、今夜でないとしゃべれない内容とかもあるんだよな」
　ため口を叩くのも、貴史の計算だろう。菱本先生は「先生」と敬われるよりもむしろ、「仲間」として扱われたいタイプの人間だろう。
　掴んでいる貴史は突く。
「ほんとうか？」
「当たり前だって。気になるんだったらさ、明日の朝にでも持ち物検査してみればわかるって。それに、変な話だけど、女子の部屋に行こうなんていう奴もいなかったと思うんだ」
「こいつはさっき一番端の部屋の前にいたけれど、違うと思うのか？」
　この辺は軽い口調の菱本先生。感じからして、本気で怒ってるわけではないだろう。からかい半分なんだろう。冗談なのだろう。それは聞いている上総にもわ かる。でも、あまりにもあまりだ。まるで自分が、一番端の部屋に夜這いしに行ったということを、貴史に知られるはめになる。
「一番端って、ああ、美里のとこか」
「そんなんじゃないって！」
　かろうじてかすれた声で言い返した。
「大丈夫だって、こいつそんな度胸ねえよ。むしろ美里の方からこちらに来るなら可能性はあるかもしれねえけどな。ま、でも大丈夫だよ。先生。俺たちその辺 は頭働くから。菱本先生に『不祥事』のために免職なんてこと、させないようにするからさ。二年Ｄ組はその辺、団結力強いんだから」

貴史の本気なんだか冷静なんだかわからない言い方に、なぜか菱本先生も納得したようで、ベットからようやく離れた。
　暑苦しい手がなくなっただけでもほっとする。
　ほんの少しだけ、シーツを握り締めた手を緩めた。
「やっぱり、羽飛が裏のトップだなあ、いやあ、負けた」
「大丈夫だって。俺もそんなばかじゃねえから。じゃあ、おやすみなさい」
　その後何か二人で、上総に聞こえぬよう話をしていたようだった。
「だだっこ」

　だとか
「全く何を考えてるんだか」
とか、上総に関する低い評価のお言葉であることは確かだった。タオルケットに噛み付きたいのをこらえながら、背中を丸めているしかない自分が情けなかった。

　あいつら、いったい俺が何をしたっていうんだ？
　こんなに馬鹿にされるようなこと、してないっていうのにさ。
　ああ、そのとおりさ。どうせ俺は評議委員としての評価も低いんだろうし、自分ができないことをやろうとばかりしてるって思われているんだ。それはよくわかってる。本条先輩にも言われてる。本当は羽飛の方がずっと、信頼を得てるってことだって、わかんないわけじゃないさ。
　でもなにか？　人の目の前で、よく
「だだっこの面倒を見るのは大変だ」
とか
「こいつにそんな度胸ねえよ」
って言えるよな。
　そういうと周りの連中は口を揃えるさ。それは俺のことを、みんなが心配してくれているからなんだって。ほっておけないからなんだって。そうさ、いい奴な んだ。みんな善意でしてくれてることなんだ。わかってる。いやってほどわかってる。それを受け止められない俺が馬鹿なんだ。
　しょうがないじゃないか。触られようとすると寒気がするし、一対一で語りかけられると吐き気がする。菱本先生と話をしている時は自分の感情を、ぱたっと止めた状態にしてしゃべらないと、かなりまずい状態になる。ほんと、一瞬、さしてやりたいって、そう思った。
　しまった。すい君を起こすの忘れてた。
　最後の手段だ、電話で起こそうか。
　内線番号は０発信で、部屋番号をまわせばいいんだよな。最初からそうすればよかったよ。でも一緒に金沢も寝てるんだし、かえってまずいかな。
　上総は貴史が菱本先生と話し込んでいる間に、すばやくダイヤルを回した。二回鳴らした。
　貴史がけげんな顔で振り返ったため、着信確認はできなかった。

「立村、お前さ、今朝から変だぞ」
　自分のベットに腰をおろし、貴史は上総を見下ろす格好を取った。もどしてあったタオルケットをもう一度、上総の方に投げてよこした。
　答えたくもない。答える気力もない。
「お前が菱本さんのこと毛嫌いしてるのはものすごくわかるけどさ、何もああまで荒れることはねえだろ。ほっとけば、おとなしく帰るだろってさ」
　それに、と付け加えた。
「どうして、美里の部屋の前まで行ったんだ？　あと、今さっきかけた電話、どこだよ。お前す

ぐ切ってしまったから聞かねかったけど」
　理由はどれも一つだ、でも答えられない。
　上総はかろうじて答えた。
「ごめん、理由は言えない。菱本さんたちが想像しているようなことじゃない」
　激しい頭痛でこめかみから後頭部がびんびんと響く。遠慮なく貴史の言葉はハンマー化していく。
「ばあか。言っちまってもいいのにな。女々しい奴だぜ」

　本当だったら反応してすべてぶちまけてしまいたかった。
　自分の積み重ねてきたものが、みんななくなってしまいそうだった。
　二年近く、自分を評価してくれたという「評議委員」の証を、自分なりに精一杯、出してきたつもりでいた。どうすればみんなの役に立てるのか、どうすれ ば、みんなが気持ちよく旅行できるのか、どうすれば、みんながかつての自分とおんなじ思いをしないで過ごせるのか。そればっかりを馬鹿みたく考えてきたつ もりだった。
　でも、菱本先生の視線は相変わらず、小学校時代の上総を見つめるものと同じだったし、貴史の言葉もみな、
「いい奴なんだけど」
という言い訳のもと、受け入れなくてはならないものばかりだった。
　言い返す方法が、上総にはわからなかった。
「羽飛、ごめん。もう大丈夫だから」
「どこが大丈夫だよ。お前明日、これだったらバスに乗れねえだろ。俺も残るからお前、ここで寝てろよ」
　上総が言葉を返す前に、貴史は手元にあるガーゼのハンカチをぬらし、枕もとにおいた。しぼっていない。水浸しだ。
　礼も言わず上総は額に乗せた。水が滴ってくるのが気持ちよくて、一気に眠りについた。

その六　朝の日差しのよしなごと

１　水銀を噛み砕きたい朝

　目が覚めた六時過ぎ、まだ熱は下がらない。
「立村、起きたか？　お前、まだ顔色死人色してるけどなあ」
　顔を洗って戻ってきた貴史に聞かれ、身体を起こそうとした。
　でも動けなかった。
「本当に、まずいんじゃないか、お前」
「すごくまずいと思う。朝食、俺行かないから」
「わかった。あとでなんか食い物くすねてくるから心配するな」
　かすかに腹の虫が鳴いているのが聞こえた。夜あれだけ遊んでいたというのに、腹のすき方はただものじゃないようすだった。貴史は急ぎ早に食堂へ降りていった。

　単に食べたくないだけだというのに。薬の加減か胃がむかむかする。体調はぼろぼろ、しかも今日は長丁場だ。絶対バスに酔ってしまうだろう。酔い止めが効くとか聞かないとかいう次元の問題ではなかった。
　ドアがノックなしに開いた。貴史がもどってきたのかと思って知らん振りをしていた。
「おい、立村、大丈夫か」
　この声を朝っぱらから聴きたくなかった。菱本先生だ。
「大丈夫です。たぶん。昨日はありがとうございました」
　棒読みで上総は答えた。
「ちっとも大丈夫じゃないだろう。ほら、無理に起きるなよ。体温計、計ってみろ」
「いいです、自分のことは自分でわかりますから」
「馬鹿野郎、黙って体温計を加えろっていうのがわからんのか」
　わざわざフロントから借りてくれたらしい。箱入りの水銀体温計だ。しかたなく横になったまま水銀部分をくわえて天井を見つめた。五分くらいこうしていなくてはならなかった。
　口が利けない。舌を頬の粘膜に押し付けながら、上総は菱本先生のお説教を聴いた。

「お前が評議委員として責任感を持っているのはよくわかる。これだけ癖のあるＤ組男子をまとめるのは大変なことだと思うし、二年連続して立村を推薦するの はやはり、それだけ信頼されているからだろう。それは俺も認める。今回だってそうとう、お前にしては無理をして準備していただろうし、ほら、水口のこと も、知っていたんだろう。起こしに行くことを約束していたんだろう。さっき、水口から聞いたよ」
　うそだろ、と言いたい。言えないのは口の中の温度計。噛み砕きそうになった。
「実はな、一年の宿泊研修の時に俺は水口のお母さんから頼まれていたんだ。夜の十二時くらいに一度、起こしてトイレに連れて行ってもらえませんかってな。でも宿泊研修の夜っていうのは

、普通オールナイトしちまうものだろう。何事もなかったし、その辺は全く問題なかった」
　当たり前だろう。こいつ、生徒の秘密を平気でばらして正気なのか！
　布団の中の手を握り締めた。
「今回の宿泊研修は二日も泊るとあって、お母さん心配していて、やっぱり先生ところにも連絡をくれたんだ。でも、水口本人は、それをすごくいやがっていたんだな。お前に相談するってことは、ある意味、しかたないのかもしれないな」
　だから何が言いたい。
「今回お前が必死に約束を果たそうとしていたのは、偉いと思う。でもな、体調を崩していて、ただでさえ苦しい時にだ。人のことまでかまっている余裕は、な かったんじゃないか。そういう時には、俺に相談するなりしてくれれば。そういうために、大人はいるんだからな。一人で何にもできなくなってしまいそうな時 に、助けるためにいるんだからな、そのことだけは忘れるなよ」

　ああ、うざったい。こいつが教師でなかったら、俺は絶対銃殺してやる。
　それにあんまりだ。すい君は自分でなんとかしようと真剣に悩んでいたってことを、こんなにも平気に口に出していいもんか。
　もし俺が、すい君とおんなじ立場で、いまだに世界地図を描く状態だったとしたら、死んだって人には頼まない。なんとか自分で身を守るべく方法を考える。
　徹夜を二日するとか、水を一滴も取らないようにするとか。
　口には出せない方法だって色々あるさ。どんなに悔しい思いをしてきたかなんて、きっと菱本先生には理解できないんだ。
　きっと。俺に夜、起こしてもらおうということすら、はっきり言ってすい君には屈辱なんだ。
　もしかしたら余計なことをしているのかもしれないって思うけれど、でも、本当にやらかしてしまったら、もっと恥をかくっていうのがわかるから、約束したんだ。
　それをなにか？　俺が熱だして倒れたからといって、すい君を尋問したのか？
　どうして俺が熱を出した状態で廊下をふらふら、していたのかを。
　こんなんだったら顰蹙かってもいいから、女子の部屋を襲っていればよかった。
　こんな体温計なんて加えてなければ。
　ああ、本当にむかつく。腹が立つ。

　上総はしばらくかっとする感情を口の中でとどめていた。体温計のメモリが三十九度のところで止まった。自分で抜こうとしたところが、菱本先生にさっとひっこぬかれてしまった。それぐらいできるっていうのに。
「やっぱり熱はあるな。お前、今日はここで寝てろ。ちゃんとホテルの人には昼ご飯の用意とか頼んでおくから。なあに大丈夫だ。お前の親友も、それから彼女もいるからな。今日中に安心して熱を下げるんだ。よく努力したものな。何かの拍子で熱が出るのもしかたないよ」
　上総はきつくにらみつけた。そうしたつもりだった。

咽さえ痛くなければ。身体がもう少し楽に動けば。

「それはそうと、こんなに熱があるっていうのに、風呂にまで入ってたのか。全く、お前は自分のことを全然自覚してないな。やっぱりそこんところが子供だ な。立村、お前はたぶん何にも知らないと思うが、すでにお前が小学校時代、どういう経験をしてきたかは、谷川先生から聞いている。だから、無理に自分を繕 う必要は全然ないんだ。普段の、お前どおりの姿でいれば、みんなは受け入れてくれてるんだ。わかるだろ。無理に、評議委員だからといって、背伸びしなく たって」
頭の中で、破裂音がしたような気がした。
小学時代の担任の名が、出てきた段階で。

どういうことだよ。谷川先生って。
小学校時代なにしてきたかってか？
ああそうだよ。俺は六年間、とことんいじめられてきたさ。
正確に言えば、いじめられていると思い込んできたってことか。
何かがあると泣いてばかりで、人としゃべることもろくにできないで、教室ではひとりぼっちでいた、そんな自分のままでいれば、そうか、二年Ｄ組では受け入れてくれるって、そう、言いたいのかよ。
ふざけるなって言いたい。谷川先生は確かに、一生懸命かばってくれた「かも」しれない。よくしてくれた「かも」しれない。そういうことを理解できない俺が馬鹿だった、それは認める。
でも、だからこそ俺は必死に、うまくやっていけるよう、「理想の評議委員」を目指しているだけじゃないか。
努力して、理想を求めることすら、だめだっていうのか。
そのままの自分で、って、大嫌いな自分をそのまま認めるって、そういうことかよ。

「立村、お前がそうとう小学校の頃から、いやな思いをしてきたのはわかっている。だからこそ、青大附中で自分を変えようと努力しているのもよく俺は見てき ているつもりだ。でもな、他人を巻きこんではいけない。自分に出来ないことを、無理にやろうとするもんじゃない。そのために大人はいるんだ。陰でこそこそ と、復讐してやろうとしたって、結局はむなしさだけが残るだけだろ？　それならこっちが大人になって、許してやるのがいいんじゃないのか？　次期評議委員 長までやるお前のことだ、そのくらいは、わかってもいいんじゃないのか」

何も言い返せなかった。
決して菱本先生の言うことを受け入れたわけじゃない。
素直に「先生わかりました」と、涙したわけではない。
血が上りすぎて、鼓動が頭を叩き割りそうなほどに鳴り響いたせいだ。体温計が三十九度だとしたら、瞬間的に四十度以上に沸騰している。ひたいにやかんをのせたら、一発で沸騰しそうだ

。
　息が苦しくて、枕にうつぶした。荒い息を吐きつづけ、うめいた。
「おい、立村、大丈夫か」
　触られた。額だ。がまんできずに振り払おうとした。
「本当にひどい熱だな。もう一度病院に行くか？」
「大丈夫です」
　搾り出すような声で上総は答えた。
　触るな。俺に近づくな。側に寄るな。
　しゃべることができない今、上総にできるのはひとつだけ。
　顔を隠して嗚咽するだけだった。声を殺し、誰にも泣いているように見えないように。
「わかった。ホテルの人には昼ご飯を持ってきてもらうように手はずを整えておくから、寝てなさい。薬は飲んだのか？」
「まだです」
　当たり前だ。食事の後に飲む薬だっていうんだからな。
「熱さましは座薬の方がいいのか」
「ふつうの薬でいいです」
　顔を隠し、上総は咽の奥からこみ上げるむかつきと、熱い塊を飲み込むことに専念した。かけぶとん一枚の仕切り。こんなにありがたいと思ったことはかつてなかった。顔を完全に覆えるだけの場所があることに、上総は感謝した。

２　まちかねたひとりぼっちの時

　しばらく経ち、貴史が戻ってきた。
　手には、どこから買ってきたのかインスタント粥のパックを持っていた。
「立村、あのさ、起きてるか」
「かろうじて、生きてる」
「あのさ、お前、今日残るんだろ。さっき菱本さんが言ってた。とってもだけど起きられる状態じゃねえって。ほんとだな」
　ポケットに財布としおりを突っ込み、枕もとにやってきた貴史。
「俺も残ろうかっていったんだけどさあ、菱本さんから絶対駄目だって言われちまってな。悪い」
　さっきの菱本先生により毒を吹きかけられたせいか、うまく声が出ない。
「いいよ、一人の方が楽だし。それにしてもどうしようもなく悔しい」
「俺もめちゃくちゃ淋しいが、土産買ってきてやるよ。お前絵葉書とかそういうもんが好きだろ。それとも食い物がいいか？」
「いや、いいよ。それより今日のバス道中なんだけどさ。盛り上げ役は羽飛に任せた」
「と、美里だろ。あいつも心配していたぞ。立村が熱出したって聞いててさ、夜中になんかあっ

たのかって菱本先生に聞いてたよ」
「よりによって、あやつに聞くなんてやめてほしいよな」
　菱本先生のことだ。上総に説教した通りのことを丸写しで美里に伝えた可能性がある。もしくは真夜中にふらふら廊下を歩いて、とっつかまったことまでも。
「大丈夫だって、明日もあるし、美里にも言っとくよ。お前はまだ生きているってな」

　何度も思う。羽飛貴史は本当にいい奴だ。
　こんなに友達思いの中学生は、そうそういないだろう。
　仮に上総がバスの中で酔っ払ってしまい醜態をさらしたとしても、貴史ならばいやな顔しないで、介抱してくれるだろう。そんなところを見られても、お前の味方だから安心しろとか言われて。
　菱本先生の言う、「普段の、お前どおりの姿」であっても受け入れてくれる友達、それが貴史だろう。
　それはわかる。なのになぜだろう。上総の中では絶対に受け入れられない一点があるというのは。自分が絶対に、見せたくないところを、手当てしようとし て、手を差し伸べてくれる。そんな人々から逃げたくてならない。そういう上総がいる。大切な友達なんだと思う一方で、違う違うと激しく抵抗する自分が隠れ ている。

「じゃあな、行ってくるから」
「無事に帰ってこいよ」

　貴史がドアを閉めた。
　上総はそっと耳を澄ませた。
　ばたばたと足音がする。ドアの前で
「あれ、立村くんは行かないんだったっけ」
「なんか熱出したみたいよ」
「またあいつ知恵熱だしてるの、ばっかじゃないの」
「ねえ、美里どうするのよ。彼氏がいないから淋しいんじゃないの？」
などと女子のしゃべる声もする。
　清坂氏に、一言頼んでおけばよかったな。
　まあいいか。俺よりはるかにしっかりしてるから大丈夫か。

　窓辺から聞こえるバスの発車音。と同時に声はほとんどが、掃除のおばさんたちのものだけとなった。ばたばたと片付けに入っているのだろうか。でも学生の 部屋は諸般の事情でまだ掃除が出来ない状態。食事代わりには、お茶用のお湯を沸かして、インスタント粥を食べることにしよう。とにかく、薬を飲むために は、何か食わねば。
　しかし全く起きられなかった。鉛の布団をかけられたようだった。

汗だけがだらだらと流れ、熱がこめかみを刺激する。
思考力はだんだん途切れてきて、とうとう、頭の中が真っ白くなった。
上総はうつぶせになったまま、枕に顔を伏せた。勝手に競りあがる涙のかたまりを吸い取らせるため。自然ともれる泣き声のため。今は誰もいない。四時半までは誰も戻ってこない。どんなみっともない顔も、今ならば、さらせる。
本当は、この時を一番待っていたのかも、しれなかった。

寝汗をかいたのか、それとも薬が効き始めたのかよくわからないが、とりあえずは起き上がって重たい頭を振るくらいのことはできるようになった。自分の額に手を当ててみると、じんわりとしめっている。前髪も自然と持ち上がっている。
時刻はすでに九時近く。一時間くらいしか経っていないらしかった。
誰も残っていないのはよかった。
ひとりでいられるのがうれしかった。

ほおにかすかな、固まったざらざらしたものが残っていたので、すぐに顔を洗った。こんなんだったら、無理してバスに乗り込むこともできたな、と思ったものの未練はなかった。
自然とおなかもすいてきていたので、貴史が残してくれたインスタントおかゆをこしらえた。小さなヒーターのようなものがテーブルの上にセットしてあり、 マグカップ大のステンレスカップを載せておくと、自動的にお湯が沸くようになっている。想像以上に早かった。すぐに粥飯はふくらんで、ちょうどいい量に納 まった。ひたすら食べた。
食欲がいつも通りだってことは、もう大丈夫だろう。
こんなになることわかってたら、本とかもっと持ってくるんだったな。
荷物になるからやめとこうって思ってたんだけどな。
シャワーを浴び直し、外の青空と見慣れない野鳥の集団を眺めながら上総は、ベットから天井を見上げていた。タイムスケジュールからするとそろそろ、第一 次目的地の黄葉市内散策が始まっているころだ。天気がいいから、きっと歩かされるだろう。さすがに今日は私服でかまわないというお許しがでたそうなので、 「歩いているだけで青大附中の宣伝になってしまい、他の中学からバッシングがきそう」なことはないだろう。

３　理想的展開のはじまり

電話が鳴った。軽いフォン音だった。
フロントからだろうか。鳴っているからには出なくてはまずい。
「はい」
立村ですが、と答えるのもなにかまぬけで、返事だけにした。
「おおい、りっちゃーん、生きてるかあ」
「なに？」

　なんで南雲の声が聞こえるのか、繋がらずとんちんかんな返事をしてしまった。
　あいかわらず邪気のない、さっぱりした口調だ。
　それに今ごろ、南雲はクラス行動しているはずではないだろうか？
「今からそっちに遊びに行ってかまわんか？」
「そっちって、だってなぐちゃんお前、今どこにいる？　市内見学の最中だろ？」
　わけがわからなくなって上総は聞き返すしかなかった。まさか幽霊になっちまったんじゃ？と不謹慎なことすら頭を掠める。
　生霊？
　何かあったのだろうか？
　そういえば超常現象雑誌に、そんなこと書いてあったような記憶がある。
「大丈夫、中、中。じゃあ、今から行くからさ。またあとで」
　中、中って、つまりはホテルの中ってことだろうか。
　南雲も今回の市内観光はお休みしたってことだろうか？
　でもなぜ？
　とりあえずかぎはあけたままなので、浴衣の上に羽織るジャケットだけ着て、身を起こした。食べ終わった粥皿は捨てた。ほとんど手をつけていないお菓子を 机の上に載せておいた。甘くないバタークッキーだ。貴史もあまり好きでなかった。今のところ誰も食べてくれないものだった。

　電話から一分もたたないうちに、どんどんとノックが響き、シャギーのぱかっとした笑顔が覗いた。
　幽霊じゃない、生身の南雲だった。
「あれ、どうしたのりっちゃん。俺が来て、かなりショック受けてる？」
「いや、本当に、生きてるなって、ただそう思っただけ」
　着替えておけばよかった。南雲はいまにも出かけそうな格好をしていた。昨日とはちがってどこぞのスポーツブランドもののポロシャツに肩から水色のサマー カーディガンをかけていた。両腕部分を軽く結んでいる。髪型は、手ぐしで軽く浮かせるような感じにしてある。たぶん、ムースをつかっているのだろう。女子 がバスの中で噂をしていた。「南雲くんって、女子と同じくらい、髪型いじるのに時間かかるんだって！」と。
「さっき自販機でサイダー買ってきたんだけど、半分飲むか？」
「うん、茶碗でもらおうかな」
「ふだんだったら一本のみ干せるんだけど、今日はちょっときついんだ」
　南雲は軽く胃のところを押さえてつぶやいた。
「夜、食いすぎたみたいでさあ、朝これはやばいわと思って、残ることにしたんだ」
「腹壊している時に炭酸はきついぞ」
「しゃあないよ。俺、あんまり甘ったるいの好きじゃないから」
　伏せたままにしてある茶碗に、サイダーの缶から少しずつ注いで飲んだ。貴史のベットに腰掛

けて、クッキーを一枚ずつつまんだ。ほのかな甘味が残るだけの、昔風の味わいだった。
「あと残っている奴はいないのか？」
「いないよ。りっちゃんが倒れたって聞いたのが朝だろ。それでしばらく誰かが残ろうかって話になったんだ。でも、それだったら俺も腹がまだ痛いし、りっ ちゃんよりは動けるしってことで、居残り決定さ。あ、気にするなよ。俺は俺で理由があって残ってるんだから。何も俺だって好き好んで、ってわけじゃない よ」
「そうか、ならいいんだ」
　たぶん、菱本先生のことだ。だれか付き添いで残らせようと話し合いを持ったのだろう。貴史あたりが残ると言い出したのかもしれないが、たまたま南雲がいたからうまく、話がまとまっただけなのかもしれない。
　とにかくはっきりしているのは、上総にとって一番いい組み合わせだったってことだ。どこかつぼを押さえてくれている。絶対に触れてほしくないところに は、微妙に避けようとしてくれている。つい自分も、油断してまずいことを口走ったりしてしまうけれども、それをねたにまた揶揄することもない。そういう南 雲との波長が上総には心地よかった。
「ここ、羽飛のねどこか？」
「そう。でもほとんど使ってないはずだよ。あいつ夜遅くまでオールナイトしてたからさ」
「あれ、りっちゃんは？」
　苦々しくも言わざるを得ない。遠慮なく、タオルケット二枚に足を突っ込んだ。
「ご存知の通り、菱本さんに捕まってこのざまさ、悪いことできないよな」
　南雲にだったら、「清坂さんのところへいって夜這いしようとした」と言ってもかまわなかった。聞かれたら答えるつもりだった。でもそれ以上つっこんでこなかった。
「そうか、災難だよなあ、でもまあ、前からりっちゃんと約束していたことも果たせそうだし、それはそれでまあいいよ」
　南雲はごろっと横たわり、上総の方を見て笑った。押し付けるところのない、さらりとした笑顔だった。答える必要のない笑顔だった。
　こくっと頷いて上総も、もう一度ベットにもぐりこんだ。

その七　青雲をみあげながらのよしなごと

１　『規律委員会コレクション・秋のファッションブック』

　たいてい南雲と交わす話題は、洋楽のヒットチャートだとか、中古レコード店での掘り出し物とか、あとは双方の親が所蔵しているレコードの貸し借りが中心 だった。会計事務所を経営している南雲の両親は、かなりの音楽好「唄が全く入っていない、インストロメンタル系の、哀愁っぽいもの」をリクエストしてずい ぶんテープに録音してもらったもののだった。お返しに上総も、父の持っているクラシック系のものを大量に持ち出している。仕事に忙しい父はたぶん、勝手に いじられていることを知らないだろう。

　外は青空。うすい黄金色の山々が、そそりたつように窓につきささってくるようだった。遠慮なくカーテンも窓も開けた。クーラーはかけなかった。黙っていても風がするすると入ってくる。ちょうどいい温度だった。
「おもいっきり、写生会日和だよなあ」
「ほんとだ。俺もそう思う」
　思い出したくないことをつつかれたようで、寝返りを打った。
「さて、金沢くんはどのような傑作をものとするんでしょうな」
「昨日は一生懸命、虫のいろいろを虫眼鏡で観察しながら、何かを写していたよ。とにかく、普通でないものを描きたそうな顔、してた」
　その場では筆でうっすらとまとめていたはずだ。帰ってから完成させると楽しそうに話していた。
「自由研究の提出物は完成なんだ。いいなあ」
　南雲はふうっとため息をつきながら、膝を抱えてごろごろと回った。ゆりかごのようだった。
「りっちゃん、今回の自由研究は完成したか？」
「一応。もう夏休みの段階で英語の先生からこれやれって言われてたし。イギリスの児童文学で短いのを、自分なりに訳してみろって。ほんとは普通の文学書みたいなのやりたいって、先生に言ったんだけどな」
「そんな難しい奴やりたいって言ったのか？」
「お前には早すぎるって、却下された」
　『グレート・ギャツビー』の原書はペーパ＾バックスで手に入れていた。暇があると単語を調べて、書き込んだりしている。自分で現在ひとり、訳してノートに写している。本当はそれを提出するつもりだったのだが。
　好きな作品だったら、いくらでも熱中できる自分。
「それはそうと、なぐちゃんは何にしたんだ？」
　答えず、南雲は天井を見つめたままひとこと、答えた。
「『規律委員会コレクション・秋のファッションブック』原稿」

　わざわざ部屋に戻って、スケッチブックを持ってきてくれた。
　Ｂ５程度で、自由研究提出用のラベルを貼ってあった。印刷するだけであとはＯＫ。受け取って上総はぱらぱらっとめくった。　絵の前後にはちゃんと、南雲 の直筆ファッションコラムもたくさん記入されていた。南雲の文字は、英語の筆記体を日本語に写したような、斜めががったものだった。

その後はしばらく、とりとめもなく、音楽ねたを振っていた。本当は南雲も、もう少し絵の話をしたいようだったけれども、上総が乗ってこないのを察してかすぐにそらしてくれた。

　洋楽チャートトップ１００の傾向についてひと段落し、南雲はもう一杯サイダーを注いだ。だいぶ気が抜けているようだった。甘ったるい、砂糖水になっている。
「でもな、こんないい天気だったらふつうは、外に行きたがるんだろうな」
　だんだん太陽が白く、輝いてきている。窓辺からもやのように流れてくる。空の青さだけが歯切れ良くて、上総は身を起こし、眺めながら言った。南雲もつられてか、立ち上がり窓辺に立った。
「ふつうは、たぶん海とか山に行きたいって思うよ。俺もたぶん、そう思う」
　りっちゃんは？と聞いてこないのが、南雲のいいところだった。
　これが貴史や美里だったら
「どうしてなの？夏って体を動かすと気持ちいいよ。だから立村くんって、軟弱だって言われるのよ。すこし鍛えなくちゃだめよ」
とあきれられるのが落ちだ。言ったことがなかった。
　どうしてみんな、夏が好きなんだろう。
　外に出れば頭が痛くなるし、汗をかかない代わり熱が出て途中でしゃがみたくなるし、大抵貧血起こしてぶっ倒れる。海に行くともう駄目だ。潮風をかいだと たんに胸がむかむかして、何も食べられなくなる。水着に着替える場所の、ぬめぬめした足の感触ががまんできなくて、小学校時代からほとんど、プールや海に 行ったことはなかった。
　そういうことを、周りでは「変わっている」とか「不健康」とかいう。
　口には出せなかった。

「なぐちゃんは、夏、海に行ったりしたのか？」
「行ったよ。でも泳いだのは家族旅行でだけ。じいちゃんの墓参りもあって、この前行ってきたんだ。やっぱり、青潟の海とは違うぜって感じ」
　ふと、突っ込んでやりたくなった。口元までシーツを持ち上げて、小さな声で訊ねた。
「あの、例の「青潟大学附属中学ファッションブック」に、水着バージョンっていうのは入れなかったのか？」
「描いたよ。もちろん。そりゃあ、ビキニもあれば、ワンピースもあるしさ。提出する時の反応

が今から楽しみだな」

　イラストというよりも、少女漫画の少年キャラクターを、大判にしてファッションモデルのようなポーズを取らせている。顔はほとんど描かれていない。鉛筆でさらさらと線が入っている。それにクレヨンか何かで輪郭を取り、華やいだ色合いを持たせている。
「『ビキニは基本として、体型がずんどう型の日本人には向いているので、太目のお嬢さんもどんどん着るべし』って、結構すごいこと描いているな」
　そのほかにも、
「制服は基本として着崩すとまぬけに見える恐れがあるので、家の中のみでチャレンジすること。学校では、おしゃれなつもりが一気に、コメディアン化する恐 れがあるので、悪いことといわない、校則に従っていた方がいい。もしその形がおまぬけだったら、規律委員会に直訴してください。センスの素晴らしい規律委員 一同が、頭をひねって話し合いに持っていきます」
などと、南雲ならではのしゃれた書きぶりが笑えた。

　そういう南雲がだ。どうしてだろう。
　どうしてよりによって、奈良岡彰子と付き合っているのだろう。
　しかも惚れるだけ惚れぬいているっていうのは。
　昨日だって見るに耐え難いくらいのいちゃいちゃぶりを見せ付けていた。
「南雲は奈良岡のねーさんにに惚れ薬を飲まされたんだ。さすが保健委員」とか
「なにか奈良岡の家と南雲との間に密約が交わされているんじゃないか。借金かなにかで」
　ありとあらゆる噂が流れていた。

「あのさ、なぐちゃん」
　思い切って聞いてみた。
「これ、奈良岡さんには、見せたんか？」
　南雲はもちろん、という風に、青空を満面にうかべたがごとく頷いた。
「りっちゃんは二番目。最初はやっぱり彰子さんですがな」
「で、感想はどうだった？」
「『あきよくんは才能があるよね』だってさ。向こうは俺のこと、『あきよくん』って呼ぶんだ」
　聞きたかったのはそんなのろけじゃない。上総はためらった。窓の向こうを見た。青空の色が後押ししてくれた。
「それだけか？」
　うまくいえなくて、それだけ搾り出した。どうかわかってほしかった。南雲にだったら伝わるかもしれないという勝手な思い込みが、突然噴出したかの、ようだった。
「お前の好みとか、露骨にここに描いてあるだろ。それ見て、つらそうな顔とかしなかったんか」

　急に胸が締め付けられるようだった。
　心臓が苦しくなったのはなぜだろう。
　勝手に自分の想像力が膨らみすぎたせいだ。
「りっちゃんその辺、よくわかんないけど、なに？」
「だからつまり」
　顔を隠して表情を見せないようにした。
「この中に奈良岡さんはいないんだろう」

　南雲は、最初とまどったように上総の方に近づいた。が、腰を浮かせかけたとたん、言葉を見つけたらしい。すぐに坐りなおしてつぶやいた。
「水着のところのコメント、読んでもらって、誤解解いてもらったけどさあ、うまくいったかな。俺、好きな相手にはきちっと好きだと伝えるのが筋だと思って るからさ、できるだけオープンにしたつもりだけど、彰子さんのことは描けなかった。一般大衆に受けるようにって選んだんだけど。ちょっとやばかったかもな あ」
「『ビキニは基本として、体型がずんどう型の日本人には向いているので、太目のお嬢さんもどんどん着るべし』、か」
　上総はそっと首筋までシーツを引き下げた。無理やり口元をほころばせようとした、うまく行っているか自信はなかった。

　南雲は上総の方をにこにこしたまま見つめていた。　タオルケットのすみにおいてあった、スケッチブックを手に取った。表情を変えることがなかった。大抵だったら、
「なんか、やばいことしたんじゃないか」
と心配そうに覗き込むか、
「なに一人でいじけてるんだよ」
とつっぱねるか。そのどちらかだろう。
　どうしてこういうばかみたいなことを聞いてしまったのか、わからなかった。たまに自分が止められなくなる時がある。たまにがまんできず、意味不明な言葉を吐き出してしまうことがある。
「別に、意味なんてない。なんとなく、そう思っただけだって」
　小声で答えた。年齢が一気に下がってしまい、幼稚園児になってしまったみたいだった。みっともないったらない。押さえられなかった。顔を隠しっぱなしにしれもでもいいように、頭をまくらにつけて、あお向けになった。足もとが汗でしめってきて、気持ち悪かった。
「なぐちゃん、サイダー、もう一杯ほしいんだけど、ある？」
「オッケー、余裕ですぜ旦那」
　飲みたかったわけではないけれど、会話を続けるのが苦しくなってしまった。南雲には気付かれたくなかった。でも、見え見えだってことも分かっていた。
　空の青さはまだ光を帯びている。どうしてこんないい天気なのに。

どうしてこんなに夏は明るいのに。
俺はいつもこう、ばかなことばっかりしゃべってしまうんだろう。

２　「理科室告白事件」における行動記録

南雲はもう一度、貴史のベットに寝転んだ。
もともとは腹を壊して休んだ奴なのだ。炭酸なんか飲んで、ちょっとまずかったんじゃないだろうか。しばらく口を利かずにいた。
上総も窓の方に寝返りを打って、じっと空を眺めていた。
ガラスが白く反射して、目を刺した。しかたなく、目をつぶった。
向こうのベットで寝返りを同じく打つ気配を感じた。
背中に聞こえた。
「りっちゃん、返事しないでいいからさ。寝てるなら寝てていいからさ。俺、ひとりごと好きなんだ。聞き流してちょうだいな」
よけいな響きのない、さっぱりした声だった。
上総は目をかたくつぶった。

「俺さ、すげえ軽い奴だと思われてたんだろうな。りっちゃんとも一年の頃はあまりしゃべらなかったからなおさらそうかなとは思ってたんだ。まあ、音楽のこ ととかりっちゃんやたら詳しかったし、真面目なようでいて結構遊び人だしさ。あの本条先輩に気に入られてるってことからして、ただもんじゃないとは思って たんだ。だから、しゃべってみたいとは思ってたよ。そう、二年に入って同じ班になって、やっぱり俺の思っていたとおりだってさ。でもやっぱし、あの時は驚 いたよ」
あの時って、いつだろう？
奈良岡への「理科室告白事件」のことだろうか？
上総は素早く記憶を巻き戻した。
俺は何をしたっけ？
「いきなりクラスの野郎どもに指示、出し始めた時。本当にびびったよ。まあ、覚悟はしていたよ。あんなおおっぴらにやっちまったら、ばれねえわけねえわな、って思ってたけど」
ああ、あのことか。
五月の終わり、想いを募らせた南雲が、たまたま理科準備室で二人っきりになった折、いきなり奈良岡彰子に告白したという事件だった。たまたま忘れ物を取りにきた奴にその現場をもろ見られてしまい、二年Ｄ組始まって以来の色恋沙汰に発展した。
先生たちに片をつけてもらうような問題ではなかった。
本当にただの、付き合いかけるかけないの話だった。
陣頭指揮をとって上総は、なにげない日常の出来事に治めることに成功した。あの時取った行動は絶対には間違っていないと、信じている。

寝たふりをしばらくしたまま、上総は目をあけた。瞬きした音が聞こえていないかどうか、心配だった。
空の青さの中、白い雲が細く切り裂いた。
この辺に飛行機が飛んでいたのだろうか。

「俺は軽いって言われてたし、ほとんど冗談だって言う奴もいたし、人間として最低だっていう奴もいたし、今だから言えるけど、ほんっと俺、参ってたんだ。 もっと別なことで言われるだろうとは思ってたけど、まさか、人間の価値みたいな、そんなことでつっこまれるなんて思わなかったし。それにさ、向こうのこと を、あそこまでひどく言われるとは想像してなかったんだ」
言葉を切った。上総の様子をうかがっているのだろうか。聞いていると思っているのだろうか。
南雲には見られないように、目が乾きそうなほどかっと見開いた。
「理科実験室告白事件」直後の二年Ｄ組は、そりゃもうすさまじい騒ぎだった。
南雲の友達ですらも、
「なぜ、あの女に？」
「なぜ、よりによってあのビール瓶女に？」
の連呼。
ましてや対して付き合いのない連中の言葉は遠慮がなかった。
クラスで相性の合わない貴史は、、
「自分が持てていることを自慢したいのかよ。気がないくせに、からかうために付き合いかけたのかよ。最低だな」
元の彼女がいたＣ組にいたっては、
「なぜ、彰子ちゃんにあの南雲くんが？」
「いったい何が不満だったわけ？」
騒ぎはいっそう膨らんだと聞く。
「あの後、授業中にいきなりりっちゃん、貧血起こして倒れたっけ。掃除の時間に戻ってきて、俺と一緒にごみ捨てにいったろ。覚えてないかもしれないけど、言ってくれたんだよ」
何を言ったっけ？
首を傾げたいのをがまんした。
「『大丈夫、絶対うまくいくから安心しろよ』って」
上総は人差し指の先を軽くなめた。
空の青がスクリーン、雲がキャスト。思い出した。鮮やかに。

事件発覚の直後、上総はＤ組の様子がぎこちないことにすぐ気付いた。妙なところで鈍感な上総は、それが南雲の告白からだということを知らず、美里と貴史 を通じて詳しい事情を聞き出した。理科実験室での酸化鉄製造実験が終わった段階で、なぜこんなにクラスがざわめいているのかを理解した。努力したのではな い。

勝手に、自分の感情に答えが響いてきてしまっただけだった。

ただ、告白したされただけではない。
南雲は全学年の女子から人気の高い、次期規律委員長候補。
先生、同級生のほとんどに好かれて、人懐っこく、幼さときざっぽさが同居している顔立ち。女子からの告白も、一度や二度ではないはずと聞く。Ｃ組の彼女と言われていた女子も、それなりの子だったはずだ。
しかし、一ヶ月でその子と別れ、間をおかずになぜ、ビール瓶体型の奈良岡彰子を選んでしまったのか？
性格か、それとも趣味か？
そりゃ、奈良岡のねーさんはいい奴だけどさあ。
でも南雲だぜ。まだ南雲だったらいくらでも選びようあったろ？
たぶん二年Ｄ組の男子には理解できないことだったのだろう。
そして別の意味で暴露してしまったのだろう。
男子も、そして女子も、奈良岡彰子の見栄えより上だと、信じてきたことを。
南雲の言葉によって、あっさりとくつがえされてしまったことが、ショックだったのだろう。

次の授業中、上総はずっと南雲の様子を観察しつづけた。南雲の表情は青ざめていて、いつものすかっとした笑顔が消えていた。奈良岡の姿は教室に
なかった。
「たぶん、保健室に行ったんじゃないかなあ。彰子ちゃん保健委員だから。それに、今この状態で、戻ってくるなんて、できないよ」
美里から聞いた。

他の人たちにはたぶん感じられないような感覚が、上総の場合異常なほど発達しているらしく、他の連中がつぶやいた言葉がひとことひとこと、ずんずん飛び込んできた。
「奈良岡さんになぜ？」
「どうしてＣ組の子を振って？」
「あんなデブと付き合うなんて南雲も狂ってるぜ」
「いったい何が奴をそうさせたんだ？」
「計算が働いているんだろ」
「からかっているだけなんだぜ、最低だ」

自分が好きな子をもし、そういう風に言われたら。自分にそういう経験はないけれど、でももし。そう、言われたら。しかも、自分よりも相手の方をさんざん馬鹿にされていたら。
唇をかんでうつむいている南雲の感情が、勝手に自分の中に入ってきた。
いつものくせだった。

もし、自分だったら、どう感じるだろう。
辛くないわけなんて、絶対にないって。

授業中、上総は自分の中で南雲の分身のようなものが、激しく自分を責めているのを感じて息苦しくなった。その拍子にめまいがして椅子から崩れ落ちた。いつもの貧血だと、診断されて保健室に行った。

たまたま保健委員の奈良岡彰子が、委員の特権を利用して保健室に避難していたからといって、追いかけたわけではない。
また、付き添ってくれた男子の保健委員が、
「あれ、ま。奈良岡のねーさん、ここにいらしたんですか」
と、気軽に声を掛けていたのも、ちょっとしたきっかけにはなっただろう。さすがに二年Ｄ組の男子が二人、保健室にやってきて、ひとりがベットを占拠してしまった以上、奈良岡も教室に帰らざるを得なくなった。
「じゃあ、教室に戻ろうかな。久しぶりに保健委員の仕事もしたことだし」
「やっぱりおさぼりはまずいっしょお」
表向きはさらっとした調子で、二年Ｄ組の保健委員ふたりは出て行った。
上総は保健の先生から額をぬらしてもらいながら、何かを口走ったはずだ。頭が重かったことと、めまいがひどくてろくな会話をした記憶がない。ただ、奈良 岡彰子に向けて、何かを伝えようとして、果てたはずだった。朦朧とした意識の中で、まずこれだけはやらなくてはと、思っていたはずだった。

「だいぶたってから聞いたけど、りっちゃん、ぶっ倒れた時、言ってくれたんだってな」
南雲は言葉のトーンを全く変えずにつぶやいた。
「『南雲が、真剣に心配してたよ。隣で感じたあいつの気持ちは、本当だよ』って」
言葉が出ない。自分でも覚えていない。ただ、おぼろげに必死に、伝えなくてはと口を動かしただけだった。
「彰子さん、それまで俺が冗談言ってるって思っていたみたいでさあ。でも、りっちゃんの言葉でなんとなく、もしかしたらって思ったらしいんだ。俺がやらかした直後、そういうこと言ってくれた奴は、りっちゃんだけだった」
ばたっと、ベットに倒れこむ気配がした。
「いろいろ手を回してくれたこととかそういうことがどうとかいうんじゃないんだ。あんときにりっちゃんが俺のことを気付いてくれたってことが、すげえ嬉し かったんだ。俺は、りっちゃんのするどすぎる感覚がすげえ、うらやましいよ。他の連中が気付かないところをすくいあげてしまうとこって。お前自身が思って るほど、りっちゃんは、嫌な奴じゃ絶対ないって」
ふわあ、とあくびをしながら、最後は締めくくった。

３　絵画にかんするつれづれに

　しばらく黙っていたのは、言葉がいつ冗談で交わされるかを試したかったから。
　眠ったふりをしていようか、それとも振り向こうか。
　どう答えればいいのだろう。上総はタオルケットの裾を何度か握りなおした。
　俺はするどすぎる感覚なんて持っているのか？
　いきなりあふれでそうな言葉を、止められなかった。
「俺はするどすぎる感覚なんて、持ってないよ」
　それだけがこぼれた。
「どうして？」
　波長は変わらなかった。南雲の声はやわらかく響いた。
「ただ、神経質すぎるだけだって。なぐちゃん。だったらどうして俺は絵がわからないんだ？美術館に行ってたくさん絵を見ても、ただきれいだとしか思えない俺の感性の、どこがするどいっていうんだ？」
　思いっきり弾みをつけてベットから起き上がった。南雲に振り返った。きょとんとした、表情はさっぱりしたままの顔が見えた。驚いてはいなかった。
「絵、好きじゃなかったっけ？」
「わからない。でも、なぐちゃんは描くことができるから、絵は好きだろう？　絵を見て、きれいだってこと以外に何か言いたくなるか？」
　首をかしげて、目をふせ、すぐに南雲は答えた。
「言いたくなる、うん、なるな」
「だろう？　頭の中にいろんなイメージ、浮かぶんだろう？」
「うん、そうだなあ、浮かぶよ。確かに」
　南雲に問いかけたってどうしようもないってわかっているのに。
　心臓からぶるぶる振るわせる何かが、自分に似合わない言葉をどんどんはじき出させている。
　ぎゅっと握りつづけた。
「そうだよな、それが普通なんだ。他の連中と同じく、そう感じるのが普通なんだ。わかってる。俺だって、もっとそういうものを知りたいし感じたいよ。でも、わからないんだ。こんな奴がどうして、鋭いとかなんていえるか？」
　穏やかに静かに、上総の知っている自分の通りにつぶやいたつもりだった。精一杯、押さえたつもりだった。絶対に、泣いてはいけないと思っていた。これ以 上何もいえなくなり、ぐっとうつむいた。そうしないと、声がかすれてしまいそうだった。南雲に見破られてしまいそうだった。表情がひょいと変わるのを見た くなんてなかった。

　南雲が立ち上がった。上総の方を見ないで、ふうっと深呼吸をした。
「それにしても、外めちゃくちゃいい天気だなあ。窓開けるだけじゃなくってさ、外してしまいたい気分だなあ」

　窓辺に近づき、身を乗り出した。落ちそうなくらいに、上半身を外に傾けた。
「あの鳥どこの鳥かなあ。りっちゃん、鳥に詳しくないかな」
「俺が分かるのはすずめとカラスと四十雀くらいだ」
　つられて上総も窓辺を眺めた。南雲は片手で上総を手招きし、指差した。
「ほら、なんでこんなとこに、来てるんだろう。あれって、白い鳩か、それともかもめか、それとも、なんだろうなあ」
　見ると、すずめたちがちゅんちゅかやっている間に、ふたまわり大きな白い鳥が、うろうろしていた。一羽だけだった。遠めで見ると、鳩にも見える。羽根の裾が少し黒っぽかったところを見ると、かもめにも見える。普段、黄葉山の周りにはいないであろう鳥だった。
「はぐれたんだな、きっと。もしかもめだったら海はないから」
「うん、でもなあ、あれ一羽だけでうろうろしているのって、妙にめんこくないか？　りっちゃん」
　はぐれ鳥。
　上総はためらいながら頷いた。言葉は出なかった。
「青い空に白い鳥、いいなあ。なんか、こういうのって絵になるよな。俺そういうのが好きなんだ。ほら、今、飛行機雲がどんどん消えかけてってるだろ」
　斜めに一筆書きで、白い筋を立てていた雲が、だんだん震えるようにゆがんでいっている。窓に近づいて見る青空は、色をぼやかさないままの青そのものだった。
「俺、ああいうのは好きなんだ、りっちゃん」
「ああ、俺もそのまま、景色を見るのは好きなんだ。ただそれだけなんだけどさ」
「ああいう鳥とか眺めながら、山の景色見るのも、俺好きだよ」
「うん、おんなじだよ」
　白い鳥は何度かはばたきをして、何かをついばんでいた。大きく羽をひろげ、見得を切るようなポーズをした後、ゆっくりと飛び立った。ちゃんと大空に舞い 上がるところをみると、やっぱり空は飛ぶためにあるというタイプの鳥らしい。木々の陰からふわふわと、横一直線に飛び立っていった。
「あら、いっちまった」
「いつまでもはぐれちゃいられなかったんだよ」
　南雲はしばらく白い鳥の去った場所を眺めていた。すずめたちが安心したのか、また同じ場所に集まってきて騒ぎ始めた。たぶん、なにかえさがあったのだろう。お米とかパンとか、撒いているんだろうか。あとで聞いてみよう。南雲にそういおうと思った時、先手を取られた。
「俺さ、りっちゃん。よくわかんないけど、空の青さはきもちいいなって思うし、白い鳥もすずめも見てるとめんこいなって思う。可愛い子の写真みたらおおっ て思うし、でも彰子さんのことは好きだし、りっちゃんはいい奴だって、思う。俺、美術関係の難しいことわからんし、知りたいとも思わないけどさ、でも、イ ラストは書きたいなって思う。俺はただ、好きなことを、好きだって言うだけで十分なんだ。絵だって音楽だって、語るだけが能じゃねえよ。ただ、好きだとか きれいだとか、それだけで十分だって思うんだ。しゃべりたい奴は、勝手にやってろってい

うんだ」
　空に目を向けたまま、上総の顔は見ないで続けた。雲がだんだん消滅していくのがわかった。
「南雲家では、ガキの頃から『好きなものは好きだとはっきり伝えること』が真実だって言われてきたんだ」
　さっさと背を向けて、南雲はサイダーの量を、振って確認した。
「やべえ、ないや。なんか飲み物買ってくる」

その八　昼下がりのよしなごと

１　絵画がだめでも写真なら

　南雲が出て行った後に、上総は素早く浴衣から着換えた。さっきから話をしている間、居心地が悪くてならなかった。ひとりだけだらしない格好をしているよ うで、自分が小さくなってしまったかのようだった。柔らかいベージュの開襟に、麻布のベストを羽織った。色があいまいなせいか、自分もとろけてしまったよ うだった。
「もう大丈夫なんか」
「うん、どうせ、寝るだけだったらこの格好でいいしさ」
　靴下だけははかずに平たく坐った。
　南雲は今度ウーロン茶の缶を二本持ってきた。胸にかかえる格好だった。その間に文庫本っぽい本が隠れていた。
「本持ってきたんだ」
「他の奴らに見られたら、何言われるかわかんないから、こっそりと、な」
　ねちっこくない、さらりとした口調で南雲は、上総に缶を受け取るよう促した。水滴がまだしたたっていない。細かい粒子のままだった。額に当ててみたのち、すぐに口をつけた。
　南雲の手にある、本に目をやった。カバーがかかっている。
「さっき、りっちゃんが、絵のことあまり好きじゃないって言っていただろう。写真だったらどうかな、と思ってさ」
　何かポストカード集かな。受け取ってぱらぱらとめくった。
　一瞬、何が見えたかわからず、すぐに閉じた。
　もう一度、めくった。
「なぐちゃんこれって」
「そうだよ。『最新水着アイドルハンディフォト』文庫。今回、『青潟大学附属中学ファッションブック』をこしらえるに当たって、参考資料にと思って購入。でも必要経費には落としてないよ」
「うそつけ。どうせ自分の必要経費だろ」
　そろそろと、今度は一ページずつめくっていった。南雲とふたりっきりだったら、まあ、ゆっくり堪能したってかまわなかった。これが貴史だったら、もっとしらけた顔してめくるのだろうが。

　最初は見覚えのある女性アイドルの、上から下まで繋がっている水着。
　名前はよくわからない。やたらと派手なのが多い。虹をかたどったような七色模様。金銀をあしらった、皮膚呼吸大丈夫なのかと心配になりそうな柄。しか し、どんどんページが後ろの方に行くにしたがって、名前の知らない人が増えてきた。上下分かれた水着が続いた。最後の方は、肌の隠れた部分が少ない、限り なく限界に近い水着のオンパレードだった

　さすがにそれをまじまじ眺めることはできずに、閉じた。
「な、健全だろ？　裸の人いないよ」
「そりゃあさあ、いたらまずいだろう。ところでなぐちゃん、これは他の誰かに見せたのかよ」
「いいや、見せてない。参考資料なんだから」
　経費で落ちたら、規律委員会の存在自体が問題になりそうだ。

　貴史だったら
「な、立村はどの子が好きなんだよ。俺は絶対、優ちゃんだけどな。ほら、水着だったらどんなのがいいんだ？　やっぱり、胸のある子がいいのか？　それともさ」
としつこく問われることだろう。上総は決して自分の好みを口にしなかった。知らん振りして写真の写りについてのみ、語っていた。写真のことについてうるさいとか、絵葉書を集めるのが好きだと思われているのもその辺からきていると思われているだろう。
　南雲に尋ねた。
「こういうのは本屋で買うんだろ」
「もちろん。万引きなんてしませんがな。俺の場合、『実用書』は、健全だったら本屋、不健全だったら古本屋と分けてるからなあ」
「なんなんだ。その、『不健全』って」
「たとえば、こういう風に着るもの着て、見られても言い訳できるようなのは、カバー掛けてもらえば恥ずかしくないよ。領収書ももらったんだ。『青潟大学附属中学規律委員会』で」
　いい根性している。笑いをこらえながらさらに続けた。
「で、どこに隠してる？　お前のうちって、両親と一緒だろ。おばあさんとも一緒だろ。本棚に隠すのって大変じゃないか？　」
「定番、ベットの下。りっちゃんは？」
　つられて答えた。
「本棚に並べておけるもので文学全集の箱みたいなの、あるだろ？　」
「ああ、あるな」
「その中に押し込んでる。あれで見つけられたらすごいと思う」
　さすがに、「フィッシェラルド作品集」の箱に詰めているなんてことは言わなかった。引き出しに本そのものだけ、いつも取り出せるようにしてあるから、空いているということも。
「ふうん、りっちゃんはそういう本をどうやって手に入れる？」
「本条先輩が使用済みのをくれるから」
　六月に、一度は返したグラビア写真集。
　一週間後、中の一冊とまた別の写真集三冊をセットにしてプレゼントしてくれた。
「へえ、そうなんだ。本条先輩ってそういう本山のように持っていそうだよなあ。でも本当に自分の好みと合うのかな。りっちゃん、密かに好みがうるさそうだしさ」
　言うか、どうしようか、迷った。
「確かに好みは、うるさいよ」

　膝を抱えてもう一度ベットに脚をつっこんだ。ささやき声で南雲を呼んだ。小さな声で話したかった。
「一度だけ、普通の女の人の写真集を、買おうと思ったことがあったんだ。本屋で、ちゃんと図書券使ってさ」
「ははん」
「でも挫折した」
　南雲はしばらく人差し指をくるくる回しながら首をかしげた。
「アイドル、じゃないだろうな。りっちゃんだったら。すっぱだかなんでもないよなあ」
「俺も名前しか知らないし、その人の写真も、一枚しか見たことないんだ。たまたま、雑誌でその人の写真集が出るって書いていたから。わかってもらえないかもしれないけど、やっぱり」
「わかるわかる、りっちゃんの言いたいことは俺もわかる」
　本条先輩が一冊返してくれた写真集に載っていた、哀しげな表情の、清楚なシュミーズ姿の少女だった。ショートカットだが、どことなく気品があって、なんでこういう写真集に出ているのかが謎だった。返してくれた理由を尋ねたら一言、
「お前このページしか見てなかったんだろ。黙っていると、ここのページだけ自然に開くんだ。いったいどのくらいこの子でやったんだ？」
とあきれられた。言い返せなかった。
「買わなかった理由、知りたいなあ」
　お互い顔を見ないで、青空だけを眺めながら言葉を交わした。
　上総は一気にタオルケットにもぐりこみ、顔だけ出してはっきり答えた。
「買えるかよ！　つなひきの縄みたいなのを巻きつけて坐っている写真なんてさ」
　すぐに、勘付いたようだった。
「あの、それってさあ、服を着ないままで、縄が巻きつけられているのか。それって、もしかして、鞭で叩いたり、つるしたりするっていう」
　さすがに聡い。
「未知の世界だった」
　南雲は大きく頷いて、枕もとにかがみこんでささやいた。
「じゃあ、今度古本屋で見てみるよ。見つけたら、知らん顔して買っておくからさ」

２　定期入れの中に、ある想い

　ホテルのフロントから電話があり、昼食用の弁当が届いているとの連絡があった。なんでも菱本先生が、行く寸前に二人分の、「黄葉山弁当」なるものを頼ん でくれたそうだ。その辺やはり、担任だ。中身は薄茶のどんぶり風容器に、たけのこ、栗、ぜんまいを炊き込んだ、山菜混ぜご飯といった風だった。前の日に食 べたものとほぼ一緒でげんなりしていたが、もう一箱、おまけがついていた。緑色の、おそらく山菜のエキスかなにかを混ぜたバウンドケーキ折り詰めだ

った。 もちろん、ふたりで分けて食べるように、とのことだろう。フロントまで南雲が取りに行ってくれた。さっそく食べながら、よしなごとをしゃべりつづけてい た。青空は、食べ物が減っていくのと同じくらい、早く薄い色合いにかすれていった。雲が少しずつ、もみこまれるように広がっていった。風が冷たくなってき たので窓を閉め、湿気とりだけしておいた。
　会話はまったく途切れないのに、まだなにか、肝心なことを聞いていないような気がした。だんだん、バスの戻ってくる時刻、四時が近づいてくるに連れて気 持ちがばさばさ言いはじめていた。南雲は気付かぬ風に、ベットにねっころがったり、起き上がったりいろいろしながら鼻歌を歌っていた。

「あの、なぐちゃんさ」
　ごみを捨てるために立ち上がった。寸前まで日本のインストロメンタルについて語っていた南雲の話題に、休止符を入れた。
「今、あれを持ってるか？」
　背を向けたから言えたことだった。割り箸で余った漬物を寄せながら上総はもう一度繰り返した。
「定期、あれ、持っているんか？」
「定期入れか？　持ってきてないよ。別に必要じゃないもん」
「あの、というか、さ」
　箸の先が空の弁当箱の中、くるくるとさまよっていた。上総も自分で、なんでこんなことしなくちゃ、いえないのかわからなかった。みじめったらしくて腹が立った。すとんとごみ箱にほおりこんだ。南雲に振り返った。
「昨日、俺が拾っただろ。なぐちゃんの定期入れをさ。その時、別に見る気なかったんだけど」
　もう一度息を吸い込んだ。落ち着いた顔を作ってみた。教壇でロングホームルームに立つ時と同じ感じにだった。
「コンドーム、持っていたんだろ」
　貴史から聞いた、とは絶対に言う気などなかった。
　南雲はぽかんとした顔で口を半開きにしていた。
　驚かせてしまったのだろうか。やはり、知られたくなかったんだろう。いくら仲間内で、息を吹きかけて巨大風船のようにして遊ぶことはあっても、本来の目 的を忘れるためにおどけるだけ。ふくらんだ風船の中に何が入るか、何を見るのか、それを認めたくないから隠すだけ。普段の上総だったら決して、質問なんて しなかっただろう。もし、南雲以外の相手だったら、決して口になんてしなかっただろう。かくしてしまいたいものを、ひっぱりだすなんて耐えられなかった。 でも、今、この時。南雲にだけは本当のことを教えてほしかった。「つきあい」という言葉の影にひそむ、自分の大嫌いな感情を、南雲の口から、分かりやすく 話してほしかった。

　驚いた顔もそれほど長くは続かなかった。うつぶせになり、顔をいったん隠した後、すぐに起き上がって笑いかけてきた。

「りっちゃんは、清坂さんにそういうことしたいと思ったことないんか」
「なんでそういう話に持っていくんだよ」
「違う違う。俺、からかうつもりで言ったんじゃないよ。りっちゃんすげえそういうの嫌っているの知ってるよ。単にお守り。それだけだよ」
　ひとりでいきなり頬が腫れているようだった。南雲の方は落ち着いて、いつも通りのすかっとした笑顔で話しているのに、自分だけが自意識過剰状態。でくの坊状態だった。南雲の言葉はさらに続いた。
「俺、彰子さんと付き合ったのって三カ月前だろ。でもその前に、いろいろ女子と出かけたり、会ったりしたことはしょっちゅうあったんだ。小学校の頃から、 バレンタインデーにはチョコレートたくさんもらうの普通だったし、この学校では話したことないけど、ファーストフードの店でジュース飲んだりもしたことあ るんだ。だから俺、軽いっていわれても仕方ないんだって、思ってたんだ」
「本条先輩と同じくらいにか？」
　比較対照の相手がまずいのではと思いつつも、上総は尋ねた。
「いいや、だって本条先輩はするとこまで行ってたんだろ。確か、小学校六年の夏に、きもだめし大会があってそんときに」
「その辺の事情は、たぶん俺の方が事細かに知っていると思う」
　当たり前だった。一年の頃からの付き合いだ。
「してないしてない。でもさ、うちの親の方がかえって心配したみたいでさあ。中学に入ってすぐ、父さんに箱ごと、渡されたんだ」
　絶句する番だった。
「あの、箱ごとって、その、ダース単位で数えるっていう、あれでか？」
　南雲は当たり前の顔をして頷いた。
「やっぱりそういうのって、珍しいんだなあ。俺、どこのうちでもそうなんだって思ってたから別に何も思わなかったけど」
「そういう話、全然したことないし、したくもない」
「俺が男である以上、絶対に逃れられないことなんだから、かならず一枚持って通えって。たぶん、規律委員会でそれがばれたら騒ぎだろうな。でも、うちの父さんの言うこともそうだなって思ったから、いつもは定期に入れておくようにしてたんだ。あまり何も考えないで」
　妄想で浮かんでいた生々しいものとは別のようで、上総は戸惑った。
「でも、彰子さんと付き合っただろ。今まではただのお守りって感じだったけど、最近うちの父さんが言ったことが妙に分かるんだ。『男だったら絶対に逃れられない』ってことがさ」
　わかる。たぶん南雲とは別の意味かもしれないけれども、上総には逃れられない感情というものが、伝わってきた。へらへら笑いのない、乾いた空間の中で流れる南雲の言葉が心地よくて、上総は自分のベットに腰掛けた。想いをこめて、言った。
「言いたいことは、なんとなくわかる」
　これ以上、聞く必要はないと思った。

どうして南雲はここまで奈良岡のことを想うことができるのだろう。
まっすぐすぎるほどだった。
どうして惚れたのか、聞いたことはなかった。きっかけは何だったのか、どうしてあそこまでべたべたしたところを見せつけようとするのか、聞きたくても聞けなかった。
たぶん、「つきあっている」者同士だったら感じるものがあるのだろうと思っていた。独り占めしたい、誰にも触らせたくない、そんな激しいものが、きっと南雲の中に溢れているのだろうと思っていた。
上総には絶対に理解できないものだった。同じ「つきあい」の相手がいても、全く感じられないものばかりだった。定期入れの中にゴムの包みを入れてお守りにするとか、考えたことすらなかった。
でも、南雲の父が言うとおり、「男だったら絶対に逃れられないもの」だけは、いやというほど感じていた。
「あ、りっちゃん。俺、実際はまだ、封印切りしてないよ。二枚くらい、実験で開けてみたことはあるけれどさ」
南雲はからりとした表情で答えた。
「練習用にか？」
「うん。でも、今はまだ無理かな。俺まだ、金を稼ぐことできないから」
「就職するまで待つって、ことか？」
「相手に責任を取ることができるまでったらどうしてもそうなるよな。親にもいっつも言われてるでも、それまでがまんする自信なんて、ないけどな」
「じゃあ、本条先輩はどうなるんだ？　あの人、もしどちらかの彼女としくじったらどうするんだろうなあ。たぶん念には念を入れているだろうから、そういうことはないと思うけど」
二人の恋人の間を行き来しつつ、光源氏のような生活を送っている、青大附中の女ったらし本条里希先輩のことを思い出した。評議委員長としての敏腕ぶりや後輩たちへの面倒見のよさは見習いたいけれども、例の一点だけはどうも、ご遠慮したかった。
「りっちゃん、俺さ、比較的そういうチャンスって、あった方だと思うんだ。でも一年の頃は、全然そんなこと考えなかったんだよなあ。でも、なんかの拍子で彰子さんと付き合って、それから」
ふうっと息を吐き出しながら、ベットに大の字となり、
「絶対見せられねえよな。そういう時の、俺の頭の中。きっと向こうは、俺が冗談でやっているとしか思ってないんだろうなあ。まだまだ、信じてもらってないから、俺は俺なりにやってみせてるんだけどさ、好きだったら好きってきちんと伝えるのが、南雲家の流儀なんだけどさ」

３　二日目夜に向けてのセッティング

　しばらく話が途切れた。上総は南雲をそのままにして時計の文字盤を見た。四時にさしかかろうとしていた。昼下がり、にふさわしくない言葉ばかりが部屋の 中にたむろしたのに、今の上総にはすべてが気持ちよかった。自分の中で名づけられなかった、もやもやしたものに、南雲がすべて命名してくれたかのようだっ た。どうして南雲はここまで上総の感じているものをわかってくれるのだろう。菱本先生や貴史のように、痛すぎることなく、上総に入ってきてくれるのだろう。
　上総は窓辺に立って耳を済ませた。バスの戻ってくる音が聞こえてこないか、それだけを確認したかった。まだ異常なしだった。
「なぐちゃん、今晩が最後のチャンスかもしれないよ」
「なんだよいきなり」
「みんな、菱本先生にひっぱりまわされてぼろぼろに疲れ果ててると思うんだ。たぶん、昨日の俺みたいに夜中、とっつかまることもないと思うよ。きっと、伝えたいこととかたくさんあるんだろうし、どう考えても昼間に話せないことだってあるだろ？」
「夜這いを推奨する立村くん、いったい何を言いたいんだ？」
「ただし、封印切は許さない。明日の朝、定期入れ、薄くなってないかどうか確認するからな」
　そこだけ生真面目につぶやいた。

　たぶん南雲には、どうして上総が余計なおせっかいをやいてしまったのか、わからないだろう。それでよかった。上総はただ、青空を部屋から見つめながら過ごした時に、恩返ししたかっただけだった。
　膝を組んで南雲の目をじっと見詰め、思いつくままに言葉を発した。
「夕方、夕食前にまたミーティングやるだろう？　今日の反省というか、なんというか。その時に俺が夕食後の予定として、菱本先生の部屋でゲームをするかな にかの案を出す。そうしたらお前のグループや他の女子グループもだいぶ混じるだろう。菱本先生の部屋たって、そんなに広くないし、途中で眠くなったからと 言って抜け出すのも自由だ」
「ああ、だいたいりっちゃんの言いたいことはわかる。でもなんで」
「最後まで聞けよ。あの先生のことだ。最後の夜だし夜中まで盛り上がるさ。ロビーには人気もなくなるだろうし、ホテルの中には外に、ほら、鳥が飛んでいた 池とか散歩するとこもあるさ。どうせだったらそこでふたりきりになればいいじゃないか。まあ、『封印』を切ることは無理かもしれないけれどさ」
　言い切った後、南雲の言葉を待った。

　案に反して、南雲の顔はだんだん火照ってきた。
「あのさ、りっちゃん。俺、あまり聞いたらいけないと思うから聞かないけどさ、どうしてそういうとてつもない案、思いつくんだ？　俺がもし、りっちゃんの 立場で、それこそ清坂さんとお前がそういうことになっていたとしても、たぶん言わないと思うな。いや、評議委員長だとか規律委員長だとか、そういうのは抜 きにして」

「いや、なんとなく。なぐちゃん、なにかがずっとひっかかったままなんじゃないかな、って思っただけなんだ。バスの中とか、山登りとか、している時、俺の中で勝手にそう思っただけなんだ。余計なお世話だったらごめん。しないほう、いいかな」
　不意に、南雲を怒らせてしまったかと不安になる。
　最後の方はかすれてしまった。。
「いや、そんなことぜんぜんありませんって。あのさ、その『なにかがずっとひっかかったまま』ってどういうことなんだよ」

　答えに迷っているうち、くぐもった車輪の音がかすかに聞こえた。
　窓べにもう一度立ち、身を乗り出すと、さっきまでちゅんちゅん鳴いていたすずめたちがあっという間に遠くへ散っていった。同時に小さなマイクロバスが滑 り込んできた。時間どおりだった。ゆっくりバックして、駐車場に止める様子。何度か前、後ろに前後した後、ぴたっと止まった。
　空の色は、まだ黄色くなりきらない山々の色合いに、ほんの少し似ていた。からすがばさばさと羽音を立てて窓を横切っていく。上総は南雲を手で招き、バス から降りてくる二年Ｄ組連中を指差した。菱本先生を始めとする思い思いの格好をしていた。ひとり、こちらを見て手を振った男子がいた。隣で南雲は手を振っ ていた。上総は身を乗り出したまま、ただじっと降車してくるひとりひとりを見つめていた。

その九　集合三十分前のよしなごと

１　いきなりふたりっきりのひとときに

　貴史が戻ってくるのならば、ということで南雲は自分の部屋に戻っていった。あまったクッキーを半分持っていった。すでに腹の具合は問題ないようだった。 どうみてもあれは仮病じゃないだろうか。まだ明るい空の色を眺めながら、上総はタオルケットをたたんだ。一枚、貴史のベットに戻しておいた。
　朝とは違う、ひくくくぐもった声がわやわやと廊下に響いていた。みな、相当歩きまわったかなにかしたのだろう。隣の方ではドアを閉める、びちっとした音 が響きわたっていた。そろそろ来るだろう。長丁場のマイクロバスツアー、何が起こったのかをまずは「影のリーダー」羽飛貴史に確認しなくてはならない。た とえ菱本先生に「だだっこの評議委員」だとか言われようが、これは義務だ。
　隣の部屋ではすでに話し声が聞こえる。なのに、なかなか戻ってこないのはなぜだろう。女子の気配もかすかにしたのだけれども、おかしい。一応予定では、三十分くらい休憩した後、五時からふたたびクラスミーティングを行うよていだった。上総がすでに予定を組んでおいた。
　宿泊研修二日目の反省および、帰りの予定についてまた話し合う予定だった。

　南雲に約束した通り、今夜は徹底して菱本先生のところでボードゲームをやろうという企画を、考え中だった。もちろん上総は参加する気などさらさらなし。でも、野郎連中は乗ってくるだろう。そういう、のりのいいことが、貴史もみな好きなのだ。
　十分くらいして、やっとノックがした。
　黙って入ってくればいいのに。返事だけした。ドアが開いた。
「ごめん、入ってよかった？」
　思わず上総はベットから飛び降りた。
「清坂氏、あの、どうして」
　美里が橙色のワンピース姿で、するっとドアの隙間から入り込んでいた。後ろ手でドアをぴたっと閉めた。人差し指を口に当てて、
「貴史、ちょっと遅くなるって。菱本先生に呼ばれたみたいなんだ。一応、評議委員としての報告だけ、しといた方いいかなって思ったの。今、大丈夫？」
　良くみると橙とほんのりレモン色が大きく交差している、柔らかい雰囲気の服だった。見たのは初めてだった。
「あの、古川さんには断ってきたのか」
　怖い下ネタ女王古川こずえと同室の美里には、念を押しておいたほうがいい。やっぱり忘れていたみたいだった。慌てて両手で口を押さえた。
「ごめん、内緒できちゃった。あとでまたつっこまれるかなあ」
「わかった覚悟はしとく。それより、清坂氏、とりあえず今日の出来事だけ頼む。あいかわらず

、ひとりで舞い上がっていたのか？　うちの担任は」
　美里は答えるまえにぐるっと見渡して、デスクの下に納まっている椅子をひっぱりだした。別に、ベットの上に坐ったっていいのに。上総は自分のベットに腰をおろし、足を組んだ。じっと見つめられ、まだ口もとにご飯つぶがついているのかと思った。かるくぬぐった。
「立村くん、もう具合、大丈夫なの？　貴史が言ってたけど、相当昨日の夜、具合悪そうだったって」
「羽飛は何も言ってなかったか？」
　美里たちの部屋の前で起こった出来事を、聞かされていないのだろう。表情がいつも通りだということは、とりあえず嫌われていないってことだろう。安心して上総は尋ねた。
「貴史は言ってないけどね、でも、隠し事しても無駄だからね。立村くん」
「隠し事ってなんだよ」
　唇の端をきゅっと上げ、美里は椅子を上総の膝元にぐっと近づけた。
「水口くんがみんなしゃべってくれたからね。どうして何も言わなかったのよ。私、水口くんたちの部屋の向かいにいたじゃない。私が代わりにノックしてあげ たってよかったのに！　全く、いっつもそうなんだから。立村くんって、自分でみんな責任取ろうとするから、ほんっと、いらいらする！」
　自分の口の形は、きっと「うそ？」と言う形だったに違いない。
「どういうことだよ、清坂氏。すい君から聞いたって何をだよ」
「だから、おねしょが直ってないから、立村くんが代わりに起こしにいったんでしょ。でも、菱本先生と鉢合わせして、そのまま倒れたんでしょ。水口くん言ってたよ。廊下の騒ぎで目が覚めたって」
「すい君本人からか？」
　予想通り、美里は首を振った。
「半分はね。でも、ほとんどの説明は菱本さん。バスの中で貴史とふたりで話を聞きだしたのよ」

　嫌な予感はしていたのだ。たぶん席からして、貴史と美里、そして古川こずえ、極めつけが菱本先生というあのバス前列で、何かがおこらないわけがない。しかも、比較的三人は菱本先生になついている。上総が極端に機嫌悪くなるのであまり普段は見せないだけだった。
　ゆっくり上総は言葉を選びつつ、尋ねた。
「バスの中でなんでそんなこと、聞こうなんてしたんだよ」
「だって、立村くんのこと、みんなとんでもない噂流していたんだよ。たぶん知らなかったと思うけどね。私たちの部屋に忍び込もうとしていたんじゃないかとか。とにかく、噂だけはすごかったんだから」
「女子の間でだろう。そんなの、ほっといてくれたら落ち着くのにさ」
　別にいやみを言ったつもりはなかった。でも美里は敏感に反応した。
「なによ、こっちだってそんなこと言われたら、いろいろと大変なんだからね！　まあ、立村く

んのことだからまた何か、考えがあるのかなあと思ってがまんす るつもりだったんだから。そしたら貴史が、水口くんの方にいろいろ話を聞きだし始めて、そこで、だんだん内容が見えてきて、で、最後に菱本先生がね」
　よくわかった。無意識に言葉が漏れた。
「羽飛、あいつなんでそんなことを」
　口をとがらせて美里は上総を遮った。
「どうしたのよ。立村くん。貴史もちょっとやりすぎだったんじゃないかとは思うけどね、でも、立村くんがまた変なこと言われるんじゃないかって気をつかってくれたんじゃないの。そんなこともわかんないの？」
　上総は思わず、美里の顔をまじまじと見つめたくなった。
　言葉がかちんときたからではない。
　自分の噂がどんなものか、気にかかったからでもない。
　上総にしか見えない、タオルケットのうすいものが、すうっと美里の間に挟まったような、そんな気持ちになったからだった。
　本当の感情を隠してくれるそんなもの。
　気付かないのか美里はいきりたって続けた。
「言いたいならはっきり言えばいいじゃない！　水口くんのおねしょのことだって、恥ずかしいかもしれないけれど、うちのクラスの連中はそんなことで笑う奴 なんていないと思うよ。それに立村くん、出発から具合悪かったんでしょ。はっきり言ってくれれば、菱本先生だってそれなりにがまんしてくれたと思うよ。た だ、いつも立村くんがひとりでわけわかんないことやってるから、みんなどうしていいかわからないんじゃない」
「なにも今、そんなこと言うことないだろ！」
　穏やかに言い返したかった。精一杯、そうしたつもりだった。でも語尾が強くなってしまった。
「それにさ、立村くんのことをどう誤解してたかなんてわからないでしょ。私の部屋に真夜中忍び込もうとして、変なことしようとしてたんじゃないかとか、 言ってる子だっていたんだよ。そう思われたって仕方ない様子だったって、菱本先生も言ってたよ。部屋のノブを握り締めてたって」
「それが本当だったらどうする？」
　美里はあきれはてたようにふっと笑った。
「女子の部屋はカギを掛けられるってこと、聞いてたでしょ。私かこずえがドアを開けたままにしなければ、入れないってこと、知っているよね。そんなこと忘 れるような立村くんじゃないもんね。でも、他のクラスでは立村くんが本条先輩とホモなんじゃないかとか、手当たり次第女子に手を出してるとか、ひどい噂た くさんあるんだから。貴史、きっとそれ聞いてまた、変なことになるんじゃないかって思ったんだよ。そのくらい、察してよ」
　言い返せない。その通りだ。頭の中ですぐに答えは出ていた。貴史の考えそうなことだとわかっていた。でも、何か言い返したい。

　考える間もなく、自分の口が勝手に動いていた。
「それは感謝してる。わかっているさ。でも、俺が女ったらしだって言われるのはもう、前からのことなんだからいいけどさ、すい君の気持ちも考えてほしかったんだ」
「他人なのに、どこまでその気持ちが読み取れるっていうのよ。立村くんは誰よりも水口くんの気持ちを読み取っている自信があるっていうの？　思い上がりもいいとこじゃない！」
「読み取ってるんじゃない、勝手に感じるんだよ。清坂氏にはわかってもらえないかもしれない。きっと羽飛も分からないと思う。でも、少しでいいから想像し てほしい。もし清坂氏がたとえば、知られたくないことをみんなの前で暴露されたら、どれだけ悔しい思いをするかって、想像はつくだろ？　すい君だって同じ だよ」
　美里は少し黙った。何かを思い出そうとし、すぐに真っ正面に向いた。

「私だって、少しはわかろうとしてるつもりだよ。立村くんのこと」
　唇を一瞬噛んだ後、軽く首を振り、言葉を続けた。
「知られたくないこと誰だってあるものだってわかってるし、立村くんが水口くんのことを気遣ってあげてるのもわかる。勝手に私がわからないって、決め付けないでよ」
「決め付けたわけじゃないさ、ただ」
「でも、その代わりにいつも立村くんがとばっちり食っているの見てると、私も貴史も、いつもいらいらするんだから。立村くんは自分ががまんすればいいと思ってるでしょ。周りの、立村くんの味方でいたいって奴が、迷惑することなんてぜんぜん、考えてないでしょ」
「あのさ、清坂氏」
　さすがにだんだん、腹に据えかねるものがあった。静かに答えた。
「それって失礼すぎるくらい、失礼だよ！」
「俺が言いたいのは、すい君に言いたくないことを白状させようとしたことが許せない、それだけだよ」
「でも、言ってくれなかったら立村くんは卒業するまで、私と変なことしようとしたってことになっちゃうんだよ。私も言われるし、あんただってこれ以上スケ ベなねたでつっこまれたくないでしょ。水口くんには、かわいそうなことしちゃったなとは思うよ。けど、誰も、それでからかおうなんてしなかったよ。本当の ことは本当だけど万引きしたとかタバコ吸ったとか、そういうことじゃないもんね。仕方ないことなんだもん、他のクラスの奴が何か言ったら、きっとみんなか ばってくれると思うよ」

　わかっていない。わからない。わかってもらうことなんて、できないんだ。

　目の前でびしびしと続ける美里。襟ぐりから鎖骨がくっきりと見えていた。制服を着ているときよりも骨の形がくっきり見えるのはなぜだろう。思ったより痩 せていることに上総は初めて気付いた。うっすらと焼けた肌は、妙につるつると光っていた。こういう女子と、小学校の頃は話したことがほとんどなかった。仲 間に入れてもらったこともちろんなかった。なのに、今は自

分の「彼女」だ。「付き合っている」間柄だ。
　言いたいことをすぱすぱ言い放ち、それがいやみにならない。
　さりげないようでいて、実は誰よりも自分のことを思ってくれている。
　今のことだって、要は上総がこれ以上いじめられないようにしようとしてくれた、それだけのことだとわかっている。だから怒ることなんてできない、はずなのだ。
　怒ってはいけない。ただ、あきらめろ。
　上総は自分に言い聞かせた。
　俺の感じ方が異常なんだ、さっきなぐちゃんに認めてもらえたと思ってひとり喜んでいたけど、やっぱり、清坂氏や羽飛からしたらおかしいよな。それがやっぱり、普通なんだ。

「もういい。後ですい君に謝っとく」
　吐き捨てるように、目をそらして上総はつぶやいた。それが精一杯だった。まかりまちがっても「ありがとう」とは言えなかった。
「別に立村くんがばらしたわけじゃないんだから、謝ることないのよ。なんでいつも立村くんは人の顔みて謝ろうとするわけ？　なんも、悪いことしてないじゃ ない。もっと堂々としたっていいんだよ。変人奇人オンパレードのＤ組がどうしてこんなにまとまっているのか、それを作ったのは立村くんなんだから」
「違うだろ、クラスをまとめているのは清坂氏と、それと羽飛だろ」
　まずい、と言った後で思ったけれども遅すぎた。
　舌打ちしてすぐに謝ろうとした。
「ごめん、言い過ぎた」
「本音だったらあやまらなくたっていいのに。もしかして菱本先生に言われたことまだ気にしてるわけ？　菱本先生は冗談でからかっているだけだって気付かないの？　なんでも真っ正面から受け止めるのが立村くん、勘違いする悪いとこだよ」
　言ったことへの反撃。されて当然だと上総は覚悟した。
　勘違いする悪いとこだよ、か。
　そうだよ。その通りだよ。
　俺の感じ方はすべて、勘違いなんだ。
　ずっとみんなに言われてきた。わかっている。
　でも、どうしてもそう感じられない。
　どうして清坂氏も羽飛も、そう軽く受け流せるんだ？

　受け流せなかった上総はもう押さえられなかった。
「わかったよ。俺の感じ方がおかしいだけなんだ。悪かった」
「またそうやってひがむんだから。だからこずえにガキ扱いされるのよ」
「もういいよ終わったことなんだからさ。どうせこれからクラスミーティングだろ、その時にすべて片付ける」

「また変なこと考えてるんじゃないでしょうね」
「俺にとっては普通だけど、清坂氏にとっては異常なことかもしれないさ」
「どうして最初から私にわからないって決め付けるのよ。言ってくれなかったらわかんないよ、超能力者じゃないんだもん。私だって、立村くんがどうしてほし いかわかんないから、私が正しいってことするしかないじゃない。教えてくれたら、そうしようって思うよ。私の本当は、立村くんの本当じゃないって、そのく らい、わかってるもん。どうして全然言ってくれないのよ！
　もういい、知らない！」
　片足で美里は椅子をけって立ち上がった。勢い良すぎてばたんと壁にぶつかった。ポケットを探りながらもう一度上総をにらみつけた。黄色いチェックの包み紙をテーブルの上に叩きつけた。正方形の小さな包だった。かたっと音がした。
「勝手にしなさいよ。もう、知らないから」
　振り向かずドアを開けっ放しにして出て行った。自然にドアが閉まるのに、少々時間がかかった。その間上総は呆然と美里の背中を見送っていた。頭の中で、まだ美里の言葉の真意が解読できなかった。
　怒っているのに、やさしい、なのに縁きり宣言のような言葉。

２　反省、および事後処理その一

　しばらく口を利けないでいた。痛いところばかり知っているかのように突く美里の言葉をかみくだけないでいた。いつもだったらベットにもぐりこんで寝るか なにかするんだろう。でも、起きている上総の頭はすでに、二年Ｄ組評議委員として働いていた。優先順位でいけば、しなくちゃいけないことは。
　水口へ、あやまることだった。
　もう一度「しおり」の部屋番号表を照らし合わせ、受話器を握り締めた。０発信で部屋番号をダイヤルした。金沢かもしくは水口か。すぐに出たようすだった。眠そうな声で「はい」と聞こえた。
「もしもし、立村です。すい君か？」
「そう」
　相変わらずぼんやりした声だった。小学生に話しているような気がする。でもあえて、上総は普通にしゃべるようにしていた。意地だった。
「あの、昨日、ごめん。本当にごめん。俺が悪かった」
「なんで？」
　間の抜けたような声で、水口が答えた。後ろで「誰？」と聞く様子だった。たぶん金沢だろう。そのまま筒抜けで「立村からだけど」と返事する水口。
「バスの中で、なんというか、無理やり、しゃべらされたんだろう。今、聞いたんだ。俺がいたら絶対そんなことさせなかったんだけど、約束守ってやれなくてごめん」

口の中で繰り返している謝り文句。一度言ったら、こだまのように何度も響いているように聞こえた。気の利いた言い訳が見つからない。しゃべっているうちに自分をぶん殴ってやりたくなった。なのに、受話器の向こうにいる水口の声はぼおっとしたままだった。
「いいよ。起きれたし」
「ほんとは中に入って起こすつもりだったんだ。なのに」
「廊下、うるさかったからすぐ目覚めたし、それに」
水口は、トーンの変わらないねむそうな声で続けた。
「菱本先生も電話してくれたから、完全に起きること、できたから」
「あのさ、菱本先生に話してないって言っただろ！」
「しかたないよ。だって、僕のためだって、言ってたもん」
それでまるめこまれたのか。
最後に「本当にごめんな」とつぶやき、上総は受話器を置いた。
脱力状態だった。

次に何をすべきか。
付き合い出してから初めての大喧嘩をしてしまった美里に、どう対処すべきか。これが問題だ。
上総からしたら、美里の言い分は真実を突いているところもあるけれど、ただ言い方がもっとあるんじゃないかというのが本音だった。

あんなにわめかなくたっていいじゃないか。そしてもっと分かりやすく言ってくれたっていいじゃないか。
第一、話をすりかえたのは向こうの方なんだ。
俺はただ、すい君に言いたくないことを無理やり言わせたことが許せないと言っただけなのにだ。
確かに俺は神経質すぎるのかもしれないけど、約束を破ってしまうのはやっぱり、許せないことだろう？
それに、俺のためにって言いながら結局は自分のことを認めさせようとしてるだけじゃないか。俺は黙って頭さげて感謝しなくちゃいけないのか？そうできないのがおかしいのか？
言いたくないことを言わないで怒られるなんて、そんなのあるかよ。

しかし、そこまで考えるうちにはたと、気付いた。
このままだったら、清坂氏に愛想つかされる可能性大じゃないのか。
一ヶ月前だっていうのに。
付き合ったばかりだっていうのに、もう振られるのか？
今までどおりの友達でいられればいいけどさ。
なんかそれ以上の険悪な関係になっちゃったらどうするんだよ。

向こうとは来年もずっと評議委員で顔合わせるのに。
ずっと無視されたら、地獄だぞ。
それよりなにより、清坂氏としゃべることできなくなったらどうするんだ。まともに話のできる女子なんて、あと古川さんくらいしかいないし、それもみんな下ネタばっかりだ。

希望は全くないわけではない。こじれないうちに自分の方から頭を下げて、徹底して謝れば美里は機嫌を直してくれるかもしれない。子供の頃から母を通して 学んだ知恵だった。母を怒らせた時は「ごめんね、ごめんね」と何度もすがる。もしくは思いっきり反省しているかのようにうなだれつづける。結局は大泣きし てしまい、また怒られるのがパターンだったけれども。美里とのつきあいはともかく、友達ですらいられなくなるかもしれないというのは怖すぎた。

３　おみやげの数々

「たーだいまー！　立村起きてたか？」
とっぴょうしもない声で誰がきたのかすぐにわかった。
ほこりだらけの格好で、貴史はひょいっと何かを投げてよこした。
平べったい、手のひらに載りそうなくらいのものだった。受け止めそこねたらまぬけ。片手で、バランス崩さぬように捕まえた。
「もしかしてみやげものか？」
「その通り。これ面白いんだぜ。開けてみろよ」
言われるままに開いてみると、円型のコースターっぽいものだった。表面に薄く、プラスチックのようなものが回るように貼り付けられていた。金色の小さなドットがきらきらしていた。
いわば手のひらサイズの、星座盤。
よく見ると円の外に小さく、三百六十五日分の日付が綴られていた。矢印を目的の日に合わせると、その日の夜空が読み取れる仕組みとなっている。
「ありがとう。でも羽飛にしてはめずらしいよな。こういうの買うなんてさ」
「昨日お前が寝込んでいる間、夜の散歩に行っただろ。そのときさ、すげえ空の星が近くってさ、もう、びかびかびかって感じで光ってるんだ。いやあ、青潟の空と違うって思って、今夜こそもっと夜空をチェックしねばなってことで」
自分の分も買ったらしい。わざわざ旅行先で買うこともないだろうに。
「わかった。今夜は俺も見たいな」
「とにかくすげえぞ。今日も雲がないから、たくさん見られると思うぞ」
上総は枕もとに、星座盤コースターを置いた。忘れないようにしなくては。
「それはそうと、本日の菱本先生は何騒いでた」
「あれ、美里から聞かなかったのかよ」

「あの、ちょっとな」
　口篭もった。どうやら貴史も、美里が最初に上総へあいにきたということを知っているらしい。
「あ、どうしたんだよ。お前らまさか、することしたんじゃねえだろうなあ」
「ばかばかしい」
　話を逸らし、貴史にもう一度尋ねた。
「相変わらず、クラス全員でぞろぞろって歩いたんだろうな。自由行動とかほとんどなかったんだろ」
「まあなあ。でも、結構刺激的なこともあったからよかったんじゃねえか」
「なんだよ、その「刺激的」ってさ」
「あやうく、「青大附中の教師、危うく他校と大喧嘩」ってとこかな」
「なにやらかしたんだよ、全く」
　詳しい話を聞くにしたがって、上総は頭を抱えてしまった。
「みんなで武家屋敷とか、茶室見学とかいろいろ回っていたらさ、どこかの高校生の集団とばったり顔合わせちまって。中に入ろうとしたら、いきなりそいつ ら、横入りするんだよ。俺もむかっときて何か言おうかと思ったら、やられた。菱本さん、血が昇っちまって、『お前らどこの高校だ！　名を名乗れ！』って怒 鳴ったんだ。そいつらもあやまりゃいいのにな、けんかを買いますって顔するもんだから、危うく火がつくとこだったんだ」
「あの、それってさ、Ｄ組の連中がちょっかい掛けたわけじゃないんだよな」
「もちろんそうだって。俺たちはおとなしかったなあ。菱本さんだけがエキサイトしちまって、とうとう間に、向こう側の先生がやってきてしきりに頭下げてたぜ。俺たち、唖然。呆然。どうすりゃいいのって顔してた」
　これは、本音でいうしかない。
「おいおい、青大附中の恥だってさ。あやつ、気付かないのかよ。仮にも教師だっていうのにな。そりゃ、横入りはむかつくかもしれないけど、けんかを売るのはやめろよなって言いたい」
　手をむすんでひらいて、とやりながら上総は話の続きを促した。
「その他になにかなかったのか？」
「行きがさ、ちょっと渋滞にひっかかったみたいで、一時間くらい到着するのが遅れたんだ。したら、女子がさあ、トイレ行きたがってちょっと、それでばたばたしてたけどな。美里がうまく治めてた」
「野郎連中はどうだったんだ？　あの、なんというか」
　そういうこともあるんでないかと、用意させたペットボトルのことを言うべきかどうか迷った。
　貴史はにやりとしながら上総の肩をかるく叩いた。
「水口がさ、言ったんだよ。『立村がトイレ代わりに使えって言ってたから、持ってきたんだ』ってさ。あいつ、閉所恐怖症っぽいとこあっただろ。トイレにい けないとか思うと、パニックになっちまうとこ。でも、お前に万が一のためにって言い含められたのが、そうとう効いたらし

いんだ。『これがあるから安心なん だ』ってぽろっと言ってしまってさあ」
　話が読めず、上総はもう一度尋ねた。
「すい君が何言ったってさ」
「白状しろよ。立村。お前、水口の面倒見るために外ほっつき歩いてたんだろ。あいつみんな、しゃべっちまったよ。なーんも考えてないって顔でな。『立村が全部、ペットボトルだとか、ねしょんべんのこととか、みんなどうすればいいか考えてくれたんだ』とな」
「まさか、あいつみんなしゃべったのかよ！」
　電話口で泣きながら「いきたくない。笑われる、いきたくない」としゃくりあげていたのはどこのどいつなんだ。全く、俺は何を今までやってきたんだよ！
「だから俺も言ってやったんだ。俺も小学校四年まで毎晩、布団に地図を描く生活だったんだってさ。みんな似たような経験してるから平気だろ、ってな」
「あ、そう」
　力なくつぶやくのがやっとだった。

　そろそろ下でクラスミーティングが始まる頃だった。
　評議委員の仕事発動の時間だった。
　あと十分くらい余裕があるだろうか。手帳を取り出して予定を確認した。
　提案事項をいくつかまとめてある。南雲と約束したことを思い出し書き加えた。夕食後、ボードゲームを菱本先生の部屋でやろう、という案だ。もちろん希望者だけだ。上総は最初だけ様子を見て、途中で具合悪い振りして抜け出すつもりでいる。
　貴史には話さないでおいた。
「あれ、なんかあるぞ。お前のか？」
　貴史が机の上に残っていた小さい包みを摘み上げた。星座盤コースターが入っていた袋と同じ包みだった。たぶん、同じ店に入ったのだろう。
「ああ、清坂氏が置いてった」
　握り締めた後なのだろう、角が折れていた。貴史は目の前にぶら下げて数回揺らした後、投げるしぐさをした。上総は両手を受ける形にして差し出した。投げずに、ぽとんと、手の中へ落としてくれた。
「開けろよ。俺も見たい」
「そんな、俺にくれたものじゃないかもしれないしさ」
「いや、あいつ、古川とふたりでなにやら選んでいたぞ。お前のことしゃべりながらな。この店、土産屋なんだろうけど、珍しいものがたくさんあって、女子には大受けだったみたいなんだ。あの星座盤コースターもなかなかのヒットだったしなあ」
　何度も指差す貴史。デリカシーのないことをしたくない上総。
　隣に坐ってきて、べたっとくっつかれてしまった。暑苦しい、汗臭い。まだぐずぐずしていると貴史はさっと、包みをひっぱるしぐさをした。
「なあ、見せろよ見せろよ」

　なんとなく硬い、金属っぽい手触りが紙の上からした。シールを爪ではがし、そっと開いた。ちゃりりと聞こえた。
「キーホルダーかよ」
　貴史が覗き込み、つぶやいた。
「すげえ、あいつらしくねえ。つまらねえ」
　わっかに人差し指を入れて、今度は上総が目の前にぶら下げてみた。
何も描いていない、列車の切符くらいの大きさ。柄は緑色のタータンチェックだった。黄色と赤の細い糸が正方形に交差している。ふちは黒い合皮で覆われている。ぎゅっとにぎると、心地よく納まった。
「これだけかよ。すげえさみしいの」
「チェックのところに、あとで名前とか電話番号とか、彫るんだよ」
「ふうん、美里もっと気の利いた物みやげにするんだと思ってたけどな。あ、っそっか。もしかして、今夜、『私』をプレゼントなんて考えているんじゃないだろうなあ。立村、俺たちの仲で抜け駆けは、ゆるさんぜよ」
　ひじで小突いた。
「そんなことするわけないだろ！」
　人差し指と一緒に、柄を握り締めたまま上総は立ち上がった。部屋の中をうろうろしないと落ち着かなかった。なんだか、勝手に手の中が汗ばんできた。ぐるぐると何度も、あいている場所を回った。
「なんか今の立村見てると、ストレスの溜まった馬が部屋の中をぐるぐる回るって話、思い出すよな」
「ああ、たぶんそうさ。ストレスさ」
　息を深く吸い、立ち止まった。貴史の方を振り返った。
「羽飛、一年半の付き合いに免じてひとつだけ頼みがある」
「ほほう、なんなりと申せ」
　にやにやしながら貴史が答えた。
「今から三分間でいい。トイレにこもっていてくれないかな」
「は？　なんでだよ。トイレなんて三十秒もしないうちに終わっちまうぜ」
「だから、あえて、そこを頼む。三分間だけ、俺をひとりにしてくれ」
　柄を握り締めたままで頭を下げた。
怪訝そうな顔をして、それでも仕方なさそうに貴史はユニットバスの中に入った。片手には時間つぶしのつもりか、もらってきた観光案内を持って。

４　事後処理　その二

　ばたんとしまるのを確認した後、上総はさっそく受話器を取った。
　しおりを取り出して、一番端の女子部屋をチェックする。内線番号は部屋番号と一緒。０発

信で、ゆっくりまわした。たぶん、そんなに時間経っていないから、部屋にいるだろう。
　一回鳴らすか鳴らさないかで、かちっと受話器のなる音が聞こえた。
「はい？」
　瞬間、上総は思いっきり後悔した。
　同じ部屋には美里だけじゃないってことを忘れていた。
　「朝の漫才」の相方も一緒だったってこと。
「あの、古川さん？　立村だけど」
　知らん振りして切るかどうか迷ったが、礼儀を重んじて名乗ることにした。
「なあんだ。立村なの？　ちょっと、美里出る？」
　部屋にはいるのだろう。でも声は聞こえなかった。こずえの、
「ほら、あんたのダーリンよ。出なさいってば」
と、調子に乗ってからかうせりふだけが嫌というほど響いた。隣の部屋、廊下に響きそうだ。こういう時にこそ、「背筋が寒くなる」と使いたかった。
　結局、再び話の相手をしてくれたのはこずえだった。

「悪いんだけど、美里出ないって言ってるよ。あんたら、もしかしてここでけんかしてたりしたの？」
　図星だけど、答えるわけにはいかない。上総はすっとぼけることにした。
「そんなことないよ。清坂氏、そこにいるんだろ？」
「いるけど、ねえ。用があるなら私が言っとくけどね」
「あんたに頼んだらどういうことになるかわからないだろ。怖い人だ」
「まあ、後で、美里にくわしーく、聞くからいいけどさ。でもせっかくじゃない。ご本人の口から、今なんで美里がああふくれてるのかを教えてもらいたいのよね。一夜を明かすんだから、私」
　察するに、美里はこずえにもまだ、上総との口論を打ち明けていないようすだった。何かがあったという雰囲気ではあり、隠せなかったらしい。こずえの性格 からして、かなり攻め立てたに違いない。答えてないということは、隠したいということだろう。はてさて、どう答えるか。時間はない。しかたない。破れかぶ れで答えた。
「じゃあ、一言だけ伝えてもらえないかな。さっきのもの、ありがとうってさ」
「さっきのものって、何よ何。気になるなあ」
「だから単なる御礼だって」
「美里から何かもらったの？　ははん、もしかして、売店で選んでいたあれかな？　ね、美里、そうでしょ」
　相変わらず声は聞こえない。頷いているか、首を振っているか。想像するだけだ。
「ああ、わかった。立村、美里に何かしたんでしょお！　部屋に連れ込むか何かしてたんだな。きっと」
「そんなんじゃない！」

　ここで声を荒げないですむ奴がいたら教えろと言いたい。
「だってさ、さっき美里が用事あるようなこと言ってどこかにいなくなってさ。まだその時は普通だったんだよ。でも、部屋に帰ってきたとたん、こうだもんね。で、立村からの電話でしょ。これで何かないなんて、絶対ないよねえ。さ、お姉さんに白状しちまいな」
　冗談ぬかせ。挑発に乗らず、上総はつとめて冷静に答えた。
「俺はただ、清坂氏にお礼を言いたいと思ったから電話したんであって」
「ああら、じゃあ直接部屋に来たっていいのにさ。ったく、昨日の夜だって部屋に忍び込もうとしてたんでしょ。菱本先生からぜーんぶ、聞いてるよ」
　話が違う。こずえは上総が夜這いするためにやってきたと思い込んでいるらしかった。誤解をこういう時は解きたいけれども、できない。歯がゆかった。
「ねえ、嘘じゃないんでしょ？　真夜中の二時過ぎに、うふふ、したかったんでしょお」
「だからなんでそういう話になるんだよ！　俺は用件があるからかけただけであって」
「なあに向きになってるんだか。ほんっと、あんたはガキだねえ。お姉さんは情けなくなるわ」
　こずえの十八番が出た。
「ばかばかしい」
　上総も同じく決まった相槌を打った。
「ばあか、知ってるよ。なあにあせってるのよ。ほらほら白状しなさいよ。美里もなんだか真っ赤になっちゃってるし・・・・・・やだあ、ぶたないでってば」
　受話器の向こうで女子同士の修羅場となっているらしい。けらけらと笑いつづけるこずえに向かって、美里の、
「そんなんじゃないからってば！　こずえってば何調子こいてるのよ！」
　ひそひそながら文句を言う様子がうかがえた。
「ほらほら、立村に丸聞こえだってば。しょうがないなあ。じゃあ伝言伝えとくよ。立村、あんた要るに美里に何を言いたかったわけ？　お礼？　それとも」
「分かった。古川さんを信じて一言だけ伝えてくれ。さっきは言いすぎた。俺が悪かったって」
　ほとんどもうやけくそだった。それだけ伝えて、上総は受話器をゆっくり置いた。置く寸前に、かすかにこずえの笑い声が響いていたようだったが、気のせいだろう。

　受話器を握り締めすぎていて、汗ばんでいた。べとべとして気持ち悪い。手を洗いたくなった。
　水を使おうと思って、ユニットトイレに向かったとたん、中から馬鹿笑いが聞こえた。
　忘れていた。
「羽飛、もう終わった。出てきていいよ」
　声を掛けるやいなや、ひょいっと顔をのぞかせた。貴史は持っていた観光案内のパンフを丸め、思いっきり頭上から叩き下ろした。よける間もなかった。
「痛いなあ。やめろよ」
　二発目は両手で挟んで受け止めた。

「お前ら、もしかして初めての『痴話げんか』ってやつ、やらかしたんだろ？」
「そんなんじゃないってさ」
　『痴話げんか』の響きが気持ち悪い。横を向いた。
「ったく、俺のいない間にまあ、やることやってるよなあ。お前も美里も」
「なんもやってないって言ってるだろ！　ただ、キーホルダーのこと気付いたって」
「じゃあ、なんだ？　なあにが、『さっきは言いすぎた。俺が悪かった』なんだ？」
　こつんと三発目、肩にきた。避けられなかった。
「羽飛、まさかお前、盗み聞きしてたのかよ！」
「こちらが聞くつもりなくても、お前の声で全部丸聞こえだって。お前もトイレに入ってみればわかるよ。みんな部屋の会話筒抜けなんだぞ。まったく、立村っ て、天才なのか抜け作なのか、よくわかんねえよなあ。ま、気にすんな。あとで美里に、お前が青ざめた顔して謝っていたこと、伝えてやるからさ。古川に伝言 するよりも、それの方が正確だろ？」
　頷いた。否定できない。
「そうだな。たぶん今ごろ、俺が清坂氏にとんでもないことをやらかそうとして逃げられたってことに、尾ひれついた状態で、女子全員につたわっているような気がする」

その十　クラスミーティングのよしなごと

１　女子評議委員からの指摘事項

　クラスミーティング開始ぎりぎりに二人大広間に下りていった。すでに全員揃っているようすだった。みな、上総のように神経を使う出来事がそうそうなかっ たのだろう。三十分の間に内線電話を二回もかけてしまうなんて、普通ないだろう。貴史と一緒に入っていくと、あんざしている連中が手招きしながら場所を 作ってくれた。上総、よりも貴史の顔だろう。男子と女子の坐るところは双方に分かれていた。どことなく、空気が重たい。ちょっとだけよそよそしい。こうい うときにはわかりやすい、南雲と奈良岡のカップルをチェックするが、あの二人は別だということを再認識するにとどまった。相変わらずにこにこ笑いかける南 雲に、困った顔して「ちょっとおとなしくなりなさいよ」言いたげにうなづいてみせる奈良岡。なんだかんだいって、この二人は最高の組み合わせなのだろう。
　美里は相変わらずつんと向こうを向いたままだった。髪の毛を小さくまとめておだんごにしていた。戸口のノブにカバーをかけたような感じだった。上総は無 理やり視界に入るよう、わざと隣を通り過ぎた。ぴくんと、肩を振るわれたように見えた。ぺたんと座り込んで、こずえの方を見ながら口をとがらせていた。ほ とぼりがさめるまでにどのくらいかかるだろう。隣のこずえがにやにやしながら上総を見上げ、
「まったく、あんたってばほんっと、ガキよねえ」
　意味ありげにつぶやく。誰もいなかったら手帳ではたき倒してやっているだろう。

「これで全員揃ったか。おい、立村、もうだいぶよくなったか？」
　菱本先生が斜め前の上総に穏やかなまなざしを向けた。
「もう大丈夫です。心配おかけして申しわけないです」
　ちっとも申しわけないと思っているような口調で上総は答えた。相手にも伝わるように、視線をそらしたままで答えた。気付けばいい。そのくらいしないと、この先生には分かってもらえないだろう。
「そうか、少しは機嫌よくなったか。せっかくだから他の連中の土産話を聞いておけよ。ほら清坂、今日の反省を簡単でいいから、言ってみろよ」
　美里に話を振った。上総との大喧嘩を知らない他の連中が拍手する。
「ほら、あんたのダーリンに教えてやんなよ！」
　はたしてどうでるか。上総は片手を握り締めた。貴史がにやにやしながら覗き込んだ。
「さて、美里はどう出るか、だな」
　機嫌は直っていない様子だった。美里はちらっと上総と貴史の方を見た後に、ゆっくりと菱本先生へむきなおった。
「今日の反省なんですけれども、まず、みんなに言いたいことあります。ちょっとだけいいですか？」

　雰囲気が「反省」色ではない。
「なんだ、いきなり硬いなあ。清坂どうした」
「いいんですけど」
　美里はもう一度、上総の方をぎゅっと見つめ直し、立ち上がった。

「今日の予定はかなりきつかったんじゃないかなって思います。先生、どうして最初からの予定で通さなかったんですか？　なんでいきなり、予定を変更して、山めぐりなんかしたんですか？　すっごく私、納得いきません」
　意味がわからない。上総は貴史をつついた。
「どういうことだ？　予定変更ってさ」
「あのなつまり」
　貴史が説明する前に、美里がどんどん話しつづけていた。
「私たちが立てた予定では、黄葉町の古い街並みを散歩した後で、それぞれがそれぞれのお店で食事をして、その後で公園に行くことになってましたよね。ちょっと予定、少なすぎるかなって思ったけど、無理するもんじゃないって言われたからそうしたんです」
　それを進言したのは上総自身だった。大きく頷いた。
「でもなんで、公園を回った後で「今度は予定変更して、遠回りして帰ろう」って言うことはないんじゃないですか。運転手さんも困ったと思います。それに、 普通の時間だったら平気な人でも、二時間も多くバスの中にいるなんてことになったら、困る人だっています。車に酔った人があんなにいたのはそういうことだ と思うんです」
　美里の言葉をつないでみるに、どうやら菱本先生のワンマンぶり発揮により、予定がかなり変更となり、バスの中では修羅場になってしまったようだった。女子の一部が大きく頷いた。
「黄葉町はいろんな見所あるって聞いていたし、私も友達同士で行くんだったらもっとたくさん回れたかもしれないって思います。でも、人によっては疲れてい る人もいるし、バスにあんまり乗っていたくないって人もいるといます。私、この前本で読んだんですけど、山登りする時は一番体力のない人に合わせろって書 いてますよね。うちのクラスで一番体力がないのは」
　ふたたび上総の方を見たが、それ以上何もいわずに続けた。
「そういう人に合わせて作ったのが、今回の計画だったと思うんです。みんなが楽しいって思えるようにしたかったからなんです。でも、余りにも無理がありすぎたって私は思うんですけれども。みんな、どう思いますか」
　菱本先生は腕組みをして考え込んでいた。答えに苦しんでいるのだろうか。上総はじっと美里の顔を見つめていた。何かテレパシーのようなものがあれば、送ってやりたいのに。その通りだ、そうだよそうだよ、と言ってやりたかった。他の連中はというと、ざわざわと
「だわな、あれはきつかったわな」
「でも女子だけだろ、騒いでたのってさ」
「俺、車に強いから平気平気」
の連呼。女子は、口に出さないものの何かを感じたかのようにうつむいていた。奈良岡彰子が、

女子の数人に頷いて笑顔を見せた。
「菱本先生、私としてはこれだけ言いたいんです」
　美里は首を軽くかしげて締めた。
「いきなりの予定変更はやめてください。もし明日、予定変更したいんだったら、今、この場で決めちゃってください。みんな、心の準備があるんです。女子の場合、特にいろいろ大変なんです」
　その通り、と上総が頷いているのに気付いたのか、美里はもう一度視線を向けた。ぎゅっと唇をかんだまま、頷き返してくれた。

２　タータンチェック

「おい、立村、お前のキーホルダーの柄、覚えてるか？」
　視線を交わすだけでの意思疎通をしている最中に、貴史が割り込んだ。
　気を剃らされていらだたしく上総は答えた。
「タータンチェックだってくらいだよ。覚えてないよ」
「お前、自分の相手が何くれたかぐらい覚えとけよ。ほら、美里の頭見ろ」
「頭？」
　お団子に丸めた髪型のおかげか、輪郭がすっきりして、和服を着る人に近い雰囲気が感じられた。橙色のチェックワンピースがなんだかそぐわない。なんとなく、色合いがずれているように思ったのは気のせいだろう。
「ほらほら、後ろの丸っこいところ、何か見覚えないのかよ」
　ポケットを探り出した。握り締めていた後どこにしまったか忘れていたけれど、ちゃんと出てきた。なくさないでよかった。
「これとどう関係あるんだよ」
　グリーンのタータンチェック模様。柄のつるつるしたところに目を走らせ、改めて美里の髪形を確認した。次の瞬間、ポケットにキーホルダーがちゃりんと落ちたのを感じた。
　なんで。
　なんで俺は気付かなかったんだろう。
　変なところで鈍感なんだよ、全く。
「だろ、すっかり機嫌直してるだろ。あいつ」
　拳骨で腕をとんとんと叩きながら、貴史がささやいた。
　髪のお団子を包んだアクセサリーは、同じグリーンのタータンチェック模様だった。そっと手の平に隠して確かめてみる。同じ、黄色い色合いが混じっている柄だった。
「そういうことか。あいつ、露骨にペアルックするのが嫌だったんだな。で、さりげなく、おそろいを狙ったってわけかあ。な、立村。嫌いな奴に、普通そういうこと、しねえよな。するわけねえよな」

口にはしない代わり、再確認していた。
美里の髪型は、三十分前に見た時とは異なっていた。
たぶん、大喧嘩した後に、髪型を直したのだろう。
あえておそろいの髪飾りをつけてきたっていうことは。
「なあに一人で真っ赤になってるんだよ。ほんっと、立村ってばポーカーフェイスしているくせに、純だよな」
よかった。本当に、よかった。
上総は立てていた膝を替え、小さくため息をついた。

３　三日目予定変更に関する質疑応答

菱本先生がやがて反省したのか、発言をした。
「わかった。悪かった。今日はお前たちにかなり無理させたってことだな。黄葉町というのは、奥の方に行けば行くほど、雰囲気が秋らしくなってきていいと聞 いていたから、お前たちにも一度見てほしかったんだ。でも、やはり無理はできないな。わかった。清坂。いきなりの予定変更はしないよ」
美里に近づいて、軽く頭を撫でた。ぞっとする風に美里は頭を振った。
「先生、辞めてください。手、洗ったんですか」
「そんな嫌な顔するなよ。愛情表現だぞ」
側で、
「美里だったら別の相手で愛情表現してもらえるもんね」
と声がかかる。坐ったままで足蹴りをしている様子だった。上総は知らん振りを決め込んだ。
「じゃあ、清坂の反省を元に、明日の予定を立てたいんだが、いいか」
返事はない。みなうつむいて暇そうに指遊びをしていた。美里の言う通り、本当に疲れていたのだろう。貴史をつついて指差してみると、外国人のように肩をすくめていた。そうとう、ハードなバス道中だったに違いない。
菱本先生の発言はさらに続いた。
「今日、たまたま食事をしたところで、Ａ組の狩野先生と顔を合わせたんだ。羽飛、お前たちも一緒だったから分かるだろ」
隣の貴史は「はい！」と元気に手を上げて立ち上がった。
「なんか、臨時の合宿してるって言ってたよな、先生。女子三人連れててさ、まるでデートじゃねえかってさ」
「おちゃらけるなよ。とにかくだ、狩野先生が言うには明日、美術館に寄った後に帰ると話していたんだ。偶然だなあ。僕たちが昼飯食べるところがすぐ側なんだ。立村、そうだったな？」
頭の中にインプットしたしおりをさらさらとめくり、上総も答えた。
「はい。十一時に羽原公園にて写真撮影と昼ご飯を食べる予定にしてあります」

「羽原公園から少し離れているんだが、その近くなんだよ。明星美術館は。狩屋先生もその三人と一緒に美術鑑賞をした後、青潟に戻るらしいんだ」
　話が読めず、上総は何度も貴史の腕をひっぱり説明を求めた。しかし全く相手にしてくれなかった。
「せっかくだったら、そんな少ない人数でちんまりやるよりも、大勢で盛り上がった方がいいだろうということで、思い切って場所を羽原公園から、直接美術館に行くというのはどうだろう？
　どうだ、みんな？」

　つまり、菱本先生は三日目の予定「羽原公園にて食事プラス写真撮影」を今のうちに変更し、「Ａ組女子三名プラス狩野先生」と一緒に明星美術館にて合流したいらしい。

　べつにいいんじゃないかとは思った。羽原公園にどうしても行きたかったわけではない。ただ帰り道、弁当屋さんがたくさんあって、食べるに困らない場所と いうことで決めただけだった。運転手さんには申しわけないと思うけれども、その辺は臨機応変にやってくれるんじゃないだろうか。
　上総はぼんやりと聞いていた。さらに続いた。

「だが、ここで問題なんだが」
　言葉を切って、ぽりぽりと頭をかいた。
「狩野先生アンド女子三名にまだ、その話をしていないんだなあ。実は」
　だって、昼に会ったって話したばっかりじゃないか！
　貴史の背中を思いっきりひっぱたいてこちらを振り向かせた。
「なんだよいったい。菱本さんの話聞いてりゃわかるだろ」
　無視だ。全く頭に来る。
「一応、お誘いはしてみたが、狩野先生は遠慮深いというかなんというか『無理なさらないで結構ですよ』とのことだったんだ。でもな、せっかく近くに来るんだしな。大勢で盛り上がる方が楽しいだろ。な、羽飛」
　貴史に相槌を求める菱本先生。上総の方は一切無視だ。
「うん、まあ、そうだよな。先生、じゃあいきなり抜き打ちで誘うのか？　女子三人も」
「そうだよ。たった三名での宿泊研修なんて淋しいだろ。だったら、２Ｄのあったかいメンバーと一緒に楽しいひと時を過ごしてもらうほうがいいだろ。もし羽飛だったらどう思う？」
　首をひねりつつも貴史は賛成の印に両手を上げた。
「やっぱし、淋しいのは可哀想だよなあ。俺、Ａ組のことよくわからんけど、でも、せっかくだったら先生の言う通りに美術館直撃、賛成だなあ」
「じゃ、拍手で決めよう。賛成のもの、拍手をどうぞ」

　菱本先生の案は確かに面白い。

　でも、どこかがひっかかった。咽の小骨が取れなかった。
　どうしてかわからない。上総は一人で首を振った。
　違う、何かが違うよ。
　拍手可決が終わるまえに何かを言いたかった。

「いいですか、菱本先生」
　向き直り、上総は正座しなおした。手を動かそうとしていた菱本先生は、片目だけきっとにらみつけ、すぐにもとの笑顔に戻して返事した。
「なんだ立村、また何かあるのか？」
「いいえ、質問をいくつかさせてもらっていいですか」
「ああ、わかることだったらなんでもいいぞ」
　息を大きく吸い込み、まずはひとつめの質問をかました。
「なぜ、Ａ組の女子三人だけ、別の日に宿泊研修を行うことになったんですか。それなりに事情があるんではないかと思います。確か僕が聞いているところですと、Ａ組の宿泊研修は先週の月曜から水曜だったはずです」
「そうだ、立村の言う通りだ。でも、どうしても出られなかったらしい。お前宿泊研修出られなかったら淋しいだろ？」
「狩野先生は、一緒にやろうっていうのを断ったんですか」
「ああ、でもな、立村。狩谷先生はおだやかな人だから、気を遣ってくれたんだ。いきなりＡ組の奴が入ってこられると迷惑なんじゃないかってな。でもそんなことないだろ。２Ｄの連中は、そんな心の狭い奴らばかりじゃないよな」
　賛成、と叫ぶ奴がいた。近くにいたら頭をはたいてやりたかった。
　暴力行為にはいたらず上総は質問を続けた。
「もし、Ａ組の人が一緒に入りたがっているならば僕は全く問題がないと思っています。でも、狩谷先生はそうしたくないとおっしゃられているということですから、それは無理にすることないんじゃないでしょうか」
　努めて穏やかに伝えたはずだった。
　青大附中２年Ｄ組評議委員としてのプライドを持って。
「そうだな、立村。お前はそう思うだろうな」
　つぶやき加減に聞こえた。まずい、菱本先生に火をつけてしまったらしい。　上総は身構えた。片膝を立て、じっと菱本先生の顔を見据えた。視線がぶつかり合った。相手は目をそらさなかった。意地で上総も見つめ返した。
「だが、よく考えてみろ。すぐ側に同じ学校の、同じ学年の奴らがたくさんいるのに、たった三人で食事をしなくちゃいけないＡ組の子達のことも考えてみろ。淋しいぞ」
「どうして淋しいと決め付けられますか」
　目が壊れそうなほど力が入っているのが分かる。膝に組んだ手も汗ばんでくる。女子の数人が
「また、立村くん言ってるよ」

とささやいているのが聞こえる。空気がまたマーブル状になり体を包んでいるようだった。熱がない分苦しくない。にらみ返せるのが救いだった。
「立村、お前はそういうことになっても淋しくないかもしれない。ほっといてほしいのかもしれない。それは人それぞれだろう。でもな、Ａ組の人たちは本当に 立村と同じ感覚を持っているだろうか？　みんながみんな、立村と同じようにひとりでいたいと思っているとは限らないんだよ」

　普段は挑発に乗らないよう心がけている。
　菱本先生相手でも同じことだった。
　上総は冷静沈着をモットーに、さらに質問した。
「それでしたらせめて、狩野先生のところに電話をするか何かして、もう一度確認を取った方がいいと思います。いきなり待ち伏せされると、びっくりしてしまい何がなんだかわからないと思います」
「そうだな、お前結構不意打ちされると、パニックになる性格だもんな」
　菱本先生の口元に再び、笑みがこぼれた。馬鹿にしているとしか見えなかった。こめかみのところがちりちりいたくなったけれどがまんした。
「だが、狩野先生は今夜、別の家にいるんだそうだ。みんな、知ってるか？　狩野先生の実家な、黄葉町から少し山に入ったところらしいんだぞ。いいなあ、そこで美味しい山菜料理を出してもてなしてやるんだそうだ。いいなあ」
「それならそこに電話すればいいんではないでしょうか」
　上総は食い下がった。自分でもわからない。とにかく、やめさせたい、その一念だけがかあっと頭の中に燃え広がっている。どうしてなのかすら見当がつかないのに。
「あのな、立村。お前の方こそ、どうしてそんなにみんなの盛り上がりに水を差したがるんだ？　よく見てみろ。Ｄ組の連中なんてみな、面白がってるぞ。お前がまただだをこね始めたってあきれてるぞ。本当に、お前、評議委員のくせしてガキだなあ。何が嫌なんだ？　言ってみろ」
　周りの空気がせせら笑い混じりにたゆたっているのはわかっていた。いつもそうだった。ロングホームルームの時に上総が壇上に上がり発言している時、菱本先生はいつもあきれ顔で「お前は本当にガキだなあ」というわけだ。かっとなって殴りたくなる。
「別にそういうわけではありません」
「じゃあ、どうしていつも、先生につっかかるんだ？」
　答えられなかった。答えはあるけれど、言うわけにはいかなかった。
　黙っていると、服従したように見えたのだろう。さっそく拍手での可決に入った。もう何も言えず、上総はうなだれた。唇を血が出るくらいぎゅっとかんだ。
「それでは、もう一度。賛成の連中はみんなで拍手しろ。ほら、立村にもわかるようにな」
　周りを見はしなかった。隣で貴史が派手に手を打ち鳴らしている。前の方では美里とこずえも笑いながら指先を動かしている。ほぼ全員の拍手だった。
「ほらみろ、わかったか立村。お前が思っているほどうちのクラスの連中は神経質じゃないん

だよ。安心しろ。気配りするのもいいが、いつも余計な心配ばかりして、やる気をそぐ方がもっとまずいことなんだ。少しは勉強になったのか？」
　立てた膝を数回軽く叩いた。上総は唇をかんだまま、じっと畳を見つめていた。目を数えたかった。答えるとまたとんでもないことになりそうだった。せっかく身体の調子が元に戻ってきつつあるのに。今度は感情の方が病気になってしまったようだった。
「どうしたんだよ、立村。黙ってればいいのになあ」
「うるさいな」
　吐き捨てた。貴史の顔を見るのも嫌だった。
　とにかく、あとでこのもやもやが何かを突き止めよう。
　何はともあれ夕食後、だ。

４　二日目夕食後の企画提案

　ごくっと咽につまったものを飲み込んだ後、上総はもう一度手を上げた。
「先生、もうひとつ、別のことで発言していいですか」
「おいおい、まだかよ」
　すっくと顔を上げた。表情を隠した。菱本先生は明らかにうんざりしたようすで上総を手で制した。
「簡単に言えよ」
「違うことです。夕食後の提案なんですが、クラスでボードゲームをやろうという案があるんですが、どうでしょうか。大広間でもいいですし」
　そこで言葉を切った。菱本先生の出を待った。確か大広間は食事後、すぐに出て行かないといけないはずだった。
「大広間はつかえんぞ」
「それだったら、提案なんですが、菱本先生の部屋っていうのはどうですか？　せっかくだったら、最後の夜だから盛り上がりたいっていう意見もありますし。申しわけないんですが、先生と一緒にというのはどうでしょうか」
　感情のこもらない冷たい口調だとわかっている。とにかくむかむかするし、押さえるのもかなりしんどかった。でも、南雲との約束を考えるとここで提案しておきたかった。
「ほほう、俺の部屋でか」
「一番広いし、それに大広間よりも先生の部屋の方が、落ち着くんじゃないですか。もちろんそれは、出入り自由という形をとればいいと思います」
　膝を抱えたまま、上総はすらすらとしゃべりつづけた。直前までぶっちぎれそうになっていたのにだ。
「ボードゲームってあるのか？　その前に」
「一応、ボードだけは持って来ました。駒はその辺にある色紙でそれぞれが作ればいいと思います」

　上総はすごろくを複雑にしたタイプのボードゲームの名前をあげた。プレーヤーが中学に入り、授業、運動会、部活、恋愛の経験をしながら成長していくとい う、いわば人生ゲームのようなものだった。上総が気に入らないのは、その中に「委員会活動」が一切入っていないことだった。もらいものだから一度もやった ことがない。
「なるほどなあ、夕食後か」
「あとで、先生のところにボードを持っていきます。あれだと大勢でもできますし、他の人が別のボードゲーム持ってきていれば、そちらと二分割にすればいいことですし」
　息を吸って、上総は周りを見渡した。
「もしあれなら、手を上げてもらいましょうか」
「いや、いい。立村、それ面白いな。みんなでやるのか。たまにはお前も評議委員らしいことを発言するな。少しは大人になったか？」
　まぶたを軽く閉じ、息を吸い込んだ。
　それなら決をとろう。
「それでは拍手で、夕食後のボードゲーム大会に賛成の人、お願いします」
　あっけにとられた格好の連中だったが、いきなり手を打つ奴がいた。ぽんぽんぽんと、リズミカルだった。南雲だった。顔を見ると、相変わらずにこにこと、青空一杯の表情をしていた。つられるように他の男子が一人、二人と手を叩き始めた。そして最後に女子に波及していった。
「よし、決まったな。わかった、じゃあしかたないなあ。ゲームに勝った奴には、なにかご褒美を考えるとするか。よし、わかった！」
　単純な人だ、と上総は冷たく見返した。
　やっぱり、「みんなで楽しく」が好きな先生なんだ。菱本さんは。

その十一　下準備をめぐるよしなごと

１　白菊のテレホンカード

　あまり人をにらまないように、箸の先をかじりすぎないように、あえて菱本先生および女子の方を見ないように。いろいろ心がけながら夕食を終わらせた。な んとなく女子同士の間に流れる空気が、べとついているような気がしたけれど、そんなのは女子評議委員にまかせとけばいい。いつも行動を一緒にする連中から は、散策にかんするいろいろな出来事の説明を受け、ふんふんと聞いていた。あえて菱本先生に噛み付こうとは思わなかった。
　次にすることが、決まっていたからだ。

　部屋に戻ってからかばんの奥から、「あこがれのハイスクールライフ・どきどきゲーム」のボードと説明書を取り出した。親戚からもらったもの。クラスの連 中にも声をかけて、すごろくとかボードゲームとかカルタとか百人一首とか、そういうものを持ってきてもらうよう頼んでいた。
　食事中に確認したら、すでに三名がその類を用意してくれていた。
　自分も入れて四つ、そういうゲームがあれば、三十人の２Ｄ連中はきっちりと分かれてもりあがれるだろう。その中に割り込むのがおそらく、菱本先生だろう。たぶん、みんなで盛り上がれるから機嫌がいいだろう。
「三十分後に菱本先生の部屋へ集合。ゲームも持参のこと」
　内線電話で連絡を、男子にのみ入れた。窓のカーテンは開けたままだった。青みが残る藍色。夏の空。星はまだ見えなかった。上総は貴史がくれた、星座盤コースターを掲げてみた。
　なにはともあれ、一番星を探せってとこか。
　となりでテレビアニメに見入っている貴史には、聞こえないようにつぶやいた。
「ちょっとジュース買ってくる」
　返事はなかった。そりゃそうだろう。貴史の見ているアニメは例の『砂のマレイ２』だった。たぶん美里とこずえも食い入るようにして観ていることだろう。

　ロビーに下りた。誰かがいたら黙ってジュース買って帰るつもりだった。
　幸いいなかった。
　不気味なくらい静かだった。
　フロントには手鈴が置いてあるだけ。当然、となりの公衆電話も、誰もつかってはいなかった。
　上総は財布を取り出した。ほとんど中身が小銭のみだった。カードを入れるところを触ると、度数が半分くらいしか残っていないテレホンカードを見つけた。白菊のイラストだった。この前父が葬式でもらってきたものだった。
　受話器を取る音が響く。周りを見渡し、滑り込ませた。

真っ正面には階段が見えた。手帳のアドレスを探して、ボタンを押した。

２　たよりになるのはおないどし

電話に出たのは本人だった。２Ａ男子評議委員。同じく二年連続持ち上がりである。ほっとして名乗った。
「あれ、立村、今日って宿泊研修だろ？　黄葉市だろ？　どうしたんだよ」
評議委員同士、お互いのクラスがどういうところに行くかをすべて把握済みだった。上総に限らず、評議委員としての義務だった。本当は菱本先生に関するぐ ちをこぼしたいところだった。でも手元のテレホンカードは度数が少ない。しかも、勢いよく減っていっている。やはり遠距離通話になってしまうんだろう。
「申しわけない。テレカが切れるまえに用件だけ聞いていいか？」
「いいけど、土産なんかよこせよ。食い物がいいな」
「なんなりとご要望にこたえるから、それより」
上総は息を整えて、ゆっくりと話した。
「Ａ組の宿泊研修は先週だっただろう？　その時何か変わったことなかったか？」
「変わったことったって、もともとうちは団結力ないからなあ。ふつうに宿とってふつうに盛り上がって、それで終りだよ」
「その時、もう一度合宿やろうって話になった奴とかいなかったのかな。例えばさ、狩野先生の家に泊りに行こうとかそういう話になったりとか」
「別にうちの担任、クールだから、そんなべたべたしたことしたがらないとは思う。けどな」
言葉を切って、Ａ組評議委員はためらうようにつぶやいた。
「噂には聞いてるだろ。うちのクラスから退学する奴がいるって」
「退学？」
そういえば貴史も前の日にそういうことをちらりと口にしていた。
ぴんとくるものがある。
「もっと詳しく聞きたいんだけど、急いでしゃべってくれると嬉しい。ほんと、テレカの度数がまずいんだ」
「せわしないやつやなあ」
わざとのんびりした関西弁をのぞかせて、あとはふつうどおりに話しはじめた。

「一年の時から、名簿には載っているんだけどほとんど顔を出したことがない女子っていうのがいるんだ。俺も顔見たこと、ほとんどないな。女子の何人かが遊びに行ったり、うちの担任が様子を観にいったりして、なんとか二年には進級したんだけど、もう全く、机だけの存在」
「なんか噂には聞いたことあるな」
「だろ？　でも、夏休みいっぱいで青大附中をやめて、公立の中学に戻るんだと。結局、雰囲気が、合わなかったってことらしいんだ」

「当然のこと聞くようだけど、その子は宿泊研修には来なかったんだな」
「当たり前だって。ただな、うちの担任も気を遣ったんだろうな。その女子のために、仲のいい女子ふたりと一緒に、どこか旅行しようということを持ちかけたらしいんだよ」
　話のピースがぴたっと当てはまっていく。
「女子三人と狩野先生とか」
「狩野先生の実家、黄葉市だろ。せっかくだったらってことで」
「でも担任の家に泊まるなんてうれしいもんか？」
「なぜかわからんけど、狩野さんにはなついてたみたいなんだ」
　上総はカード度数の減り方をちらちらチェックしながら、電話の向こうに菱本先生の「みんなで一緒に遊びましょう」プランを伝えた。

「せっかくＤ組の連中がこんなにいるんだから、狩野先生と一緒に遊びましょってか。おいおい、それはまずいぞ、立村」
　思ったとおり、Ａ組評議委員の声は曇った。
「だよな」
「当たり前だって。ただでさえあの女子、他人と口利かない奴だったんだぜ。仲のいい女子二人以外とは全くしゃべらないんだぜ。よく狩野先生の誘いに乗ったよな、って俺たちも不思議がってたんだ。たぶん、集団でわあっとやるのが嫌いなんだろうなあ」
「だろうな、話聞いている限りはそう思う」
　強く頷いた。
「もし狩野先生ご一行と合流することになったら、うちのクラスはうるさい連中がほとんどだから。特に女子はな」
「あ、清坂とはどこまでいったんだ？」
　そういう余計な話題で度数を減らさないでほしい。上総は無視して続けた。
「その人にとっては、地獄だろうな。Ａ組評議としてのご意見をいただきたい」
「別に俺はその女子がどうのこうのってわけじゃねえけどなあ」
　前置きした後、答えた。
「ただ、俺だったら絶対止めてほしいって思うよな」
「そんなことされないほうが、絶対嬉しいよな」
　強気で上総も確認した。
「絶対、絶対。もし俺とかが仲間と一緒にいるというんだったらすげえ盛り上るだろうとは思う。でも、あの登校拒否少女は絶対に嫌がると思うなあ」
　ぶうぶうと、カード度数が切れる音。
「悪い、ありがとう。ご期待に添えるようにやってみる」
「幸運を祈る。グットラック」
　同時にカードが出口から舌を出した。ぴいぴい泣いている。なだめるために引っこ抜いた。ざまあみろだ。

３　数学の先生が好きな理由

だいたい自分の思っていた通りだった。

以前から、Ａ組にひとり、登校拒否をしている女子がいるとは聞いていた。顔も名前も知らないが、入学してからすぐに学校に来なくなったという。担任の狩野先生が心配して何度も家庭訪問したらしいが、効果は全くなかったという。

よくも、二年に進級できたものだと思う。

青大附中の場合、出席日数をかなり細かくチェックされるので、みな休む時は日数を計算しておくものだった。上総もしょっちゅう熱を出して休むことが多いので、その辺は神経を使う。

その後二年に進級したはいいが、相変わらず学校には来ない有様。結局、貴史が話していたように「夏休み明けに退学」するらしいということになったそうだ。

Ａ組評議が話していたとおり、絶対に宿泊研修なんかには行きたくなかっただろう。また、狩野先生になついていたからということでよくくっついてこれたものだとも思う。その辺の事情は想像することしかできない。

ただ、気持ちはわからなくもなかった。

少なくとも、狩野先生の方がずっと、その女子のことを気遣ってやっているような気がしてならなかった。

ほとんど顔も知らないクラスメートとバスに閉じ込められ、神経を使い続けて息を詰まらせてしまう。もしくは話の合わない連中と一緒の空気を吸いつづけな くてはならない。登校拒否しているということで、好奇の目を向けられるかもしれない。いじめることはないだろうが、それでも言葉の端々に無意識の刺を見つ けるかもしれない。

上総からしたら、それはちょっと考えればわかることだと思った。しかし、菱本先生を中心とする連中には想像もつかないことらしい。みんなで楽しく盛り上がって、素敵な思い出をつくってやることが、その当人にとって幸せなことなのだと決め付けている。

狩野先生は二年数学の担当だった。年はたぶん菱本先生と変わらないくらいだろう。銀縁めがねで細面の、いかにも理系、難しい数字を使って勉強してきまし たといった風だった。大学の講師といった方が近いかもしれない。とにかく熱血漢の菱本先生に比べるとはるかに物静か、生徒ひとりひとりに「さん」をつけて 呼ぶ。それがいささか他人行儀に感じられたのだろうか。Ａ組は団結力の必要な行事にはめっきり弱かった。ひとりひとりが個人主義という考え方の持ち主だと、評議委員は言うけれども。よく「Ｄ組はいいよね。菱本先生のクラスって毎日笑いが絶えないって、楽しそうだもん」という声が出るのは、大抵Ａ組から だった。もちろん上総は反論するのが常だった。

「俺は狩野先生の方が何十倍もいいな。余計なこと言わないからさ」

すると大抵の連中は問い返す。

「あのな、狩野先生、お前の天敵、数学教師だぞ」

「うん、数字が嫌いでも人間は嫌いじゃないから」

確か二年に上がって最初の数学小テストの時だった。
数学の点数は基本的に見ないようにしているので覚えていないが、いつものように赤点のはるか下だったはずだ。さっそく、個人面談室に呼び出された。思 いっきり絞られるのだろうと覚悟して息をとめて入ったところ、狩野先生は日本茶を出してくれた。感情を不要に揺らさぬ風に、穏やかに。
「立村くん、本当は数学よりも英語をもっと勉強したいでしょう」
いきなり話が飛んだので口が利けなかった。
「この前、君の英作文を見せてもらいました。うちの大学でもこれだけ書ける人はいませんよ。僕もここまで綴れるかは自信がありません」
たいしたことじゃなかった。英米文学に関する簡単な論文を英語担任から渡され、その感想を好き勝手にかけといわれたのででっちあげた代物だった。
「立村くん。僕は数学の教師だけれども、君が語学や文学に長けていることはよくわかります。伝わってきます。だからその才能を伸ばしてほしいと思っていま す。ただ、そのためには最低限の数学知識をマスターしてほしい。理解しろなんていいません。難しい問題を解けとまではいいません。ただ、問題のパターンを 暗記してください。ひとつの問題の解答集、それを丸暗記してください。それだけで十分です。英単語や英文を暗記するのと同じ感じで、何も考えないでただ丸 暗記でかまいません」
使用していた問題集の解答集をコピーしておいてくれたのだろう。渡してくれた。
「では、来週から、小テストの時はこの問題の答えだけを暗記して、渡された答案に書き抜いてください。君には問題は出しません。とにかく、そういうパター ンなんだってことだけ、覚えれば大丈夫ですよ。他の人がなんと言おうとも、立村くん、君は優れた能力を生まれ持っているのだから、それを信じてください。 自信を持っていいんですよ」
呆然としたまま解答集を持って頭を下げたことを覚えている。

その後中間期末の試験をのぞき、上総に与えられたテスト用紙はみな、問題集の丸暗記部分を書き写すことのみだった。一部女子からは
「なんか立村くんだけずるしてるんじゃないの」
とささやかれたけれども、誰もが上総の数学能力のレベルを理解していたので何事もなくすんだ。
特筆すべきこととして、狩野先生のおかげでなんとか、一学期の評定は赤点から逃れることができた。上総の青大附中成績表において、数学の評定を黒い文字で綴られたのは初めてだ。

たぶん貴史や美里から見れば、他人行儀な存在感のない先生として映るのだろう。実際、Ａ組の生徒達とも距離をおいているような感じだという。プライベートな話題もほとんど出さず、進路のことや勉強のことについて、やはり物静かに語るだけだという。
「うちの担任、とにかく俺たちに対して無関心。この前うちのクラスでさ、中体連の陸上８０

０メートルで記録だした奴いるだろ。ふつうだったら大絶賛するだ ろ？　すごい奴だと誉めてやるだろう？　なのにさ、「よくがんばったね。おめでとう」の一言。奴はもう舞い上がってるんだからさ、もっと誉めろよ育てろ よって、俺言ってやろうかと思ったぜ」
　Ａ組評議委員が委員会終了後、話していたことがある。
「いいじゃないかよ、十分だ。それだけ誉めてもらってまだ物足りないのかよ」
　あきれて上総がつぶやくと、
「立村お前、菱本先生だったらどうだ？　一時間くらい実況中継やってくれるんじゃないか？　それこそ青大附中の大スターって扱いしてくれそうだよな。あいつはそれを期待してたんだよ。なのに、つらあっとした態度で二言だけだぜ。やる気なくするぜ」
「俺がもしそいつと同じ立場だったら、大会の次の日は学校休むな。Ｄ組担任のうっとおしい言葉なんて一切聞きたくないもんな」
　話は平行線を辿ったことを覚えている。

　しかし、単なる無関心な教師が、救いようのないくらい数学能力の劣った生徒に対して、あれだけ心配りしてくれるものだろうか。
　しかも、狩野先生は上総の能力が語学に秀でていることを、かなり事細かに知っていた。後日、他の連中に確認したところ、上総ほどではないにしても数学で 苦労している男子もう一人にも、似たような呼び出しをかけて、そいつに向いた問題集のコピーを渡してくれたという。同じように、相手の得意分野を誉めた後 に。Ａ組の担任がである。Ｄ組の生徒に対してである。
　もしかして狩野先生は。と上総は聞いてみたかった。
　俺と同じ感覚を持っているんじゃないですか？
　隣りで悩んでいる相手のことが、勝手に伝わってくる、そんなどうしようもない感覚を持っているんじゃないだろうか？
　俺が、南雲の事件の時に貧血起こしたような、あんな息苦しさを。

　もし、そうだとしたら、と仮定してみた。
　何が理由かはわからないが、学校に来たがらない女子に対して、狩野先生はいろいろな手を尽くしたらしい。Ａ組評議委員からもその話は聞いていた。しか し、結局退学ということになったわけだ。宿泊研修には当然参加したくなかっただろう。でも、せめてその女子にいい思い出を作ってあげたいと思ったのではな いだろうか。想像してしまうのは、たぶん上総だったらそうしようとしたと思うから。できるならば仲のいい女子ふたりくらい連れて、心おきなく最後の思い出を作ってやりたい。そう思うのは、上総にとって自然だった。
　なのに、菱本先生を始めとする二年Ｄ組軍団が、淡々としたひと時をぶち壊しにくるとしたら。上総だったら絶対に断るか逃げるかするだろう。その女子が繊細な性格だったらなおさらのこと。
　ここで気付いた。

『無理なさらないで結構ですよ』って、言ってたはずだよな？
　それってつまり。来るなってことだよな？
　俺の感じ方ってやっぱり、変か？
　狩野先生、断ってたじゃないかよ！
　遠慮深いからとか言ってたけど、あれは遠慮じゃない。
　はっきりしたい拒絶だって。
　あの野郎、そこまで。

　上総はテレホンカードを片手で折り曲げた。白い菊の柄がまっぷたつに分かれていた。葬式でもらったというカード。この菊を、菱本先生に供えてやりたかった。ごみ箱に投げ込み、走るように部屋へ向かった。

その十二　夜の帳のよしなごと

１　ゲームにいそしむ若人たち

　相変わらずテレビにかじりついている貴史を連れて部屋を出た。三つ折りにたたんだボードゲームを抱え、隣りの菱本先生部屋に入ると、すでにクラスの連中 はみなたむろっていた。菱本先生だけがどこか出かけたようだった。トランプを持ってきている奴もいれば、女子で占い用のカードを広げているのもいた。ひと り部屋だから狭いはずなのに、みなベットやらじゅうたんにそのままま座ったりしていたので、二十五名無事、納まっていた。もっとも女子の幾人かは、具合悪 くて寝ているらしい。そりゃそうだろう。美里じゃないが、相当大変だったらしいから。
「ほっといてあげなさいよ、ね、美里」
　上総の方を見ながら声をかけるのはこずえだった。
「そこまで俺が常識なしと思ったか」
「小学生の常識はあるかもしれないけどね、ほんっとあんたっては弟だもん」
「悪かったな」
　流して上総は人数を数えた。正確ではないが、二十五人くらい。ボードゲーム別に十人、十人、五人と割り振ってみた。男女混合で、わりと仲のいい連中を中 心に独断で決めた。一応、貴史と美里とこずえ、この三人は同じグループにした。自分は南雲たちと同じところに入ったが、それは訳あってのもの。貴史がぶう ぶう文句を言っているようだったがいつものように、無視した。駒を、手元の要らない紙でこしらえたり、カウント表を用意したりばらばらしながら結局、菱本 先生が登場したのは二十分後だった。
「先生、遅すぎ！」
　こずえがすっとんきょうな声で叫びむかえた。
「なあに言ってるんだ、古川。これみたら、許してくれるだろ？」
　見ると、両手にはペットボトルのジュースに大きなケーキ箱。さらに白い袋に入ったお菓子包み。人数分は余裕であるだろう。
「あ、食べたい早く早く！」
「お前らほんと、色気よりも食い気だなあ」
　甘いものが大好きな女子一同は大騒ぎしているけれども、男子はひたすらゲームに熱中していた。菱本先生を待つのも面倒で、上総の一存、さっさと開始してしまったのだった。
「おい、立村、もうやってしまったのか」
「はい、先生が遅いものですから」
　つらっと答えてやる。上総は小さなさいころを振りながら、駒を進めた。南雲をちらりと見やった。
　浮かない表情だ。
　わざと、奈良岡彰子を貴史たちと同じグループにまわしたからだろうか。
　ちゃんと考えはあるっていうのに。

　他の奴の番の間、上総はささやいた。
「なぐちゃん、このゲームが終わったら、俺は抜ける。それが合図だ」
「合図ってなんだよ」
「昼のこと、もう忘れたのかよ」
　ちっと舌打ちをしてみせる。
「具合わるい振りして、お前も抜けろよ。どうにか相手には連絡つけて、さっさと抜け出しちゃえよ」
「お前本気かよ」
　南雲の顔はだんだん、緊張で引き締まってきた。上総が本気で言っていると、この時まで思っていなかったのだろうか。ちょっとしゃくだった。背を向けてペットボトルからジュースを組んで飲んだ。窓から風が入ってきているはずなのに、やたらと暑苦しかった。
　そのお相手である、奈良岡彰子の方を眺めやる。
　意外や意外、結構盛り上がっているようすだ。男子たちはルーレットを回す前になにやらあやしげなポーズを取っている。貴史が座禅の時するような感じであ ぐらをかき、手を合わせている。奈良岡はにこやかに拍手してやっていた。何か意味があるのだろうか。わからなかった。ゲーム盤の駒がどこまで進んでいるか 見ると、黄色い折鶴が一羽、ゴール手前に留まっていた。
「ほら、そろそろ誰か上がるみたいだよ」
「ああ、そうだなあ」
　なぐちゃんご機嫌斜め。
　なんでかは言うまでもあるまい。
　横目で口を尖らせている南雲を無視して、上総は自分の駒に目を向けた。
　上がりまでにはまだ時間がかかりそうだった。
　もうひとつのグループで「おっしゃああ！」と叫んでいるのは菱本先生だった。きちんとプレスされたベットの上に、トランプもどきのものを広げて何かやっている。ぶたのしっぽだろうか。

　なんとか三番目に上がった。ゲームの進行状況をざっと見ると、貴史たちのグループはゲームが終わったところでだべりに熱中しているようだった。もう一度 やるのも、面子変えてからでないと、ってことだろうか。美里と貴史のふたりが相変わらず騒いでいるところに、奈良岡彰子と古川こずえが割り込んで、けらけ ら笑っている。会話の内容は聞こえなかった。
「ではもういちど組替えするからじゃんけんするか」」
「もういいよ。あとは何となくで」
　美里の声だった。
「先生、今度はこっち来いよ」
　貴史が誘っている。
「わかった、しっかし俺が中学生になるのかあ。羽飛たちと同学年かあ。若いよなあ」
　ちらっと上総の方を見やるが、何も言わなかった。

上総も無視した。
南雲が何をしているか様子をうかがうと、なにやら雰囲気が甘くない。
奈良岡に向かって何か、真面目な顔でまくし立てている。
いつもとは反対ににこやかな奈良岡の表情が気にかかった。アンバランスだった。どうしたのだろう。気にはなったけれど、言うことは言ったし、上総はそっと部屋を抜け出した。ちらっと南雲がドアの方を見たけれど、それも無視した。

２　機密情報用手帳

空気がにごっている。やたらと汗臭くて、早く部屋から抜け出したかった。何度経験してもなれない集団の雰囲気。上総は素早く部屋に戻ると、バックから手帳を取り出した。
秘密の計画および、二年Ｄ組に関する細かいことがすべて綴られている。
父からもらったものだった。結構分厚い。

『宿泊研修　三日目予定変更』

一番後ろの何も書いていないメモ欄に、ボールペンでしっかり書いた。

朝九時にバス出発。その後最初の予定では「羽原公園　十一時到着」の予定だった。しかし、そこから離れた「明星美術館」なるところがあって三十分くらい長くバスに乗ることになる。
予定を決めるのは菱本先生だ。いくら評議とはいえ、所詮自分は中学生なんだということを思い知らされた。いくら評議委員ふたりにまかせられたとはいえ、 最後のチェックはみな菱本先生の手によって行われた。どうして、マイクロバスの予約までやらせてもらえなかったのだろう。ホテルの予約電話だって掛けた かった。全部細かいことを経験したかった。予定を立て、ホテル名を挙げ、バスの席順を決め、しおりをつくり。自分では精一杯やったけれども、結局細かいことは菱本先生が片付けた。
たぶん、明日の朝、予定変更なども菱本先生が仕切るのだろう。
わかっている。担任は二十才以上の大人。自分は結局中学二年生。

どうすればいいんだろう。
このままだと黙っていてもそうなっちゃうよな。
俺の方には十分過ぎるくらい、予定変更を阻止する理由があるのにな。
結局ガキのままかよ。

「予定変更」に何度も下線を引っ張った。ひとりごと、つぶやいた。
「本条先輩、本条先輩、本条先輩……」

呪文のようだった。クラスの出来事で困り果てた時、上総は無意識のうちに「本条先輩だったらどうするか」と考えるのがくせだった。美里にも「立村くんっ て、いつも本条先輩にべったりだよね」と言われる。本条先輩の頭脳が、自分の中に入ってくるような気がした。呪文を唱えれば、担任よりもいい案が見つかり そうだった。

上総はもういちど、息を吸いなおした。つぶやいた。

「本条先輩だったら、どうするか、だよな」

ベットに腰掛け、カーテン開けっ放しの窓を眺めた。

さわさわと響く木々のざわめき、その間を縫って、針をつきさしたような星がひとつ、見えた。枕もとのコースターをもって、日にちを合わせ、窓辺で掲げた。生の目で見据えた。取り落とし、腰が抜けそうだった。

「あんなの、星じゃねえよ……」

星座盤なんて役立たなかった。上総の目の前に繰り広げられていたのは、青潟で見慣れた分かりやすい星じゃなかった。黒い紙に針を何千本と突き刺したような、白い光の束だった。突き刺されそうだった。あいている片手を握り締めた。勝手に声が出るのはなぜだろう。

部屋の中でひとりいるのが、上総は突然怖くなった。

樽の中に詰め込まれ、銀の剣に打ち抜かれた海賊の気持ちに近いかもしれない。

自分の中にあるなにかを、星たちが処刑しようとしている。

幾千もの視線にも見えた。

幾千もの刀にも見えた。

「あんなの、星じゃねえよ……」

上総は窓を締めた。がたがた震えてくるのがわかる。とにかくこの部屋から逃げ出したかった。手帳を抱え、廊下に出た。隣りの部屋では笑い声が漏れる。あの部屋以外のどこか、星の見えない場所に行きたかった。

階段を下り、ロビーに向かった。

３　信頼できる情報筋情報

もっと誰かうろついていると思ったのだが、予想に反して気配全くしなかった。ポケットには財布を入れたままにしていた。じゃら銭ばかりなので、重たい。 本当はテレホンカードがほしかったけれど、さっき使ってしまった。上総は時計を見て、遅すぎないことを確認した。本条先輩の家は四人兄弟ということで、両 親がいない。なんでも両親が諸般の事情で引っ越しているのだそうだ。気を遣わないですんだ。

小銭入れを開いてみたところ、幸い十円玉はたくさん詰まっていた。ほっとした。上総は素早く公衆電話を占領し、十枚一気に硬貨を流し込んだ。

すぐに電話口にでた本条先輩へ、硬貨の落ちる音を気にしつつまくし立てた。普段の「沈着

冷静」なんて、金銭的問題には負けてしまう。とにかく、時間がな い。言葉を挟む間もなく、たぶん受話器の向こうでは頷いているのかあきれているのかなにかしているのだろう。上総にはそんなこと考えている余裕なんてな かった。
　だから遠距離で宿泊研修やるなんて、嫌だったんだ。
　よりによって小遣いのない時に限ってさ。
「お前、俺にも一言くらいしゃべらせろよ」
「すみません」
　一通り話し終えて、上総は大きく息をついた。ちょっとした沈黙すら、もったいなくていらいらする。片手で小銭入れをいじりながら、十円玉、百円玉を探し た。くやしいくらい薄っぺらい、一円玉五円玉ばかりが多いのはなぜだろう。ゆったり間を置く本条先輩の言葉がいらだたしかった。
「Ａ組のミニ宿泊研修に紛れ込もうとする菱本先生のことはよくわかった。お前がそれにぶっちぎれてぶんなぐりたい気持ちだってこともよくわかる。でもな、肝心なこと言ってないだろ」
「なんですか、肝心なことって」
「つまり、お前が何をしたいかってことだよ。それがわからねえと、立村、俺は何も言えないぞ。確かにな、菱本先生の「寝込みを襲う」やり方は無謀かなあという気がするが、でもまあ、そんな立村ひとりが目くじら立てなくてもいいだろ？」
　この人も一緒か。ちゃりちゃり落ちていく十円玉の音に腹が立った。
「じゃあいいです。もう頼みません」
「なあにお前すねてるんだ。おい、切るなよ」
「だったら、本条先輩言ってください。もし俺の立場だったら本条先輩はどうしますか？　このまま黙って見過ごしますか？　うちの脳天気な担任の言う通り、黙って美術館に向かって、いやがる狩野先生ご一行に襲い掛かるのがいいと思うんですか？」
「あのな、お前が嫌なだけなのかもしれないぞ。相手はそれほど嫌がっていないのかも」
　言いかけている本条を遮った。
　静かなフロントに声が響いて、自分でもびっくりした。
「嫌がらないわけない！　なんでわかってくれないんですか！」
　そっと周りを見渡して、誰もクラスの連中がいないことを確かめた。
「何怒鳴ってるんだよ」
「もういいです。切ります」
「ほらほら、何一人で切れてるんだよ。わかったわかった、立村、俺だったらどうするかってことを言えば、お前泣かないですむんだな」
　思わず受話器を切ろうとした瞬間に、本条先輩は優しい声を出した。どきりとしてすぐに耳に当てた。
「誰が泣くかって！」
「ほらほら。言うから聞いてろ。もし俺だったらな、第一段階として菱本先生に話を付けに行く。ああいう一直線のタイプは、純情な顔してひたむきに説得すればうまくいくパターン、多い

んだ。俗に言う「泣き落とし」って奴か」
　ぞっとする。上総は瞬時に却下した。
「あいつの前で泣きまねするなんて、死んだっていやです」
「演技しろよ。ポーズくらいしろよ。ま、それが嫌なら第二段階。誰か仲間を集めて、途中で具合悪くなった振りをするとか、トイレに行きたいといって騒いだり、忘れ物をした振りをして、バスを止めたり遅らせたりする。お前車酔いは慣れてるだろ」
　仲間、それは無理だった。頼むとすれば貴史か南雲だが、どちらも協力してくれそうにない。貴史は先ほどのクラスミーティングをみても分かるとおり、菱本 先生の計画変更に大賛成だった。南雲も話せばわかってくれるかもしれないが、所詮夏の青空を気持ちいいと感じる、ずれがある。
　第一、何を頼んでやってもらえばいいんだろう。ひと演技して、バスを遅らせて、時間稼ぎして、美術館に到着できないようにするってことだろうか。
「無理です。俺ひとりでやらないと、意味がないです」
　本条先輩に腹を立てるのは理不尽だと分かっていても、止まらなかった。
「ったく、お前、何ひとりで反抗期やってるんだよ」
　また十円が、ちゃりんと落ちた。
「ひとりで反乱やらかして、うまくいくと思っているのかよ」
「思いません。でも、ひとりでやらなくてはならないってこともわかっています。同じ考えの奴なんて、今誰もいないんだから」
　があっと、雑音が響いた。歯を食いしばって本条先輩の言葉を待った。一言でもいい。何でもいいから、ひっかかりがほしかった。本条先輩はいつも、さりげない言葉で上総にヒントをくれることが多かった。
「ひとりですねるなよ。あのな、お前、本当に誰も味方がいないのか？」
「そういうわけではないけど、でもいません。今回に限っては」
「じゃあ作れ。去年俺がそういうことをするならば、まずはバスの運転手のにいちゃんを狙う。俺の時、運転手のに一ちゃん、いい奴だったんだ。三日間、かなり俺の無理な注文を、うちの担任に気付かれないようにやってくれたんだ」
「どういうことですか？」
　初耳だった。まだ、その運転手さんが本条先輩の時と同じ人とは言わずに置いた。
「ま、もう時効だろう。例によって女子がらみだ」
「どこかの女子高生に声かけて騒ぎになったんですか」
「いや、ちょっと違う」
　深いため息をつき、本条先輩は小さくささやいた。
「バッティングしちまったんだよ。俺のあれが」
「あの、つまり、本条先輩」
「そう、両方が顔を合わせちまった」

　本条先輩の話をかいつまんで聞くに、つまりは「本妻と愛人」が顔を合わせてしまい、かなり緊張した空気が流れたという。その辺はさすがにあいまいにぼか す本条先輩だが、結局運転手さんに頼み込んで早く出発してもらったという。本当だとしたらこれはすごいことだ。ふつうバス会社の運転手さんは、そんな勝手 な行動ができると思えない。ちゃんとスケジュールが決まっていて、その中で行動すると聞いている。本条先輩はそれこそどうやって運転手さんを説得したのだ ろうか。
「それこそ、泣き落としですか」
「彼の、ささやかながら感じているであろう、青春時代の思いに訴えかけるように、名優本条里希一世一代の名演技を見せて、結局手伝ってもらったってわけだ。ま、お前も俺の跡を継ぐ気あるならば、そのくらいの演技はできるだろ？」
　残念ながら本条先輩の名演技を再現してもらうことはできなかったけれど。
「さすが、『赤穂浪士』の主役を勤められるだけの名演技」
「松の廊下の刃傷沙汰をあれだけリアルに演じられる立村にはかなわねえよ」
　お互い、恥ずかしいことの多かった「ビデオ演劇・赤穂浪士」のことをちょこっと持ち出してみた。
　演技か。
　一世一代の名演技か。
　あの本条先輩がそこまで追い込まれていたのか。
　今抱えている問題に比べたらずっと本条先輩の話、軽いけれどでも。
　それでもか。
　見えてきたものがある。上総は口の中で「演技、演技」とつぶやいた。
「そうですか、演技ですか」
「ま、その時はたまたま俺がうまく演じきれたから運転手のにーちゃんも大目に見てくれたのだろうけど、お前がそれをやってうまく行くとは思えない。第一、どうなんだ？　運転手は若いのか？」
　しばらく沈黙した。答えるべきか否か。
「言ってましたよ。本条先輩って、礼儀正しいすごい奴だったって」
「はあ？」
「やたらと煙草を吸うこと以外は、すごくいい人です」
「おい、もしかして」
「そうです、本条先輩の過去をよく知っている運転手さんのようです」

　ほおっと、長いため息。と同時にぽんと手を打つらしき音。
「そっか、あのにーちゃんか。お前よろしく言っとけよ」
「もっと詳しく聞けばよかった。先輩の知られたくない過去をもっと握れたのに」
　指先で小銭入れの十円玉をかき回しながら、上総は答えた。女関係の華やかな本条先輩だから全く何も無かったとは思えないにせよ、そんな楽しい事件があっ たとは。まずいネタを知ってお

くと、あとあと助かるものだ。ジュースを一本おごってもらえたり。本当はもっと詳しい状況を聞きたかった。悲しいのは財布の 中身だけだった。
「先輩、あとで教えてください。今後の参考にしますから」
「おいどうした。何あせってる？」
「ないんですよ。十円が」
　本当にまずいことになってきた。指先に触れるのは、ちりちりした一円玉ばかりになってきた。
「先輩、ちょっと待ってください。もう一度電話します」
「早くしろよ」
　いったん受話器を置いた。十円一枚だけがかちゃりと落ちた。かろうじて残っている。しかし、これだけでどうやって話せっていうんだろう。金の貸し借りは 友情を失うからやめとけと、父には言われているけれどもしかたない。貴史か南雲を頼って五百円分のテレホンカードを分けてもらおう。

４　もうひとつの夜

　ちくりと首筋に刺激が走った。蚊に刺されたらしい。痒いのをがまんしながらひょいと階段の方を見上げると、なにやら人の気配がする。じっと見据えてみ る。音にはならないけれど、なんとなく熱がふうっと流れてくるような感じ。何度か目をやってはそらし、そらしては見たり、をくりかえした。
　やがて、カーキ色の裾らしきものがちらりとのぞき、上総の真っ正面に立ち止まった。
「奈良岡さん？」
　間、約三メートルもない。奈良岡彰子が無表情で上総の様子を見つめていた。
　隠れたいけれど、気付かれたからどうしようもない、そんな表情で。
　もう一度、上総は声をかけた。
「どうかしたんか」
　はにかむように軽く首を振る奈良岡の様子が気になってしかたなかった。
「もしかして、電話使うのか？」
　しかたない、という風にもう一度奈良岡は首を振った。
「なんでもないよ。立村くんも早く、部屋に戻りなよ。羽飛くんたちが待ってるよ。探してたよ」
「あとで戻るけど、電話使わないなら、俺まだかけるところあるからさ。どこか行くのか？」
　そこまで言いかけたところではっと気付いたものがある。

　上総に訴えかけるようなまなざしは、電話のことじゃないかもしれない。
　汗ばんだような奈良岡の頬はてかてかと光っていた。ふと見ると、唇の色がライトの下、ぬめりを帯びていた。女子がよく使う、「光るリップクリーム」というのがあるらしい。それだろ

うか。
　ああ、もしかしたら。
　鈍感な自分が馬鹿っぽく見えてしかたなかった。
　南雲をけしかけたのは自分だってことを、今の今まで忘れていた。
　ひとつ深呼吸をした後、上総はじっと奈良岡の目を見据えた。
「あのさ、奈良岡さん。今、テレカ持ってる？」
「持ってるけど、それが？」
「口止め料に一枚ほしいんだけどさ」
　笑わないように頬骨に力をこめながらささやいた。
「もちろん、学校始まったらちゃんと返すから。頼む」

　しばらくきょとんとしていた奈良岡だったが、にらめっこしているうちにおかしくなったのだろう。いきなり笑い出した。
「立村くんって、やっぱり本当は、変だよ。みんなの言うとおりだね。最高、おかしすぎる!」
「みんなって誰だよ」
「『口止め料』なんて言い出すなんて、もう最高！　そのキャラクター、もっと学校で出しなよ。もったいないよ。こずえちゃんと漫才やってるだけじゃ」
　このさばさばしていて、誰にでも笑顔でいいところを見つけようとしてくれる、そういうところに南雲は惚れたのかもしれない。奈良岡は笑いが止まらないと いった風に、ポケットからファンシー系の財布を取り出し、テレホンカードを抜いた。白い猫がボールにじゃれている写真入りだった。
「じゃあ、これは、おひねり。返さなくていいよ。全部使っていいからね」
　両手を合わせて一礼した後、受け取った。
「おひねりか、まあいっか」
　敬礼をおどけてした後、手を振りながら奈良岡は玄関を出て行った。一瞬、ドアを開ける時に立ち止まったが、すぐに闇へ姿を消した。

５　作戦会議

　たぶん外で南雲と待ち合わせをしているのだろう。南雲が奈良岡に上総のことをどう説明しているのかは知らないが、いわゆる二年Ｄ組の昼行灯扱いというわけではないだろう。上総にふつうの会話を笑顔で振ってくれる、数少ない女子のひとりではあった。
「ありがたやありがたや」
　もう一度両手を合わせた後、上総はテレカを滑り込ませた。

「おお待ってたぞ、何やってたんだ？」

「もう大丈夫です。それよか」
　いくら手付かずのテレカがあるとはいえ、度数が減っていく頻度は一緒だ。赤いデジタル文字を見つめるのは忘れなかった。
「本条先輩を助けてくれたその運転手さんには、どういう演技をしたんですか？」
「演技ったって、とにかく困った困ったって頭を抱えていただけだ。うちの担任は相手にならないからな。それにに一ちゃんとは三日間一緒だったからさ、結構 話もしてたんだ。休憩時間も一緒に弁当食ったりしてたからな。その時に、『何かあったんですか？』と聞かれて、一緒にいた奴がべらべらとしゃべりまくっ て、ああ、それじゃあ、ってことになっただけだ」
「先輩それって演技じゃないでしょう。本気で悩んでいたんではないですか」
「大人を泣かせるには、思いっきり大げさに悩む方が効果的なんだ！」
　言い訳なのか、それとも本当なのかはわからなかった。上総は話を促した。
「それで運転手さんは、鉢合わせ寸前にして、大急ぎでバスを発車させてくれたってわけですか」
「話わかるぜ、あのに一ちゃんは」
　それ以上言わなかったところみると、先輩としての威厳が傷つきそうな内容だったに違いない。上総は心に決めた。絶対、あとで聞き出してやる。ジュース一本分はおごらせてやると。
「だがな、立村。あくまでもそれは俺がやった時の場合だ。俺と違ってお前、押しが弱いだろ。人を説得するなんてうまいことできないだろ？」
「やれって言われたらやりますよ。冗談じゃない」
「とかなんとか言って、実は腰が引けてるくせにな。とにかく、お前が俺と同じことやってうまく行くとは思えないが。もし俺だとしたら、美術館の手前でいっ たん理由をつけて下ろしてもらう。逃げるかもしくは道に迷った振りをして、さっさと美術館に入る。２Ａの連中四人か？ そいつらを探しまくる。探しまく る。相手を見つけたらすぐにご注進ご注進して、さっさと帰るように促す。相手らが納得して姿を消したら、あとは言い訳つくってバスに戻るか、もしくは電話 を掛けて謝るかどちらかする。ま、そうなったら担任ににらまれることは覚悟だな」
「慣れてます。いまさら何も」
　つらっとしたまま上総は答えた。
「問題は、どうやってバスから降りるかだ。お前だったら、車に酔って今にもへどをあげそうだとかいいながら、頼み込むか、あとはトイレががまんできないと かいって担任に泣きつく。もしくは忘れ物をしたとかいって、一度戻ってもらうか。でもこれはリスキーだよなあ。立村、そこまで恥をさらす勇気あるのか？　ないならやめとけ。ただでさえ恥の多い人生歩んできてるんだ、これ以上は嫌だろ」
「嫌に決まってます。でも」
　口には出さない。ひとつ思い浮かんだものがあることを。
　本条先輩はさらに話し続けた。
「お前が降りた後に少しだけ、別の場所で待っててもらえないかと頼んでおいて、向こうがＯＫしてくれればなおいいな。でもなあ、その美術館の位置関係がよくわからねえなあ。俺なら、素

直に菱本先生に頭下げて、やめてもらうよう頼むのが手っ取り早いような気がするぞ」
「できればとっくにやってますよ。本条先輩。できないからこうやって、電話掛けてるんです」
「で、お前は何をやりたいんだ？　まさか、俺と同じことを考えていたなんていわないだろうな」

　しばらく口をつぐんだ。度数が減っていくのが目立つけれどもしかたない。
「本条先輩。決めました。ありがとうございます。先輩の案、そのまんまいただきます」
「いただくって、何をだよ！」
「これから、美術館の位置関係を調べます。フロントから地図もらってきて見てみます。それから、運転手さんに明日、話してみます」
「ちょっと待て。お前、自分で何言っているのか理解してないだろ」
「してます。これしかないってわかりましたから」
　本条先輩の声は低く、どすを聞かせるような感じに静まった。
「立村、下手したら停学くらうぞ」
　一呼吸おいて、ゆっくりと上総は答えた。
「どうせ退学にまではならないでしょう。先輩がいまこうしているんだったら」
　黙りこくった本条先輩はさらにスピードを緩めて、つぶやいた。
「こういう甘い考えが、お前をいつもどつぼにはめていくってこと、理解してないだろ。だからお前はガキだって言うんだよ。全く」

　受話器を置いた。カードはまだ半分くらい度数が残っていた。小さな穴があいていた。猫の手のところだった。あとで奈良岡に返さなくてはならない。上総は 自分の部屋に戻ってからすぐに、窓の外を眺めた。昼間に南雲と一緒に覗き込んだ池が見えるはずだった。空からは針山のような痛すぎる星が降るようだった。 もう南雲は来たのだろうか。上総が電話を掛けている間は出入りした気配がなかったけれどあいつのことだ。わからない。闇の中で、ふたりは何を語りあってい るのだろう。青空の下飛んでいった白いはぐれ鳥、その話もしているのだろうか。わからなかった。上総は人影のないのを確認した後、さっとカーテンを閉め た。遮られると、ひとりで怖さのあまり震えそうになることもなかった。

　あの星空を、ふつうの人はきれいだって言うんだ。
　あの星空を怖くないと言えるならば。
　俺はこんなことしないですむのにな。

　コースターを裏返しにした後、上総はベットの上でもう一度手帳を広げた。
　思いつくまま、ただひたすら思いついたことを綴っていった。
　頭の中もてんてんと細かい星が撒き散らされているようだった。言葉がどんどん飛び出してくる。どうすればいいかが形作られてくる。

隣りの部屋ではまだ盛り上がる声。まだ貴史は戻ってこなかった。橙色の灯の下、書きつづけているうちに体がだるくなり、瞬きしないと辛くなってくる。横になり、読み返しているうちに輪郭がぼやけてきた。

かすかに誰かの声が、会話するかのように聞こえた。

誰かが「立村くん」「立村、起きてるか」と声をかけてきたのは記憶している。答えようとしたけれど、言葉が出ないうちに声そのものもぼやけていたのはなぜだろう。

その十三　三日目出発までのよしなごと

１　三日目　朝の目覚め

……まずは運転手さんと二人っきりで話をするチャンスを作ろう。ああ、でもその前に俺の席を替えないといけないや。それの方があとあと動きやすいから。 そうなるとあの野郎と隣り合わせになるってことか。むかつくけれど、しょうがない。きっかけはどういう風にしようか。俺と菱本さんとの戦いが激化している ことを、うちのクラスの連中はみんな知っているんだろうなあ。ま、それでもいいか。今日一日は黙って頭を下げた振りをしとけばいいか。本条先輩も言ってた もんな。なんてったって、「泣き落とし」が効果的なタイプだもんな。ああ忘れてた。狩野先生たち、その時間にちゃんと、美術館にいるつもりなんだろうか。 もし俺が抜け出していって見つからないうちに、菱本さまご一行と遭遇したなんてことになったら間抜けすぎる。どうにかして、俺が先に見つけ出さなくちゃい けないんだ。さてどうするか……。

三日間、好天に恵まれたということになるのだろう。目覚めてカーテンをすかした光はまばゆかった。隣りで寝ている貴史はあお向けでいびきを描いていた。 上総は時計の文字がまだ五時半ということを確かめた。顔がべたべたするのは昨夜顔を洗わないで寝たせいだろう。気持ち悪くて、なんとなく焦げ臭いにおいが した。着換えも忘れていた。めんどうだけどシャワーをあびてすっきりしたかった。
枕元には手帳が閉じたまま置いてあった。読みながら眠ってしまったらしい。貴史が部屋に戻ってきたらしい気配は感じたけれど、答えられぬままだった。ど のくらい盛り上がったのだろう。考えてみると貴史とは今回、一度もオールナイトで語り合っていない。からかわれないですんだのが楽だった半面、ちょっとだ け申しわけない気もした。

シャワーを浴びて制服に着換えた。猛烈に腹がすいていた。南雲とわけたクッキーをかじりながら、ネクタイを締めなおした。死にそうな状態でふらふらして いた一日、二日目と違い今日は全身に気合がみなぎっているような気がした。なんでも今日なら出来そうだった。数学の宿題にも取り掛かれそうだった。古川こ ずえとの「朝の漫才」もするどいつっこみができそうだった。
「あれ、立村、もう起きてるのかよ」
「ああ、なんか暑くてさ」
寝返りを打ちながら貴史は上総の方を見た。
「お前どっかに行っちまうから、俺とかが探してたんだぞ。何してたんだよ」
「悪かった。ちょっとうちに用事があって電話してたんだ」
本条先輩の名前を出すとつっこまれた時言い訳できない。ごまかした。
「ふうん、お前もしかして、もうひとりの彼女に電話してたんじゃねえの？」
「もうひとりって、誰だよ？」

　尋ね返した。
「ほら、一年の、やたらと胸のでかい子。ほらほら、評議委員会の」
「ああ、杉本のこと言ってるんか？　違うって。俺、そんなに器用じゃない」
　さらっと流してから気が付いた。
　そうだった。情報を流してくれたＡ組男子評議委員、本条先輩、それと杉本梨南に土産を買うことを忘れていた。「もうひとりの彼女」なんてことは絶対無い けれど、一番ひいきしている一年の女子評議委員であることは確かだった。財布の中身が電話代でほぼからっぽになってしまったことにも気が付いた。
「羽飛、悪いんだけどさ。借金申し込んでもいいか？」
「へへ、どうしたんだよ。立村金持ちのぼんぼんの癖して」
「どこがだよ。俺の財布の中身、見せてやろうか？　一円玉と五円玉のオンパレードだ」
　見たがってもいないのに、わざわざ財布の小銭入れを開いて見せてやった。
「ほんとだ。白い小銭ばっかりだ」
「だろ。でもさ、評議委員会に土産買わないと、俺は明日の太陽拝めない」
　ぎゃはは、と体をひねらせながら貴史は笑い転げた。
「そっかそっか。分かった。五百円だな」
　ねそべったまま財布を捜し、五百円硬貨を差し出した。
「ありがたい。始業式の日にちゃんと返すよ」
　黄葉市限定のキャラメルが売っているというのを父から聞いていた。二百円くらいだったはずだ。それを二箱買っておこう。

２　朝食前の様子見と

　七時。朝食のため食堂に集合した。集まりが遅い。
　さっさと座って、箸をつけるのを今か今かと待ちつづけていたのに、なかなか揃わない。
　一度よそってもらった味噌汁を、一度戻して待っていた。
「何時までゲームやってたんだよ」
「二時過ぎまで騒いでたぜ。俺は途中で抜けたけど」
「なあんだ、羽飛だって人のこと言えないくせにな」
　ちょっと意外だった。枕もとで声をかけてくれたのはやはり貴史だったのだろう。もう一人の「立村くん」と呼んだ相手が誰だったかのかは聞きそびれた。な んとなく見当はつく。でも言ってしまうとかえってまずいことになりそうだった。貴史の方も、それ以上は何も言わなかった。時計をちらちら見ながらぽつりと 「腹へったあ」とつぶやくだけだった。
　上総が一番気になっていたのは、南雲と奈良岡のカップルがどういう顔をして入ってくるかだった。
　結局南雲と落ち合っただろうか。確認できなかった。二時過ぎまで菱本先生が部屋で騒いでい

たということだと、よっぽどのことがない限り、二人のランデブーは気付かれていないはずだ。
　なぐちゃん、どうだったんだろう。
　あとで定期入れ、チェックだな。

　眠気の覚めない顔で、女子グループがまとまって入ってきた。
　くぐもった声で「おはよう」と声を掛け合うものの、返事を期待していない風だった。なんだか昨日から女子の様子がおかしい。美里に早い段階で聞いておけ ばよかったと思う。例の大喧嘩をやらかした関係でわからずじまいだった。貴史に相談すれば、うまくとりなしてくれるのだろうが、プライドがある。そんなの いやだ。
「おっはよ！　あんたら早いねえ」
　わざわざ上総たちの後ろを通り過ぎていくのが美里とこずえだった。おおよその女子グループとは別行動だった。こずえのあねごっぽい口調にちょっとほっとした。変わっていなかった。
「頼むから早く座ってくれよ。おあずけ食って死にそうなんだ」
　つんとして無視したままの美里。視線をそらして上総はこずえに返事した。
「へえ、おあずけねえ。そっかあ、美里にもおあずけ食ってるんだもんねえ。朝からそんなにむらむらしていてどうすんのよ」
　来た。いつものパターンだ。
「古川さん、目の前に食べ物が並んでいるのを二十分間じっと見つめている俺の立場を考えてほしい。飢えてるんだって」
「なあにが飢えているのよ。ま、わかるけどね。二人っきりになるチャンスがいくらでもあったのに、なーんもできなかったあんたの気持ちもね」
　話がかみ合っていないのはいつものことだ。
「ばかばかしい。とにかく早く座れよ」
「まったく、あんたはガキだねえ」
　隣りで貴史が笑いをこらえている。うつむいている。鼻先が卵の殻にくっつきそうなほど、テーブルに顔を近づけている。卵をひょいと奪って、上総は自分の皿に乗っけた。何も言わない美里の後ろ髪をちらっと見た。髪型は昨日と同じだった。同じ柄のドアノブ風髪飾りだった。
「あのな、立村」
　卵を取り返した後、貴史がささやいた。
「本当に昨日の夜、気付かなかったのかよ」
「何がだよ」
「あいつ、お前のまぬけ面見ながら、しばらく部屋にいたんだぞ」
「いたって、どこにだよ」
「まだ気付かねえのかよ」
　あきれたように貴史は卵の殻を少しずつはがし始めた。
「古川の言うこともまんざら嘘じゃねえなあ。お前って肝心なところでチャンス逃してるんだぜ。少しはスタミナ蓄えろっていいたくなるなあ」

「チャンスって、なんだよ。まさか、おい」
「たぶんお前が今考えてることと一緒」
　頭の中にもう一度、声がよみがえった。
　……立村くん。
　まさかあの時。
　上総は前の方に座っている美里に視線を向けた。
　他の女子としゃべりながらご飯を盛っていた。制服姿で襟元のリボンが揺れていた。誰かの分を渡すためかぐるっと見渡した時に視線がぶつかった。
　目で訴えるしかできない。上総は一瞬だけじっと見つめ返した。すぐにそらした。しょうゆを小皿に注いでいるのに集中しているふりをした。

　南雲はやはり最後だった。奈良岡とは別々に来たようだった。
　相変わらずさわやかな顔をしていた。いつもよりも髪型が艶やかだった。額をオールバックにしているのは初めて見た。女子の一部が
「髪型変えてるよ、かっこいい！」
とつぶやいているのが聞こえた。
「どうした南雲、今日は決めてるなあ」
　いつのまにか来ていた菱本先生が、感心したような声を上げた。この先生、南雲には甘い。
「すんません。気分を変えたかったんですよね。どうっすか。似合いますか」
「別に似合わんとは言わないが、これでまた他の女子にきゃあきゃあいわれるな」
「罪な男ですみません」
　側で
「彰子ちゃん、惚れ直したでしょ！」
とつぶやく声がする。よく耳を傾けると、こずえのようだった。奈良岡はこずえの肩を軽く叩いて、たしなめるような表情を見せた。気持ちがわかる。上総はそれ以外の何か変化がないかどうかを観察してみたが、見出せなかった。
「では、これで全員揃ったな。では、いただきます！」
「いただきます」
　もう何も考えず、生卵をかけて、海苔をつけ、ご飯をかきこんだ。隣りの貴史がけげんそうな顔をしているが、そんなの関係なかった。こんなに気持ちよく食べられるのは久しぶりだった。おかわりまでしてしまうくらいだった。よそった時にまた美里と目が合った。

３　計画実行第一段階

　他の連中がどう思おうが関係なかった。
　シャワーを浴びて頭をすっきりさせた時から、この日だけは勝負をかけようと決めていた。一

眠りしたせいか案は頭の中に溶け込んでいき、目覚めと同時に完成していた。
　キーワードは「演技」。
　あの本条先輩が、恥をしのんで運転手さんを泣き落としたらしい。残念ながら詳しい状況は理解できなかった。相当追い詰められていたらしいし、本条先輩は手段を選ばないだろう。
　手段を選んではいけない。
　停学になるやもしれぬ方法を取るなんて、正直なところ、怖い。
　本条先輩には強がってみせたけれど、もし退学になったらと思うと、体が震えてくる。
　公立に戻されるのだけは嫌だ。
　貴史、南雲、美里たちから相手にされなくなるかもしれない。上総の感じていることを理解してくれないだろう。きっと夜空の星を素直にきれいだと感じる人々だ。恐怖のあまり部屋から逃げ出してしまった上総のことを笑うかもしれない。
　それ以上に、こんなことをしようだなんて、思う上総のことを軽蔑するかもしれない。そう思える自分だったら、きっと楽だったろう。
　今の上総はそうできなかった。
　貴史、美里たちよりも、顔を知らないＡ組の女子の感情の方がずっと近かった。きっと針山のような星で突き刺される恐怖を感じているに違いない。針には絶対になりたくなかった。
　戦いだ。
　お茶をすすり終わった後、菱本先生の方をちらりと眺め、つぶやいた。

「先生、いいですか」
　ごちそうさまの挨拶寸前に、上総は立ち上がった。
「どうした立村。もうすっかり元通りになったようだが」
「提案があるのですが」
　文句を言いたいのかとばかり、菱本先生はげんなりした顔を見せた。
「もうお前のわがままは聞かないぞ。とにかく、明星美術館に行くのは決定だ」
「それではありません。今日のバス、乗る時の座席なんですが」
　一呼吸して唇をほんのわずか、開いた。こうすると笑っているように見えるのだそうだ。三十人の面子をさあっと見渡した。美里、こずえ、そして南雲、隣りの貴史、顔を見上げている。
「提案したいことがあります。二日間ずっと同じ席ということもあって、窓際に行きたい人とか、席をちょっと替えたい人とかいると思います。特に昨日は、車酔いで大変だったとも聞いてます。そこで」
　言葉を切って、もう一度菱本先生に頷いた。
「今日座る席を、希望者は好きに選べるようにしたいと思います。もちろん替える必要ないとすれば、そのままでいいんですが、ちょっと窓際に行きたいとか、前の方がいいとか、そういう人がいるようだったら、どんどん替えてください」
　茶碗の音に混じってかすかにざわめいた。
「おいなぜだ？」

　菱本先生は怒っていない。意味がわからないようだった。
「今日も予定変更するってことですから、きっと長時間乗ることになると思います。そうなると昨日体調を崩した人とかは、別の席に座って気分転換したほうがいいと、僕自身が思うからです」
　全く嘘ではない。旅行する時、酔わないようにということで親が配慮してくれたのを覚えていた。
「ほほう、経験か？」
「そうです」
　はたして他の連中はどういう反応かを探ってみた。女子はみな、顔を見合わせて、次に上総の方を見上げて
「何言ってるの？　立村くん」
という感じだった。そんなのはどうでも良かった。次に男子グループそれぞれだが、こちらはむしろ、話を聞いていない奴の方が多かった。席から早く立ちたい のに、といわんばかりに箸を叩きつけている奴もいるし、あくびしているのも。最後に隣りの貴史を見た。うさんくさそうに上総を見上げて一言、
「そんなに俺から離れたいのかよ、淋しいぜ」
　あえて笑顔で答えたい。
「羽飛には淋しい思いなんてさせないから、安心しろよ」
「けっ！　気持ち悪いこというよなあ」
　結論。みんなどうでもいいってことらしい。
「菱本先生、いいですか」
　菱本先生も面倒くさそうに答えた。
「ああわかった。どうせみんなそんなことどうでもいいだろ？　まあ、変わりたい奴がいたら、変わればいいし、別にそのままでよければそれでいいぞ。さ、さっさと出発準備しろよ」
　大きな声で一斉に「ごちそうさまでした」の挨拶をした後、一気に椅子のぶつかり合う音がはじけた。上総の提案なんてすでに、ざわめきで消去されたような ものだった。貴史だけが妙にむすっとした顔をしているだけ。上総はさっさと部屋に戻った。忘れ物がないかどうか、あらためてチェックしなくてはならない。 計画その一段階は完了した。

４　計画段階第二段階

「たいしたことじゃないよ。子どもの頃から俺、車に酔いやすくてさ。その時にうちの親とか親戚とかが、『同じ席よりも違う席にどんどんかえていった方が車 に酔わなくていいよ』って言われてさ。ほら、昨日羽飛が話していただろ？　女子がひどく車に酔って大変だったらしいって。自分でも経験してるけど、あの時 の後遺症って結構響くんだ。それならさ、気分変えて別の席にかわったりすれば、今日の長丁場乗り切れるんでないかなって、そう思っただけなんだ」

　私服および、ボードゲームをかばんにつっこみながら上総は言い訳した。貴史のくそ真面目な、
「お前何たくらんでるんだよ。言えよ。言えよな」
　責めるまなざしに耐えかねたというのもある。
「まあな、昨日のバスは確かに修羅場だったからなあ。美里も相当苦労してたし、奈良岡のねーさんも大変だったようだしな」
「奈良岡さんもって」
「ほら、言ったろ。女子がトイレがやばくなって降りたがってたって」
「ああ、そんなこと言ってたな」
「そんとき、ねーさんがいろいろ面倒みてやってたみたいなんだ。さすが保健委員。美里は前だろ？　連絡取り合ったりしてたんだ」
　あまり深いこと聞いてはいけない内容のようで、上総はそこで打ち切った。
「どちらにせよ、きれいなネタじゃないよな」
「席を替えたい奴は替えればいいけど、まさかお前、俺から離れたいなんてそんなこと言わねえよなあ。俺とお前は、入学式からの長い付き合いだろ？　な、わかってるよな」
　ぐいっと、片腕で首を締め付ける貴史。苦しくて外そうとしたけれどなかなかうまくいかない。腕力は貴史の方がはるかに上だった。降参の意、三回ベットを叩いた。
「まいった、やめろって」
「じゃあ、本当のことを言えよ。何たくらんでるんだ？」
　呼吸が楽になったところで、上総はふたたび笑顔をこしらえた。
「実はさ、ちょっと今日中にやりたいことがあってさ」
「へ？」
「絶対に言うなよ。羽飛、お前だけに言うんだからな」
「なんだよなんだよ」
　手帳の中に用意してある秘密の計画だった。第二段階突入ゆえの演技その二だった。

「もう羽飛にはばれてるからしかたないけど、俺と清坂氏とのこと、もう聞いてるだろ」
「そりゃあ、あれだけ騒げばなあ」
　コースターをしまうのを忘れていた。手に取ったままもて遊び、続けた。
「なんとか、始業式までにけりをつけたいんだ」
「けりつけるってなんだよ。まさかお前ら……」
　別れたいとかいうんじゃ、と言いたげに顔をしかめる貴史。違う違うとゆっくり首を振った。
「その反対。向こうの考えが、正直なところ俺は読めない。よりによって古川さんを通して誤解が誤解を招いているところもあるみたいでさ」
「まあなあ。女子の間ではすごいことになっているはずだなあ」
「もっと言うなら、清坂氏と一番仲がいいのは、古川さんだっていうのもまた確か」
「うるせえ同士、全くだ」

　ここで上総は声を潜めた。真剣そうに見えるよう、目に力をこめた。両手でコースターをつまんだ。
「羽飛、悪いけど俺と古川さんを隣同士ってことにしてもらえないか」
「なに？」
　響くすっとんきょうな声。絶対隣にいる菱本先生にも聞こえているはずだ。今度は上総の方が肩から貴史の口をふさぐように抱きついた。
「で、俺がいた席には清坂氏を置いてってことにしてもらいたいんだ」
「美里とお前が席を交換ってことか。お前、いったい」
「俺は今日一日使って、古川さんにごますって、なんとか無事にうまくいくよう頼むつもりなんだ。あの人ははっきり言って、俺の『姉さん』だしな。そこで羽飛もうひとつ、頼みがあるんだ」
「なんだよ」
　片腕で貴史の首を抱えたまま、上総はさらに耳もとにささやいた。
「あとで本当に謝るつもりだから、それまでうまくごまかしてもらえないかな」
「お前が悪いってか」
「まあいろいろあるんだけど、今、話すとまたどろ沼になりそうでさ。車の中だと帰って話がわけわかんないことになりそうなんだ。俺もそこまで、ひどいことしたくない」
　上総の耳もとに聞こえるのは、貴史の呼吸する鼻息。ぎゅっとさらに締め付けた。
「な、頼む。一生の頼みだ」
　さっきの上総のように離せと騒いだりはしなかった。黒目がちろっと動いたのを見た。腕に噛み付く真似をして、ゆっくりと手首から外していった。ぎゅっと握ったまま。
「ったく、だから昨日お前、起きてればよかったんだよ。美里、ちゃんとここで外見ながらしゃべってたんだぜ。ほんとにふたりっきりで、しゃべればよかったんだぞ。全くお前ら、かみ合ってねえよなあ」
　握った腕を軽く振った。
「しかし、なんで三日間、美里とばっかり俺がしゃべってねえばなんねえんだよ」
　ＯＫのサインだった。げらげら笑いながら、ベットの上を転がってじゃれ続けた。

５　計画実行第三段階

　部屋の中でふたり馬鹿やったのは旅行中最初で最後のような気がする。目的を達した後、さっさと鍵を持って出たのが九時近くだった。みなきちんと制服姿に 戻っているのが、いかにも学校行事という感じだった。かすかにせみの声が聞こえる程度で、夏用の長袖ブレザーを羽織っていても暑苦しくない。空にうっすら とうろこ雲が延びていた。理科の授業で確か、天気が悪くなる前触れだと聞いたことがあった。縁起悪い。貴史以外のクラスメートと一緒に、来月封切りの洋画 情報についてしゃべっていた。アクションものらしい。九月に入ってから一緒に行こうという話にまとまった。

「全員揃ったか？　立村、勘定してみろ」
　美里の方をあえて見ないまま、男子の肩ひとりひとりに手を置いて、十五人全員揃っていることを確かめた。女子の方はすでに点呼が終わっているらしい。
「忘れ物ないな？　じゃあ、最後に、ホテルのみなさんにお礼の言葉、さん、はい！」
「ありがとうございました！」
　ロビーで派手な声を張り上げるのもどうかと思うのだが、菱本先生をこれ以上不快にさせてもいいことないので、指示に従った。笑顔で送り出してくれたスタッフの方々に頭を下げた。外に出た後、もう一度振り向いて、今度は自分から質問を投げかけることにした。
「ところで、席を替えた人ってどのくらいいるか？」
「そんなのどうせ、乗っちまってからでいいだろ」
　理由を知っていると思っている。貴史がたしなめるような口調で言った。
「ああそうだな。じゃあ乗っちゃうか」
　ずっと気になる美里の方に視線を投げた。相変わらず冷静なまなざしで上総の方を見ていたようだが、
「じゃあ、女子で後ろの方に行きたい人から先に乗ってね」
　と声をかけた。昨日のゲーム大会に参加しなかった女子三名ほどが、先にバスへ乗り込んでいった。続いてどんどんばらばらに乗り込んでいく。最後に美里、 貴史、上総、こずえの順に入ろうとした。決まっているとおりの席に付こうとした時、貴史がいきなり美里の腕を軽く引っ張った。
「なによ、貴史、どうしたのよ」
「お前は俺の隣りに来い。立村のいた席だ」
「え？　どういうことよ！」
　慌てるように貴史、こずえ、最後に上総の顔をにらみつけた。かなり怖かった。話をすると泥沼になるのは目に見えている。上総は素早くこずえに振り向いて、もう一度笑顔をこしらえた。
「と、いうわけで。悪いんだけど、隣りに行ってかまわないかな。古川さん」
「は？　立村、あんた何考えてるわけ、美里を取られたから、だからなに？　私を身代わりにしようって奴なの？」
　混乱しているこずえの様子が手にとるようにわかった。複雑な気持ちを押さえられないのも想像がつく。同じ席替えだったら、美里と上総、こずえと貴史、このパターンであってほしかったのだろう。気持ちはわかる。でも、そうするわけには行かない。
　とことん、やるしかない。
　演技だ、演技。
　怪しまれないように。
　たくらんでいるように見られないように。
　貴史にだけわかるように頷いてみせ、上総は昨日まで美里の座っていた窓際の席を陣取った。運転手さんに笑顔のまま挨拶をした。相変わらず煙草の箱は脇に積んであるけれども、やはり温かい笑顔のままだった。

「今日も一日、よろしくお願いします」
「体調、大丈夫ですか？」
　誰かが上総のことをしゃべったらしい。頬が赤くなりそうで、うつむきながら、早口に答えた。
「すみません。大丈夫です」
　隣りでむっとした顔のまま缶ジュースを取り出したこずえに、上総は手持ちのキャンディーを取り出した。まずはご機嫌伺いだった。
「まあ、こういう機会でもなければ、古川さんとふつうの会話もすることはないからさ」
　赤いドロップを片手で受け取り、こずえは口にほおりこんだ。
「立村、あんたさあ、美里とけんかするのはいいけれど、私の方まで害を及ぼさないでよね。まさかあんたさあ、美里にやきもち妬かせようという、女々しいこと考えてるんじゃないでしょうねえ」
「なわけないだろ。ばかばかしい。俺は単に、古川さんともっとお近づきになりたかっただけであって」
　必死に笑顔で接する上総だが、なかなか難しい。ようやく通路の席に菱本先生が乗り込んできた。前の四人が面子交代ということで、思わずたじろいだ様子だった。
「おい、立村、お前今度は古川にのりかえたのか？」
「そういうわけではないです。気分転換です」
　冷静沈着、演技だ演技。
　心中繰り返す呪文のような言葉。
「それで、こちらはいつものおふたりさんか」
「先生、何また誤解してるんですか！　何考えてるのよ貴史！　あとで白状しなさいよ。なんであんたと最後の最後までくっついてなくちゃいけないのよ」
「まあ、それは最後にわかることだろ。な、立村」
　へらへらしながら貴史が上総に語りかけてくる。上総と貴史が一緒にたくらんだということに気付かれてしまったようだ。美里が目を三角にして貴史にまくし 立てている。あえて上総の方を見ないのは美里の意地か。誤解されているとはいえ貴史には心から感謝しなくてはならない。なんとかして美里と仲直りしたいか ら、あえてそういうまどろっこしい手段を取ったのだと、勘違いしてくれている貴史。

　でも明日から、絶交されるかもな。
　当然のことを俺はしているんだ。
　後悔なんてしない。絶対に。
　走り出したんだから。

　上総はこずえの方にゆっくりとネタを振り始めた。
　こうなったら、「朝の漫才」であろうが、「夜のおかず」であろうが、なんでもいい。とこと

ん付き合おう。
「あのさ、古川さんの弟って、そんなに俺に似ているか？」
　時が来るまでは。

その十四　計画遂行までのよしなごと

１　バス前列懐柔作戦

「一般的に女子同士って部屋の中でどういう話してる？　例えばさ、やっぱり音楽のこととかテレビのこととか、そういう感じなんか？　俺たちだとやっぱりさ、本とか、あとそうだな、洋楽のインストロメンタルとか」
「無理してるの見え見えだよ、本当にあんたガキなんだから」
　約一時間の間、テンションを高く保つため、自分の持てる力を振り絞りしゃべりつづけてきたけれど、さすがこずえにはかなわなかった。通路にいる菱本先生 は相変わらず貴史、美里としゃべっているけれども、一日目のような盛り上がりには欠けている。窓際で貴史と笑顔で語り合っている美里。ごくごく自然に見え る。でもたまに、上総の方をのぞき込んではすぐ目をそらす。貴史が菱本先生の間に入って、昨日の「間一髪・高校生との修羅場」を再現してみせたりと、一列 目に限ってははしゃいでいる、かに見えた。
　黙っていると車に酔うだけでなく、計画がばれてしまう。
　演技と言い聞かせていた。
　こずえもさすがに三日目となっては疲れていたのかもしれない。はいはいと流す程度で、まだ強烈な下ネタを振ってはこなかった。
「どうせ男子のしゃべってることって言えば、エッチネタばかりでしょ。知ってるよ。そのくらい。羽飛たちといったい何盛り上がってたのさ。まさか、エロ本なんて持ってこなかったでしょうね」
「定義はなんだよ。写真集か？」
　普段なら「ばかばかしい」の一言で無視することなのだが、今回はそうも行かない。話に乗ってきた上総を再び、あきれるようなまなざしで見て、こずえは反り返った。
「あんたひそかに、本屋で売ってないエッチ本持ってるって聞いたことあるよ」
「誰だよそんなこと言ったのは。第一証人いるのかよ」
「一年の三学期くらいかな、本条先輩と、もういっこ上の評議委員の先輩が教室でなんかしゃべりながらエッチ本をあんたのために、選んでいたの、見たことあるんだから。美里には言わないであげたけどさ」
　思い当たる節がある。どつぼにはまりそうだ。でもやめられない。
　上総はこずえにしか聞こえないように、周りを気遣いながら、
「結城先輩とだろ。まあいろいろあるさ」
「へえ、否定しないんだ。ったく、あんたも変なとこだけ大人になったねえ」
「姉さん、実際の経験はどうなんですか、古川さん」
　間を持たせるために、もう一回ドロップの缶を振って差し出す。当然のごとく受け取るこずえ。目ざとく見つけてか貴史も、菱本先生の前を遮るように手を伸ばしてくる。緑色のドロップを二つ、落とした。

「お、二粒もくれるのか」
「お隣りさんに渡してくれ」
　そのお隣りさんたる美里は、完全に無視の姿勢だった。貴史が美里の肩をつついて、
「ほら、立村からの差し入れだ」
と指差しているのだが、一切返事をしない。仕方ないかのように、貴史が二粒、一気に口にほおりこむ。
「騒いでるのって、うちらだけだよね。後ろの席なんてもう、静かだよ。美里、もうカラオケ大会やらないの？」
　こずえは上総の相手をするのにうんざりしたかのように、大声で尋ねかけた。
「やるわけないでしょ！　騒ぎたい人だけ騒いでりゃいいのよ！」
　貴史とは、何気ない拍子に笑い声が出る。こずえは振り返り、ちょっとだけ素の表情に戻る。上総と漫才かましている時とは違う、淋しげなまなざしだった。気付いていた。
　羽飛の奴、本当に一年の女子と付き合う気なんだろうか。
　二学期になってから結論出すって言ってたよな。
古川さんは、傷つくだろうな。
　こんなことさえなければ、俺は古川さんと羽飛を隣同士にしてやっただろうな。残酷かどうかわからないけれどさ。俺は清坂氏と、さんざんひゅうひゅう言われることを覚悟すると。
　きっと喜んでもらえるって宿泊研修の計画を練ってきたんだ。
　結局俺は役立たずのままなんだ。
　菱本先生の言う通り、自分の能力を超えたことばかりやろうとして、失敗してる情けない奴なんだ。
「ほら、もう一個やろうか」
「いらないよ。もっと美味しいものだったらいいけどね」
　目を閉じていた菱本先生がはたっと身を起こした。
「配りたいなら俺にもよこせ。立村、今日は一段とハイテンションだなあ。夜、いいことでもあったのか？　昨日はロビーで長電話してたって噂聞いたが。秘密の恋人でもいるのかな？」
　息が詰まった。口の中のつるつるしたドロップを飲み込み損ねて激しく咳が出た。こずえが露骨に身体を離した。吐かれたら困るとでも言いたげだった。
「お、図星か。じゃあ、立村の相手について追求してみるか。昨日は羽飛と清坂の関係についてたっぷり聞かせてもらったしな。古川、お前も聞きたいだろ？」
　強くうなずくこずえ。いきなり顔をのぞき込んできた。
「そうだよねえ、浮気してるんだあ。美里だけじゃないんだあ。本条先輩の真似してるってことかなあ？」
　違う、違うと首を振るのが精一杯だった。貴史と美里の席を見るのが怖い。何かとんでもない勘違いをされているような気がする。息を整え、こずえの方にだけ顔を向けた。菱本先生は当然無視した。
「あのな、人が電話しているだけで勝手な想像するのはやめろよな。俺にだってうちってものが

あるんだ」
「へえ、ホームシックにかかっちゃったの？」
「だから違うって。たまたま本条先輩に用事があって」
「あ、わかった！　本条先輩に女子の口説き方を緊急レクチャーしてもらったんでしょ。本条先輩、すごいよね。ふたり彼女がいるんだよね」
　はたして担任の近くで色恋沙汰の話題を振っていいのだろうか。
　上総はごまかすことにした。
「知らないってさ。評議同士いろいろ報告することがあるんだよ」
「報告ってなになに？　ははん、美里との喧嘩で、仲直りできるかどうか相談してたのかなあ」
「関係ないだろ！」
　次の台詞に上総は危うく叫びそうになった。
「そうかお前ら、夫婦喧嘩してたのか。熱出してぶっ倒れるくらい落ち込んでたんだな。清坂、どうする？　許してやるか？　羽飛のところに戻るのか？」
「いいかげんにしてください！　先生には関係ないでしょ！　だいっ嫌い！」
　もう何を言い返しても無駄だ。上総はおとなしく、窓を見ながら次の会話を何にするか考えた。外の景色は山々からだんだん、赤い三角屋根、平べったい青い屋根、四角い建物に置き換えられていく。見慣れた青潟の空気が空から降りてきた風だった。
　あと一時間もない。計画実行第四段階に突入だ。

２　計画実行第四段階

　明星美術館までは思ったよりも遠かった。予定では十時半に休憩が二十分入り、十一時半に明星美術館に到着だ。前日調べた「明星美術館案内」によると、か なり広い。名の知れた有名画家が揃っているわけではないのだが、ひとりだけ地元出身の著名な画家がいるとか。個人画所蔵の保管スペース扱いされているらし い
　重要なことはただ一つ。
　いかにして先にバスを降りるか、だ。
　全く地理勘のない場所というのが、さらに頭を悩ませる。
　降りたはいいが、すぐに美術館にもぐりこめるかどうかというのも問題だ。裏門から入ればすぐだとは思う。入場料も三百円だ。貴史から借りた分でぎりぎり 賄える。二年Ｄ組連中が到着するまでのわずかな間に狩野先生を探し出すことができるだろうか。天気がいいからきっと芝生で弁当を食べている可能性もある。 美術館内で鑑賞しているかもしれない。美術館内の喫茶店で何か食べているかもしれない。
　考えれば考えるほど、わけがわからなくなる。
「ほらほら、立村、無理して騒いでいるからエネルギーなくなるんだよ」
　貴史と美里たちが降りた後、上総も立ち上がった。隣りのこずえが大きなため息をついて見上げた。菱本先生もいない。運転手さんがいるだけだ。本当はこずえがいなくなってから運転手さ

んに、時間をもらおうと考えていた。
「先に下りれば」
「はいはい。あまり無理するのは身体によくないよ。わが弟よ」
　見抜かれているのか。
　へらへらしてごまかすしかなかった。
「ありがとう、やっぱり持つべきものはお姉さんってとこか」

　こずえが降りた後、上総は通路に立ちざっと見渡した。まだ誰も酔って苦しんでいることもないし、意外なほど静かだった。トイレに寄ればすぐに戻ってきてもかまわない。お土産を買う場所がかなりあるので、時間をつぶすにはちょうど良かった。
　一服、といった風に運転手さんは煙草の封を切った。
「昨日は、ご迷惑かけてしまってすみません」
　話のとっかかりとして謝った。詳しいことは知らないが、修羅場だったとだけは聞いている。評議委員としての礼儀だと思った。
「いや、ちょっと時間がかかったから仕方ないですよ」
「本当は僕がきちんと、クラスをまとめないといけなかったんだけど、本当にすみません」
　にこやかに運転手さんは首を振った。上総が降りてからでないと動きようがないようだ。ひとまずトイレに行ってきてから、もう一度アタックだ。一礼して外に出た。ガソリンのにおいが、バスから離れるにしたがって薄れていった。
エンジンがかかっているのは頭の中だけ。心臓の音がこめかみに響いていた。

　することをすませるとすぐにバスに戻った。一日目の休憩時間では、運転手さんは近くのベンチに座って煙草を吹かしていた。風がかすかに揺らいでいるせい か、煙が消えていた。声をかけようとする前に、向こうから笑顔で招かれた。かすかに頷き、ベンチを軽く叩いた。紺の帽子でぱたぱた仰ぎながら、煙をよそに やった。
「すみません。少しだけいいですか」
　上総は奥歯同士がちょうどいい具合に合うように、かみ締めた。笑顔に見えるのだと、小さいころ母に仕込まれた。表情で勝負をかけるときは必ずこうしていた。上総の計算を気付いているのかいないのか、運転手さんはやさしい表情で空を見上げた。
「クラスの学級委員っていうのは、大変ですよ。僕も経験がありますからね。担任の先生たちはみな、クラスをまとめろとか、協力させろとかいうけれど、簡単に出来たら中学生じゃねえよって、いつも思ってましたからね」
　嘘じゃない気持ちで、頷いた。
「でも、青大附中さんの運転を担当することが多くなってから、やはり違うなあと思うんですよね。僕はふつうの公立だったから、青大附中というと超エリートの集団だとばかり思ってましたが」
「青大附中の宿泊研修って、いつも担当されて、おられるんですか？」

　少し安心しつつも、タイムリミット二十分以内というのに上総は、焦りを覚えた。
「修学旅行や遠足なども、いつもそうですね。毎回、というわけではないですが、やはりガイドとかも学校別に専門の人がいたりします。日時なども選びますが僕は学校関係を担当することが多いですね。ここ三年は青大附中さん中心かな」
　詳しい事情は意味不明だった。単に青大附中の宿泊研修はなれているってことだろう。上総は相槌を打ちながら、話を切り出すタイミングを計った。菱本先生や貴史がもどってこないうちに。

「おととい、やはり青大附中の宿泊研修で、礼儀正しい、やたらと仕切り屋の評議委員がいた話してくれましたよね」
「はいはいはい、覚えてますよ。あの時は面白かったなあ。思い出話になることがどっさりありますよ。言えないけれど、先生なんて目じゃないって感じで盛り上がっていたことを」
　本条先輩のクラスは本条里希色に染まっていたのだろう。楽しそうにあれやこれや思い出そうとする様子だった
　寝ている間に考えた言葉を上総はなんどか繰り返した。
　本条先輩に対してしてくれた何かを、どうか上総にもしてほしいということを伝えればいい。明星美術館の裏口で、僕が騒ぎを起こしたら、すみませんが下ろ してもらえますか？　決して悪いことをするわけじゃないんです。ただ、どうしてもしなくてはならないことがあるんです。言うだけでいい。
　でももし、問い詰められたらどうしよう？
　両手を握り締めた。こつこつとベンチの端をたたいた。不思議そうに運転手さんが上総の方に首を傾げた。
　チャンスだ、話そう。
　唇を何度も動かした。
「あの、それで」
　途中で言葉が出なくなってしまった。
　身体の方が勝手に言葉を吐き出させてくれなかった。

　早く、何とかしなくちゃいけない。
　でも、どう切り出せばいいかわからない。
　断られるかもしれない。
　菱本先生に告げ口されるかもしれない。
　手の平に汗をかいていた。さっきトイレに行ってきたくせに、また行きたくなってきそうだった。本条先輩に昨夜言われた、
「俺と違ってお前、押しが弱いだろ。人を説得なんてできやしないって」
という言葉、耳を離れなかった。
　肝心要のところで出てきてしまう、弱虫な自分がいる。

散々計画を立てておいたくせに、腰がひけてしまう。
絶対やると決めてるのに、腰砕けの自分がいる。
上総は半開きのまま唇を動かした。
気付いていないのだろうか。運転手さんはさらに続けた。

「すごいですよね、あの、本条くんだったかな？　女子にもかなりもてるタイプですね。頭も切れるしいざという時には頼りになるなあ。僕が青大附中の評議委 員というのに関心を持つようになったのは、あの時からです。単なる学級委員と違うんですね。本当にクラスのことを考えて、懸命に努力して、それでひっぱっ ていける人がなってるんですね」
目の前にふうっと、評議委員会中教壇に立って黒板を叩いている本条先輩の姿が目に浮かんだ。評議委員長。来年はたぶん、自分が評議委員長になるはずだった。重ねてみようとした。できなかった。
「先輩は、評議委員長なんです。すごい、本当にすごい人です」
「君だって、一生懸命にクラスのみんなを気遣っているじゃないですか。自信もって大丈夫ですよ。立村くん」
苗字を呼ばれたとたん、掛け金が自分の中で外れたような気がした。
違う、俺は本条先輩みたいになれない。
運転手さんの言葉が上総の中にずぶずぶ突き刺さっていった。
俺は本条先輩みたいに、なんて、出来ない。
本条先輩の言う通りだ。
さっきまでは堂々と演技して泣き落とそうとして、覚悟していたくせに。
もう限界だった。

菱本先生のように気持ち悪いやさしさで撫でまわされた時も、貴史に問い詰められた時も、南雲の前でも、なんとか人前で泣かないように耐えられた。絶対に 学校では泣かないようにしようと、毎日誓って通っていた。自分の記憶している限り、人前で泣いたことは中学に入ってから全くなかった。男のくせに女々しい と言われたくなかった。
自分がまだまだ、小学校の頃と同じ泣き虫だってことは、一番よくわかっている。上総の部屋にかかっている鏡、ベット、机みな、口が利けたらきっと証言するだろう。
咽からこみ上げてくるのは熱い塊のようなものだった。頬によじ登ってくる。

「どうしたんですか？　なにか、嫌なことがあったんですか？」
声はまったく変わらない、穏やかな調子だった。
「俺はそんな、青大附中の評議じゃない。本条先輩のように、なれない。本条先輩のようになんて」
顔を隠すとかえって泣いていることを認めるようでいやだった。
ベンチの板をを両脇握りしめた。支えがほしかった。自分の声が震えているのが分かった。

「今日これから、明星美術館に行くということ。俺は絶対やめさせたくて。昨日の反省でその話が出た時、俺は反対したけど、結局、ガキ扱いされてしまっただけで」
　話したところで咽が詰まった。運転手さんの顔を見上げることができなかった。一気にしゃくりあげてしまいそうだった。背中をさすってくれた。軽く、とんとんと叩いてくれた。
「どうして、反対したんですか？」
　尋ねると同時にまた、首筋をさすってくれた。薄手のシャツから直接響いてきた。
「たぶん俺が神経質すぎるだけだと思います。他のクラスの先生と女子三人が、別行動で明星美術館に来るから、一緒に合流しようって菱本先生は考えてます。 ふつうだったら、面白い、と盛り上げれるかもしれません。でも、その三人がなんで旅行しているかを考えないで、ただ、集団でいればいいからって決め付け」
　頬に勢いよくつたうものがあった。止められなかった。目をこすったが効果なかった。つばでこすった時に感じる、匂いだけだった。
「旅行の目的はなんですか？」
「退学する女子がいるからお別れ会らしいって聞きました。青大附中にもういたくないから、退学するってことらしいです。ひっそりと誰にも気付かれないよう にしたいのが本音だと思います。俺だったら絶対そうする。菱本先生はそんなことを全然考えてくれない。どうしてか、どうしてかわからないけど、退学する女 子の気持ちを全然考えないで、ただみんなで一緒に盛り上がろうとばかり、そればっかり。クラスの連中もみな、同じ考えみたいで、俺の考えはただのガキっぽ いわがままだって言われ」
　歯を食いしばった。ますます自分が壊れそうだった。
「そうなんですか。いきなりの予定変更が多い先生だと思っていましたが」
　考え込むような口調で、運転手さんは手を離した。

　さほどの時間でもなかったのだろう。運転手さんがポケットティッシュを一枚くれたので、目をぬぐい鼻をかんだ。目のところがすうすうする。きっと目が充血していて、恐ろしい形相だっただろう。
「落ち着きましたか？」
「はい。すみません」
　上総がこういう状態になると、相手はひくか怒るか慰めるかのどちらかだった。運転手さんはどちらでもなく、変わらぬ笑顔でずっと見守っているだけだった。
「もう一度、バスの中で説得しますか。先生を」
「いいえ」
　今度はきっちりと唇をかみ締め、首を小さく振った。
「もういまさらどうしようもないです。ただ」
　顔に涙の後が残っているかもしれない。顔を上げ、目一杯の力で運転手さんを見つめた。吸い終わった煙草を灰皿の上につぶさぬまま置いていた。
「裏門のところで、僕だけ降ろしてもらうってことはできませんか」

「裏門？」
　ひょっと、手を浮かせた。
「明星美術館には確か、裏門と表門というのがあると聞いたことがあります。僕ひとりが先に入っていって、あとから菱本先生たちが表門から入っていくってことは、できませんか」
　空をもう一度見つめなおし、運転手さんは唇を尖らせた。時間がない。一人、また一人とバスに乗り込もうとする女子の姿が見えた。美里、こずえももどってきたらしい。土産らしきビニール袋をぶら下げていた。
　もう心臓はとくとく言わない。涙で洗い流した。
　もう望みは断たれる。
　菱本先生が戻ってきた。缶ジュースを握りしめていた。
「どうした、立村、お前も早く乗れ」
「わかりました」
　怒鳴り返した。もう一度、運転手さんの顔を見つめた。
「無理ならいいです」
　立ち上がった。同時に運転手さんは上総の方にポケットティッシュを一枚差し出した。
「拭いてから席に戻った方がいいでしょう」

３　先手をとられて

　最後に乗り込むと、前列四人がなにやら会話を止めた。上総の顔を見上げては何か言いたそうな様子で、飲み込まなくてはという風に。他の連中はちょこちょ ことお菓子をつまんだりしていた。ジュースを飲む奴もいた。窓際の席に戻ってガラスの向こうを眺めた。前髪が思いっきり乱れていた。ガラスに映っていた。
「あんたも典型的な反抗期だねえ」
　こずえがぼそっとつぶやくと、隣りの菱本先生に話し掛けていた。
「ねえ先生、明星美術館にほんとに、Ａ組の人たちいるんですか？」
「ああ、確か十二時半くらいには青潟に戻るって話だったからなあ。明星美術館は中身がたいしたことないわりに、座るところがたくさんあるんだ。天気もいいし、ハイキングかわりに使ったりしているらしいぞ」
「あ、じゃあさあ、バレーボールとかできねえのかなあ？」
　貴史が耳ざとく、しゃしゃり出る様子。
「許可を得ないとな。春には花見の時に使ったりしているんだから弁当を広げるくらいはかまわないだろう」
「じゃあ、お弁当はどこで買うんですか？」
　美里の声だ。神経に響く。聞かないふりして窓を見つめつづけた。
「俺がちゃんとその辺は手配してあるから安心しろ。美術館に直接届けてもらうように頼んであるからな。人数分三十人」

　これは初耳だ。会話に混じってもっと詳しく聞きたかった。そっと振り返ると、四人の視線が上総一点に集まっている。ぎょっとした。
「なんですか、いったい」
「お前、昨日大反対してたよなあ」
　菱本先生がにやりと笑った。
「ほんとは、俺をもう一度説得したかったんだろう？」
　首を振った。まぬけに見えたかもしれない。言葉が咽にひっかっかって出てこなかった。
「朝から変だとは思ってたんだよなあ。立村があんなにばか見たく明るいのは見たことないって、羽飛も古川も話していたからな。でもな、世の中はそう甘くな いんだぞ。さっき、美術館の方に連絡して、弁当を三十個、用意してもらうようにしてあるんだ。お前のことだ、また『いきなり集団で弁当を広げるのは問題が あるんではないか』とか言い出しそうだったからなあ。悪いが、先手を打たせていただいたってわけだ。あきらめろ。潔く」
　信号でいったん停止している。ちらっと、運転手さんが上総のいる方に視線を投げ、すぐに元に戻した。全身に鐘の音が鳴り響くようだった。表情だけは変え たくなかった。唇を噛んだまま、菱本先生、こずえ、貴史、最後に美里の顔を見つめ返した。さっきまでけらけら笑いこけていた三人が、上総の様子にただなら ぬものを感じたのだろう、様子をうかがうような見上げ方をしていた。
「別に、そんなこと考えていません」
「そうか。ならよし」
　菱本先生は三人の顔をひとりひとり眺め、ほっとしたように伸びをした。やりきれない。他の連中も上総とのやり取りに決着がついたと思ったようで、ふわあっとため息が漏れてきた。緊張していたのかこずえも、やっとジュースにストローを差し込み、すすっと飲んだ。
「いいじゃない、美術館に行くくらいさ。立村、あんたって変なとこで頑固だからねえ。誰も絵を見たいなんて思ってないよ。みんなで盛り上がろうってだけじゃない。あと一日もないんだよ」
　アーモンドの入ったチョコレートをひとかけら差し出して、
「いいこと教えてあげようか」
「なんだよ」
「さっきね、美里がね、あんたのこと探してたんだよ」
　今度はささやき声、美里たちにはもちろん、菱本先生にも気付かれない声だった。
「何があったか知らないけど、あんたももう少し大目に見てやりなよ。美里昨日なんてすごく元気なかったんだよ。昼行灯って言われていても、美里にとってはあんたが一番なんだから。ほら、バスの中で昨日ばたばたしたでしょ、美里言ってたんだから。『立村くんがいたら』って」
「俺がいたらもっととんでもないことになってたよな」
　吐き捨てるようにつぶやいた。チョコレートをそのまま口に放り込んだ。
「ほらほらまたいじける。立村のことを美里だけは、ちゃんと『評議委員』として認めてるんだから。貴重な相手と縁が切れるなんて、もったいないよ。さっさと仲直り、しちゃいな」

菱本先生は上総に「担任」としてのだめを押しておきたかったのだろう。大人には逆らえないものだということを、教え込みたかったに違いない。来年青大附 中の次期評議委員長を任命されることもあって「これ以上天狗になるなよ」と言いたかったのかもしれない。教師に逆らってはならない、わがままを言ってはい けない。みんなと協力しあって、中学生らしく努力しなくてはならない。
でも、と、上総は思う。
何にもわかっていないんだ。
何に腹を立てているのか、なんもわかってない。
美術館に行きたくないからじゃないんだ。
いきなりの予定変更に頭に来たからでもないんだ。

突然、運転手さんがバスガイド用マイクを手に取った。
「それでは明星美術館に向かいます。あと三十分くらいですが、裏門の方を通っていきます。進行方向左手側が入り口ですが、バスは表門の方から入ることになります。混んでいる可能性もありますのでよろしくお願いいたします。裏門に近づきましたら改めて連絡します」
マイクを通すと、運転手さんの声は堅かった。上総の側で話をしてくれた時とは違い、伝えようとしているかのようだった。耳もとに響いた。
「いきなりアナウンスしてくれるなんてね」
向こう側で貴史と美里が不思議そうにしゃべっている。
「今までこんなことなかったよね」
「サービスかな」
誰も気付いていない。
菱本先生も、他の連中も。
気付いているのは、俺だけだ。
上総はもう一度運転手さんの手元、およびハンドルをじっと見つめた。念が通じるとするならば、ありがとうと伝えたかった。知らんぷりして運転に専念して いる。上総にティッシュを渡してくれた手。手袋で覆われている手。馬鹿見たく泣きじゃくってしまった時に、落ち着かせるようにさすってくれたものだった。

ありがとうございます。
たとえ、もう二年Ｄ組から追い出されたっていい。
俺は、自分の中の感じるものを信じて、計画を実行してやる。

市街地に入った。道路はほとんどコンクリートで舗装されていた。朝のすがれた空気が残っているせいか、入ってくる風は冷たかった。振動がきついのはいつものことだけど、こずえに頼み込んで窓を広くあけさせてもらったので、それほど酔わずにすんだ。

「めずらしいねえ。あんた一日目吐きそうな顔していたくせに。ほら、エチケット袋、いる？」
「大丈夫。古川さんと話していると刺激的で、なんだか楽だよ」
「ははん、この夏で成長したんだねえ、わが弟よ」
「ばかばかしい」
　上総はちろちろと向こう側の貴史、美里コンビを眺めながらつぶやいた。
　最初はいやがっていたくせに、あっという間に二人の世界を作り出している。髪につけた布のタータンチェックが目に入るたび、時計の針が進むたび、こずえの言葉を聞くたび、ためらった。
　やらかしていいのか。
　本当に後悔しないのか。
　すべてをなくしてしまうだろう。
　停学だけでない、退学になったらどうしようか。
　悪夢漂う本品山中学に転入になったら、また地獄の日々が始まるのだろうか。かつて上総のことを散々おもちゃにした連中と、また戦うのだろうか。それもよ し。小学校時代の泣き虫じゃないのだから。やられた相手には徹底してやり返すことを覚えた。一度は自分の味方でいてくれる人がいることも知った。信じられ ないことだけど、自分のことを好きだといってくれた女子だっていたことも。
　上総は左ポケットに指を差し入れた。金具っぽいものを探り当てて、指にはめた。いつ美術館裏門に差し掛かるのだろう。アナウンスを待った。

　運転手さんが手にマイクを取った。電気が走る。ポケットの手をぎゅっと握り締めた。
「みなさん、そろそろ明星美術館に差し掛かります。あと五分くらいでしょうか。目の前に白い円錐のようなものがたくさん並んでいる道が見えます。そこは狭いので、少しゆっくりめにスピードを落としていきます。一方通行です。少し時間がかかります」
　声は抑え目だ。アナウンスというよりも、脅迫しているような響きだった。
「それはそれはすみません。そうか。明星美術館ってな、ほとんどひとりの画家しか入っていないってきいたからなあ」
　菱本先生の間の抜けた声を耳にしながら、上総は表情を悟られぬよう窓ガラスに向けた。力いっぱい開いた。勢い余って全開になってしまった。ぎゅうと風が車内に落ちた。
「ちょっと、立村何やってるんだ」
「す、すみません。ちょっとなんとなく」
　嘘がつけないのが悔しい。勢いよく左手を外に出した。すでに一方通行の道に入っている。細い通りには運転手さんの話していた白い円錐形のオブジェが大小 取り混ぜて飾られていた。現代美術なのだろうか。そんなのはわからない。中にはとがったところの先をきゅっとひねって、クリームケーキのような形をこしら えているものも並んでいた。
　狭い通りをバスが走るなんて、本当は無謀なはずだ。ふつうは絶対、しないはずだ。なのに。
　奥歯をかみ締めた。

腰を浮かし、片手を開いてすぐに握り締めた。
手を引っ込めた。
ポケットにもう一度戻してから心でつぶやいた。
演技開始だ。

５　一世一代の名演技を

「どうしたのさ。立村、青ざめた顔をしてさ」
「とんでもないことになってしまったかもしれない」
こずえがすっとんきょうな声を上げた。
上総の手ががたがた震えているのに気付いたらしい。右手は浮いたまま脇に置いていた。
「今、とんでもないものを落としてしまったかもしれない」
「はあ？」
「どうしよう、本当にまずいことになってしまったかもしれない」
「なあに落としたのよ」
最初のうちは冗談めかしたようにあしらってくれた。まずい。上総はもう一度、唇をかみ締める風にして、こずえを見上げた。母に頼みごとをする時、小さい頃よくこうやったものだった。
「古川さん、恥をしのんで言うよ。俺、たぶんこれから生きていけないかもしれない」
「何大げさなこと言ってるの。美里に言いなよ、そんなこと」
「お姉さん、あんたにしかこういうことは相談できないんだって！」
ゆるゆるとスピードが落ちる。隣りに自転車が危うくすり抜けていく。死角に入っていきそうだった。声をさらに上ずらせてつぶやきつづけた。
「さっき俺が手を出してた時、気付かなかったんだけど、指にひっかかっていたらしいんだ」
「何が？　鍵かなんか？」
「限りなく近い」
早く気付いてほしい。ぐっと気合を込めて上総は答えた。
「キーホルダー、って知ってるだろ？」
「キーホルダーって、鍵じゃなければいいじゃない。どうせあんた、美里からもらったのがあるでしょ」
「その肝心要の、もらったばかりのキーホルダーなんだって！」
反対側の美里がぎょっとした表情で上総の方を覗き込んだ。
一緒に貴史も重なった。
最後に菱本先生が身体を折り曲げて、尋ねてきた。からかい調子を隠しているかのように。
「おい、お前、もしかして彼女からもらったものを外に落っことしたなんていわないよなあ？」
一番心配しているように見えるのはこずえだけだった。貴史と美里の表情はさほど変わっているようには見えない。
勝負は、菱本先生とこずえの二人に賭けるしかない。

　上総は見切った。勝負に出た。

「菱本先生、申しわけありません。理由を聞かないでください。僕が悪かったと思ってます。僕がさんざんわがままを言い続けた天罰だと思ってます。だから反省します。だから、だから」
「何いきなり自己批判してるんだ？　顔色真っ青だぞ」
「ちょっと立村、あまり私の足のにおいかがないでよ」
　こずえの膝に頭がつくくらいに、上総は頭を下げた。
「さっきの裏門のところで、たぶん落としたんだと思います。今から、拾いに行かせてください。お願いします。ばかみたいなことを最後の最後でやらかすなん て、しょせん、僕の程度はそのくらいしかないと思ってます。菱本先生にばかみたく反抗していた自分が、馬鹿だとつくづく思います。だから、お願いします。 自分のわがままを押し通したりしません」
　菱本先生が背をそらした。上総も自分のことばが菱本先生にどういう感触を与えているのか、見当がつかなかった。かなり驚いていることは確かだろう。全くの大嘘をついている自分。全く反省なんてしていない自分。
　突き動かしているのは、降りなくちゃいけないという気持ちだけだ。
　後ろの方にいる連中が少しざわめき出した。
　女子の声で
「どうしたんだろ、立村くん、また切れてしまったのかもよ」
　男子の声で
「なんで立村の奴車から降りたがってるのか？　腹の具合でも悪いのか？」と。どう誤解されるだろう。二学期、どういう空気の中過ごすのだろう。バスの中の 不穏な空気。まんま、教室に流れるというのも覚悟の上だ。上総はただ、ひたすらに泣きそうな顔をこしらえながら繰り返した。
「お願いします。裏門のところまで走って戻ります」
「お前、こんなところで降りるのは無理だぞ」
　貴史も間に入って、ぶっとばす調子でかき回した。
「ばかやろう、何やってるんだよ。よりによってあれを落としたのかよ」
「羽飛わかるか？」
「わかるってよ。あんなに立村、宝物みたく扱ってたくせにな。ほんっと馬鹿野郎だぜ」
　美里の表情はあえて見なかった。壊れたくなかった。エスカレートすると、また泣きじゃくりそうだった。泣き落としだ。運転手さんを前に思いも寄らない「泣き落とし」をやってしまったこと。ハプニングだった。
　鼻をすすり上げ、もう一度、菱本先生の顔を見上げた。言葉を発しようとした、

「先生、こいつ何とかしてやろうって。こいつな、たぶん美里からもらったキーホルダーをさ、すげえ喜んでたんだ。そりゃ、落としたらパニックになるって。降りられねえのかなあ？」
　天の声なり。

「な、そうだろ？　立村」
　上総はゆっくりと貴史を見据えた。
　言葉を貴史にぶつければ、すべてが嘘になってしまう。
　嘘を重ねていけばもう二度と、友達でいられなくなる。
　あこがれていた、ふつうの友達でいられなくなる。
　自分の中の掛け金が外れそうでぎしぎし言っている。
　菱本先生を相手にぺらぺらやるのはかまわなかった。自分を最初から相手にしていない連中だったら、何をやったって後悔はしない。
　貴史と美里は別だった。入学式の時からずっと、仲のいい友達だったのに、自分が受け入れられないというただそれだけで、裏切ってしまうなんて。首を締め られたら息が苦しくなるんだろう。言葉が途切れてしまうんだろう。本当は自分が何を考えているか、いやというほと分かっているのに。青大附中の居心地の良 さに甘えている自分がいる。
「羽飛、頼む」
　搾り出すのがやっとだった。美里は微動だにしなかった。上総が観察しなかったせいかもしれない。一緒に貴史が菱本先生の腕をゆすってくれた。
「あの、もしよければ、裏門まででしたら戻れますよ」
　ゆるゆるしていたバスが止まった。運転手さんが、いかにも聞いていましたよ、という態度で振り向いて、菱本先生に声をかけた。上総の方をそっと流すように見て、笑顔でだった。
「大馬鹿もんが。ったく、お前はほんとにガキだっていうんだよ」
　軽く頭を叩かれた。しばらく苦みばしった表情のままだった菱本先生は、「うん」
　と両膝を叩き、運転手さんに答えた。
「すみません。うちの馬鹿息子のために、ちょっと裏門まで戻ってもらえますか？」

　泣く寸前まで行っていたはずだった。力が抜けた。こずえの膝元に手がすべり、思いっきりはたかれた。
「なあに、すけべなことやってるの。ほんとあんたってガキだよ。なさけない！　立村、本当にあんた、泣きそうな顔してるよ」
「わかってくれればいい」
　ここで崩れてはいけない。自分に言い聞かせた。
　菱本先生にもう一度、演技をしなくては。
「ありがとうございます。ほんとに、ごめんなさい」
　苦い味のする言葉を搾り出した。咽がひりひりしてきた。振り返って窓から様子を見ると、バスはいったん大通りまででて、もう一度円錐の待つ裏門に戻るらしかった。
「裏門は、まっすぐ走ればすぐですよ」
　運転手さんのマイクの言葉に頷いた。美里の様子は全くうかがえなかった。貴史の
「ほら、俺に感謝しろよ」
と言わんばかりの鼻高々な顔だけがはっきり映った。

　こずえだけ胡散臭そうな目で上総の方にささやいた。
「立村、本当に美里のキーホルダーを落としたわけ？」
「でなかったら恥ずかしい真似しないって」
「あんた、本当にほんと？」
　じいっと見つめ返されて上総も答えに困った。
「だったらどうだっていうんだよ」
「ってかさあ、そんなにあんた、美里のこと、好きなわけ？　ごくごくふつうの顔して美里としゃべってたじゃない。キーホルダー落としたくらいでそんな慌てるのってどうかと思うよ」
「そんなわけないだろ！」
　ぼろが出るのはまずい。会話をシャットアウトすると、上総はバスが留まるのを待った。もう一度廻ってきた場所には、白い円錐形のオブジェが並んでいた。道を示すように点点と並んでいた。一方通行の道のりだった。
「この辺か？　落としたところは」
「そうです」
「もし見つからなかったら、あきらめて戻ってこい。他のみんなにちゃんと謝るんだな」
「はい」
　小路に入る寸前のところで、バスが留まった。
　菱本先生の小言を聞き流して立ち上がった。上総の方を見ながらげらげら笑う集団が後ろにいる。
「なあに、ばかやってるんだよ、立村の奴」
「あいつもやっぱり、惚れてる女には弱いんだなあ」
「美里ちゃん、愛されてるよね」
　いつもだったら聞くに堪えない言葉ばかりだろう。気が狂いそうになる言葉だろう。もう二度と、戻れないこの世界。評議委員としてのプライドを捨てた瞬間。頭の中をよぎる美里と貴史とのおしゃべりの時。すべてが終わった、そう思った。
　タラップに立ち振り返った。運転手さんはやはり、休憩所の時と同じ笑顔だった。ありがとうと言いたかった。遮られた。
「降りたらバスは、まっすぐ、表門から入りますからね。まっすぐですよ」
　急いで、裏門に入れということだろうか。
　上総は頷いた。ポケットには財布だけ忍ばせていた。空気がぼわっと暖かくまとわりついた。
「わかりました。ありがとうございます」
　ドアが折りたたまれた。飛び降りた。
　振り返らなかった。ネクタイが肩に流れていく。走り出した。同時に後ろの方のバスがゆっくりとバックして、とろとろと走り出しているのがわかった。左側 を通り過ぎていった。わあっと窓からかすかなざわめきが聞こえた。上総の名前を呼ぶ声も聞こえた。上総はひたすら、丈の長い雑草と円錐に囲まれた歩道を走 り抜けた。

その十五　明星美術館でのよしなごと

１　探し探して

　雑草が緑に生い茂る道。白い円錐形のオブジェが指し示す場所は直線、百メートル先だった。最初の五十メートルを全速力で走ったのはいいが、クラスで四番 目の中途半端な脚では無理だった。いったん呼吸を置いて走った。バスはすでに見えなくなっていた。ようやくたどり着いた煉瓦畳の道に入る。向かって左側に は芝生が滑らかに伸びていた。菱本先生が話していた通り、虹色のビニールシートを敷いて語らっている家族連れが目立った。大きな風見鶏がにらんでいる鋼色 のゲートをくぐり、上総はまず、四人のかたまりを捜すことにした。
　銀縁めがねをかけている、痩せ型神経質そうな男性。
　同い年の女子三人。
　見つかりそうだった。
　芝生を一通り巡った後に、美術館に入ろうと決めていた。幸い、貴史から借りた五百円があるので入場料はなんとかなる。時計を見ると、ちょうど十一時半を少し過ぎた頃だった。運転手さんがたぶんわざと時間稼ぎをしてくれたのだろう。
「時間がねえよ……」
　煉瓦畳からざくざくと、上総は芝生に乗り込んだ。奥には白い倉庫のような建物がどかんと建っていた。玄関のガラスが光を跳ね返していた。美術館に来たという気がしない。工場見学で行ったことのあるパン工場を思い出した。

　四人、四人、と人の顔をのぞき込んで早足で廻った。たくさんいるわけでもないのにどうしてだろう、見つからない。バトミントン、ドッチボールに興じている親子連れに頭を下げながらすり抜けた。
　早く見つけないとまずい。ゆっくり遠回りしたとしても、バスなんだからそろそろ到着している頃に違いない。もしかしたら降りているかもしれない。菱本先 生を始め、貴史たちは猛烈に血を昇らせているのは想像に難くない。狩野先生たちを見つける前に捕まって怒鳴られるのだけは避けたかった。　　頭の中から血 が退いていく。わんわん響き出す。
　すべては上総の頭の中で出来上がった想像でしかないと、わかっているし言われるに違いない。菱本先生の言う通り、自分だけで決め付けているだけで、他の人たちは何にも思っていない。
　切って捨てられるだろう。誰もわかっちゃいない。自分の中に響く言葉だけを信じて計画を立ててきた。
「どこ行ったんだよ。いったい」
　独り言だけが増えていく。薄いジャケットが暑苦しくて脱ぎ捨てたかった。こんなんだったら、脱いでバスの中に置いてくればよかった。
　脱ごうとした。左のポケットが重たいのにはっとした。手を入れた。金具らしきものが、人差し指にひっかかった。

そっと引っ張ってみる。ちょうど握って隠れる程度の、小さなもの。黄色い線の入ったタータンチェックがちらついた。
一緒に思い出すものは誰かの髪飾りだろうか。ドアのノブのようなものだった。
切符に似た長方形の、プラスチックだった。もし落としていたら、名前をローマ字で彫りこんでおくことなんて、できやしないだろう。鍵をぶら下げておくことなんてできやしないだろう。
まだ美里に礼を伝えていない。
上総はキーホルダーをひっぱりだして、目の前にぶら下げた。手鏡のように手のひらを見つめた。中指にちょうどぶら下がったままの、タータンチェックキーホルダーがぴたりと納まった。

もしも菱本先生が怪しんで尋ねてきたら、本当に外から落とすしかないだろう、とは思っていた。そんなへまは絶対にしないと決めていた。すぐに外へ手を出して、振りをした後に握ってポケットに戻した。
こずえには見抜かれそうだったけれども、最後までごまかせた。そんなへまするもんか。
「誰が落とすかって！」
思いっきり叫んだ。
弁当を広げている群れががやがやしているせいか、誰も気にとめない様子だった。声はふかふかした雲にすべて吸収されてしまったのかもしれない。夏の光線に溶けてしまったのかもしれない。頬に降りかかる午前の太陽。まぶしかった。白かった。気持ちよかった。
もう一度廻ってみていなかったら、今度は中に突撃だ。

四人だけというのにこだわったのがまずかったのかもしれない。もしかしたら家族の人もいるかもしれないし。
今度は早足で敷物の間を縫っていった。美術館の中に入ったとは、どうしても考えられずさらにいうなら、中の喫茶店でお茶をするとも思えなかった。絶対この中にいて、お弁当を広げようとしているはずだ。素早く予定変更を行い、上総は呼吸を整えた。
もう一度芝生の上を眺めた。
左手をぎゅっと握り締め、目に力をめいっぱいこめた。
半径五メートル、十メートル、十五メートル。何度か見渡していると、なんとなく頭の片隅に赤いものがちらついた。視界の隅、だろうか。気になって、身体 ごと斜めにねじった。一番奥に、神社の鳥居が右半分壊れたようなものが飾られていた。現代美術の最たるもの。上総にはその良さがたぶんわからないもの。門 に納まるように、家族連れらしき一組が座り込んでいた。滑り台の変形のような赤いオブジェ、影にひっそり背中を向けている集団がいた。
めがねをかけたシャツ姿の男性ひとり、同い年の女子が三人、そして、花柄のふわふわした服を着た女性が、ひとり大きなバスケットを開こうとしていた。
ひとり、ふたり、さんにん、よにん……、五人。
合計五人だった。

間違いない。
見つけた。間に合った。
片足をうまく使い、上総は弾みをつけて走った。足下の芝がつるつるする。転びそうだ。

２　我、目的を完遂せり

人のいないところをわざわざ選んで座っているくらいだ。誰かが駆けて来るのを見たら、そりゃ驚くだろう。
女子のひとりと、目が合った。
バスケットを開いている花柄ドレスの女性にしがみつくように、見つめ返された。驚かせてしまったようだ。
息を切らせながら、上総は敷物の芝生に、片膝立ててしゃがみこんだ。
「狩野先生、いきなり申しわけありません。２Ｄの立村上総です」
言ったところで咳き込んだ。気が付かない振りをしていた心臓が、ぱくぱく言い出した。右手で雑草を握りしめ、振り返った銀縁めがねの男性に向かい表情を伺うのが精一杯だった。
「立村くん、大丈夫ですか。顔色が悪い」
かなりびっくりしているようだったけれども、狩野先生の口調は落ち着きを失っていなかった。女子三人が上総の方をにらみつけ、そそそっと隅の方に場所を ずらしていた。なだめるように、花柄のドレスを着たあどけない感じの女性が肩をぽんぽんと叩いていた。大丈夫、大丈夫という風に。
「そういえば、二年Ｄ組の宿泊研修は、今日が最終日でしたね」
「今からうちのクラスの連中が、美術館に来ます」
上総は白い建物に指を差しながら続けた。
「今ならまだ、間に合います。場所を移ってください」
女子たちの様子はさらに不安そうなまなざしに変わっていった。三人のうちひとりは顔を見たことがあったけれども、あとの二人は見覚えなかった。たぶん上 総のことも知らないのではないかと思った。ぶしつけにじろじろ見るしか、今は出来ないのだろう。女子三人の視線が痛かった。寄るな、近づくな、言いたげに かたまっていく。
「立村くん、それは菱本先生からの指示ですか？」
「僕自身の意志です」
初めて、狩野先生の表情が険しく変わった。
銀縁めがねを軽く押し上げ、外した。めがねなしの狩野先生の顔を初めて見た。いつか雑誌で見た若手歌舞伎俳優の、化粧をしていない顔にそっくりだった。つるんとして、それでいて真摯なまなざしと薄い唇。
「かのこ、うちのお嬢さんたちを車に乗せてくれないか。場所替えだ」
花柄ドレスの、ふわふわパーマをかけた女性ははっとしたように狩野先生を見つめた。片手でバスケットに、出しかけていたサンドイッチや揚げ物などをしまい始めた。手伝おうとする女子

のひとりに、やさしく手を触れ
「さ、早く行きましょ」
と笑顔でささやいたのが聞こえた。
「僕もあとで行く」
　言葉少なに指示をした後、狩野先生はゆっくり上総の方に向き直った。
「立村くん、菱本先生の合意あってのことですか」
「いいえ、今、裏門から無理やり入ってきましたけれど、Ｄ組の人間は表門から入ってくるはずです」
　急に変わった狩野先生の口調が怖かった。
　かのこさんという女性に指示を出して、引き上げる準備をしていたということを考えると上総の読みが異なっていたわけではないだろう。花柄ドレスのかのこ さんは、上総の方に心配そうな視線を投げながら、バスケットを抱えた。女子三人はみな、靴を履いてぼおっと立ちすくんでいた。言葉は出てこなかった。しゃ がみこんでいる上総を、犬じゃないかと言いたげな顔で眺めていた。退学するのがどの子なのかはわからない。べたっと三人で、おびえている風にくっついてい る。
「では、かのこ、頼むよ。敷物だけは僕が持っていくからね」
　かのこさんは黙って頷き、
「さ、行きましょう」
と女子三人の背中を押した。早足で離れ、五メートルくらい離れたところで一気に走り出した。指差しているようすだと、近くに車を駐車しているのだろう。

　黄葉の近辺ではかすかだったせみの声も朗々と響き渡る。女性の気配がなくなり、上総と狩野先生の二人だけが向かい合っていた。言うことを伝えた以上、上 総はもう何も口にすることができないままだった。力が抜けていく。膝をついていたせいか、緑色の汁らしきものがスラックスにべったりくっついていた。つま 先をぺたりとつけ、膝を抱えたまま、狩野先生の言葉を待った。汗が渇いて頬がひりひりした。
「立村くん」
　一言、ゆっくりと発せられた。
「どうして、僕に連絡しようと思ったのですか？　菱本先生にはきちんと話をしておいたはずですが」
「知ってます。狩野先生がうちのクラスと合流するのを迷惑だと思っていることも、わかってます。うちの菱本先生に通じてないんです。どうしてかわからない けれど、絶対にみんなで楽しい思い出を作ってやろうって、そればかり考えているようでした。僕もその辺はよくわかりません。でも僕がＡ組の人たちだったと したら、絶対に耐えられないことだから」
　狩野先生は何度も頷きながら聞いてくれた。
「後で菱本先生にはあやまります。覚悟はしてます」
「覚悟って？」

例えば停学とか、と口にしようとしたが出来なかった。
大げさすぎる、と言われそうで怖かった。
狩野先生のことを、二年次数学の授業を通してしか知らないわけなのだから、本当のところは分かる由も無かった。菱本先生よりはずっと、上総と同じ感情を 理解してくれるんじゃないかと信じてきた。すべての思いをぶちまけてしまったら裏切られた時、何倍もの打撃を受けそうだった。あとはたくさんの罵声を待つ だけだとわかっているだけに、言い訳は絶対したくなかった。
「後悔はしてません。ありがとうございます」
今度は狩野先生が逃げる時間がなくなってしまう。上総は立ち上がろうとした。狩野先生がやっと表情をやわらげた。一学期、数学の小テスト後呼び出されて、お茶を出してくれた時と同じ微笑だった。
「立村くん。誉められたやり方ではないけれど、気持ちは僕が彼女たちの分も受け止めます。今日のことは、自分で責任を取る覚悟を持っていますか」
「もちろんです」
今度こそ、停学、退学という言葉を使おうとした。
「立村くん。君はこれから、鋭すぎる自分の感覚を飼いならしていくすべを、覚えていけばいいんです。数学の問題と同じです。自分の感覚を大切にすることと、守るために問題の答えを暗記してゆくこと、それは一緒なんですよ」
「感覚を飼いならす」
「自分の中にどういう感情があるか、じっと見つめていけばいいんです。君にはいわゆる『ふつう』の人が持っていない、フィルターのかかっていない感情を受 け止める能力が備わっています。だから、来てくれたんでしょう。今度はもっと『ふつう』の人たちを刺激しないような方法を見つけるためのマニュアルを覚え ていけばいいんです。時間は掛かるけれど、大切なものを守るためには少しずつ」
「先生、いつ、そういうことに気付かれたんですか」
「そうですね、大学を卒業する頃かな」
狩野先生は片手を差し出した。わからずぼんやりしていると、上総の右手をそっととって、軽く握手した。
「ありがとう」
幽霊になってしまったようだった。足下がおぼつかなくなる。痺れた感覚が残っていた。上総はもう一度狩野先生の目をじっと見つめ、一礼した。背を向け、ゆっくりと建物に向かって歩いていった。
もう、走る必要はなかった。

３　『楽屋裏』

裏口からも入場券を買うことができた。たぶん問題ないだろう。一応は館内に入ってうろうろ

するようなこともバスの中で聞いていたし、ということで上総は三百円払いロビーに入った。
　もう表門からみんなが入ってくる頃だろう。上総のいきなりの逃亡劇に絶句しているか、もしくは激怒しているか。大目に見てくれるなんてことだけは、絶対 にないだろう。あとで菱本先生にけじめをつけなくてはならない。言い訳しないで怒鳴られよう。念じながらざっと油絵をながめていった。壊れた鳥居のような オブジェのイメージで、てっきりわけのわからない現代美術の集合体かと予想していた。
　飾られている絵はほとんどが油絵で、花やら建物やら、ごくごくわかりやすいものばかりだった。油絵は遠くでみるときれいだと思えるのに、どうして近くでみると汚く感じてしまうのだろう。貴史や美里には言ったことがない、正直な感想だった。
　ロビーには、青大附中の制服を見かけなかった。

　ひとりの画家中心とは聞いていた。さすがに埋め尽くせなかったのだろう。思っていたよりも違う名前の画家が多かった。ささっと眺めるだけにした。芝生の上には人が集まっていたのに、館内はこうも静かなのだろう。
　肩に引っかかったままのネクタイを下ろした。
　座っている館員の女性が、不思議そうに上総の顔を眺めていた。外は暑いのになぜひざ掛けをしているのだろう。居心地悪くなってすぐに離れた。

　もう、狩野先生たちは車に乗り込んで移動しているだろうか。
　かのこさんという、ふわふわした花柄ドレスの女性は、狩野先生の奥さんなんだろうか。
　Ａ組のおびえきっていた女子たちは、自分のことをどう思っただろうか。
　なによりも、Ｄ組の連中はいきなり飛び出した自分のことを、どう受け止めているだろうか。

　さあっと絵を流して観ている時に感じるやすらかな空気が心地よかった。絵が好きな人はもっと詳しいことを知っていたり、説明したり、感じたりするのだろ う。貴史や美里はきっと、感じたことを語りまくったりするのだろう。そのたび上総は落ち込んで、ひとりで美術書をひもといては自己嫌悪に陥っていた。どう してこいつらと同じ感覚で、絵を見られないのかわからなくて、悔しくて。
　ただぼんやりと穏やかな空気を感じているだけでよかった。
　印象派だとか現代美術だとかどうでもよかった。
　フィルターのかからない感情を見つめていたかった。

　二階展示室の階段を上がり、上総はぼんやりと眺めていた。一階がありがちな風景画中心だったとするならば、人物や動物、馬などのわかりやすい絵が多かった。上総に合うのはこの空気だろう。
　少しゆっくりめに歩いていった。でも歩は留めない。
　真っ黒い馬の全身図、ピアノを弾いている金髪の少女、習字をしている少女。女性を描いたも

のがほとんどだった。社会科で鹿鳴館について習った時、見せてもらった写真に載っているようなドレスをみな纏っていた。
　畳三枚分の大きさで、金の派手派手しい額縁に囲まれている一枚の絵が、突き当たりの展示壁につるされていた。一番のメインらしい。ここにもひざ掛けをかけた館員が座っていた。
　足が止まった。
『楽屋裏』と、金の文字が掘り込まれていた。
　吸い込まれるように見つめていた。

　どのくらい時間が経ったのだろう。
　呼び戻す声が聞こえた。聞き覚えのある、心が痛くなりそうな声だった。
「この絵が好きか」
　振り返れずに、上総は頷いた。
「『楽屋裏』はこの画家の最高傑作として有名な作品だ。ある日本舞踊家の舞台裏にて、『幻お七』という舞踊を観賞した時のものだそうだ。どういう舞踊か、知っているか？」
　もう一度頷いた。
　うちに並んでいた小説のひとつに、「近松物語」が入っていて、かなり前に読んだことがあった。惚れた男に会いたいゆえに放火した挙句、火あぶりの刑に処せられた八百屋お七の物語を、あらすじだけは知っていた。
「ばかばかしいことだとはわかっていても、お七は惚れた男のために禁じられたやぐらの太鼓を叩こうとしたんだ。それがどんな罪になるかも知らんうちにな。 結局それで火あぶりの刑になるわけだが、お七は後悔しなかった。そこまで思いつめることのできるお七はすごいことだと思う。だがな」
　後ろの人物は言葉を切った。近づいてくる熱気のようなものに身体がじわじあわした。
「火事のために家族を失った人たち、なによりもお七を育ててきた家族の悲しみはどんなものだったか想像つくか？　一時の激情で自分を滅ぼし、周りの人たちを傷つけ、それが美しいだけですむと思うのか？」
　やっとの思いで言葉を搾り出した。
「停学は、覚悟してます」

　肩を掴まれ振り返った瞬間、ふわっと身体が浮いたようになり、腰からすとんと落ちたことは覚えている。頬に響いた音と耳に響いた激音は、入り交じってい て何がなんだかわからなかった。かろうじて両手で身体をささえ見上げた絵は、水色と赤の交互に入った衣装と、時代劇の鬘をかぶっている役者が、羽子板を抱 きしめて崩れ落ちている図だった。真横からのアップで描かれていた。それを囲む黒子が三人ほど。まだ響いている耳鳴りを押さえるようにして、上総は菱本先 生の顔をにらみつけた。上げた手はまだ震えているようだった。ぎゅっと唇をかみ締め、上総の腕を引き上げた。
「来い、弁当はこっちだ」

仰天している館員の女性に「すみません、うちの息子なんで」と頭を下げ、菱本先生は上総を引きずるように階段まで連れて行った。横顔をのぞいた時、鼻をすすりあげるように天井を見上げているのにぎょっとした。

４　それぞれの事後処理

その後のことはほとんど覚えていない。館内からひっぱりだされた後に、無理やり頭をクラス全員の前で下げさせられ、弁当を押し付けられたことくらいだろ う。とにかく、泣かなかったことだけは確かだった。青大附中の制服姿の集団。うろうろと芝生の中をさまよい、それぞれがベンチ、敷物を敷いたりして弁当を 広げていた。塩焼きチキンがたっぷり入った、ほかほか弁当だった。サービスに煎茶のパックもついていた。

誰の輪にも入る気になれず、貴史とも顔を合わせられず、ひとりでベンチに座り膝に広げた。頬がまだひりひりして、奥歯の感覚が鈍くなっている状態で、言 い訳するのもみっともなかった。さすがに菱本先生は寄ってこなかった。走り回ったせいかおなかはめちゃくちゃ空いていた。さっそく食べることに専念した。

クラスの連中たちの反応を見るに、ある程度どういう目的で上総が動いたのか、想像はついていたようだ。決して腹を下して間に合わないとか、本当に美里のくれたキーホルダーを落としたのか、そういう理由ではないということに気付いているらしい。

証拠に、あちらこちらから

「Ａ組、やっぱり逃げられたな」

「立村って思ったより足が早いんじゃないの」

割り切った会話が聞こえている。

その辺は安心した。菱本先生も気付いてくれたらいい。どうせ来週から一週間くらい、停学だろう。もしかしたら高校に推薦してもらえないかもしれない。

きつい一発を食らったのにも関わらず、頭はすっきりしていた。

めずらしくひとりぼっちでいるのに、淋しくなかった。

こっそり貴史たちのグループの様子を見ると盛り上がってはいるようすだった。貴史だけがむすっとして割り箸を噛んでいる。上総のたくらんだことを見抜いている可能性が高い。もう、友達でいるのは無理だろう。前から重々覚悟していたことだ。

もうひとり、気になる美里たちを探す。

女子グループは思ったよりも細かく分かれていた。最近の傾向として、美里はこずえと奈良岡彰子、その他数名と遊んだりすることが多いようだ。女子同士派閥が出来てきているようだった。今日のところは上総に背を向ける格好で、こずえと話をしている。

こずえが

「立村のことを美里は認めているんだよ」

と言ったけれども、今回の逃亡劇でその思いも覚めただろう。同じく、覚悟の上だった。

上総は弁当の蓋を閉じて、ごみ箱に捨てた。カラスが残飯を漁ろうと二羽跳ね回っている。つ

つかれたくないので場所をずれた。乗車時間まで、ぼんやりとしていたかった。

「りっちゃん」
　振り向くと、南雲が相変わらずさんさんとした笑顔で立っていた。
　こいつだけだ。上総のことを自然なまなざしで見てくれる奴は。
　上総は表情を変えず、答えず、じっと見上げた。
「昨日は、ありがとさん」
「目的は果たせたか？」
「うん、もちろんだよ」
　照れのない、あっさりした答えだった。
「じゃあ、定期入れ見せろよ」
「ほいな」
　ポケットから黒い定期入れを取り出し、すいと渡してくれた。
　見た目、気のせいか薄かった。
　開くとやはり四月現在まだ乱れていない格好の南雲写真が納まっていた。緊張したような、歯を食いしばった様子。表側にはバスの定期券、これはおととい確認したことだった。
　つぎにカード入れを指先で触ってみた。
　貸しレコード店のメンバーズカード、テレホンカード、名刺型カレンダー、たくさん紙切れは入っているけれども、もっと膨らんだものは見つからない。
　なぐちゃん、まさか。
　あの闇の中で。
　でも外だって、まさかだよな。
　思わず奈良岡彰子の姿を探してしまう。すぐに南雲の顔をうかがってしまう。最後にもう一度カード入れの上をなぞってみるが、ない。
「なーに、悩んでるのかな、りっちゃん」
　いたずらっぽく南雲はしゃがみこんで上総の顔を横からのぞいた。
「悩んでなんて、ないけどさ」
「あるべきものがないって顔、してるなあ」
「まさかお前」
　見つめすぎて手がお留守になった。ゆるんだ指先にぎゅっと押し付けられるものがある。かしゃりと、ビニールっぽい音がした。
「大丈夫、未使用さ」
　両手で手の中の、正方形包を覆い、上総は楽しそうに手を振る南雲を見送った。もちろん定期入れは取り返された。残っているのは透明ビニールに包まれた丸 いゴムだった。俗にいうコンドーム。持っているのを見られたらたぶん、違反カードの一枚二枚は切られるだろう。評議委員の面目も丸つぶれだ。
　ひとりでよかったと思う。

　そっと左ポケットにしまいこんだ。

、集合の時刻となり、みなそれぞれにバスに乗り込んだ。全員整列の後に乗り込むやり方でなくて、本当によかったと思う。特にとんでもないことをやらかした後だけに。上総が戻ってくると、すでに席についている連中がひゅうひゅうと騒ぎだした。
「おいおい、お前なあに、発作起こしてるんだよ！」
「立村ストレス溜まりすぎなんじゃねえの？」
「ったく、常識外れることもたいがいにしろよなあ」
　声ではっきり聞こえる分は潔く受ける
　まだこずえはもどってきていなかった。すばやく窓際に座り込み、窓を眺めていた。運転手さんの姿もまだ見えない。貴史も、美里もいなかった。
　次に戻ってきたのは菱本先生だった。殴った後というのもあってか、言葉は少ない。
「大丈夫か」
　じっと見下ろす感じだった。どう答えればいいのだろう。頷くしかなかった。
「すみませんでした」
「まあいい」
　そのうちにまたひとり、ひとりとばらばらに戻ってくる女子の集団がいた。たぶん中に美里がいたのかもしれない。こずえが帰って来たところをみると。でも 声がなかった。こずえだけが腰を浮かせて貴史、美里たちに身振り手振りをしているようすだった。背中で大体わかるものだった。
「もう、どうだっていいでしょ！」
　一言だけ美里の声が聞こえた。

　最後に運転手さんが戻ってきた。初めて上総は人と目を合わせることができた。ちらりと上総の方を見てほっと安堵の表情を浮かべた。
「すみません」
　同じことばかり言っている。自分の身体は目に見えないロープで縛られている。さらし者のようだった。
「では、青大附中までノンストップで行きます」
　再度、アナウンスが流れた。エンジンの掛かる音。窓から流れる風、クーラーの入り交じった埃っぽいにおい。やたら汗臭い空気。行きのバスにはないものば かりだった。上総はもう一度、貴史と美里に目を向けた。もう一度、振り向いてほしかった。でも二人はなにやら深刻そうに語り合っている。顔を見せなかっ た。表情も隠したままだった。菱本先生は目を閉じているままだった。
「ほら、一口飲みな」
　ひょいと、差し出してくれたのはこずえだった。
　ちいさなオレンジジュースの缶にストローを差し込んであった。

「まだ私口つけてないからね」
　こずえは制服のリボンを結びなおすしぐさをしながら、うんと伸びをした。その間一気にすすって、隣りに返した。
「ありがとう。さっきはごめん」
「あやまるのは別の相手でしょ。ったく、あんたってほんと」
　ガキなんだから、と続かなかった。
「得な性格なんだから」
　意味がわからなかった。その後黙ってしまったこずえは、ストローを抜いて直接ジュースを一気飲みしていた。甘いものがちょうどほしかった。ふうっと力が抜けていき、窓際に頭を乗せたまま上総は目を閉じた。

「立村くん、立村くん」
　今度は夢ではなかった。だるくなってやたらと頬が腫れた感覚が残っていた。目やにがたまっているようだった。
「いいかげん目を覚ましなさいよ。ほら」
「清坂、氏？」
　窓からのぞくと、すでに二年Ｄ組の連中はバスから降りて一同整列の準備をしていた。見慣れた青大附中の真っ白い校舎が見えた。わかっているけれど怖い隣りに目を移した。
　美里が、さっきまでこずえのいた席に座っていた。
「古川、さんは？」
「降りたに決まってるでしょ。ほら、最後の挨拶と確認は評議の仕事だって、立村くん言ってたじゃない」
　ぴしばしと責め一方の言葉で叩いてくる。
　そうだった、評議委員として最後に、バスの中をチェックして、ごみが落ちてないかを調べるようにという風に組み込んだはずだった。言い出したのは上総自身だった。
「あのさ、清坂氏」
「あとで言い訳たっぷり聞かせてもらうからね」
　言おうとしたのを遮って、美里は一番奥の席をとんとんと叩いた。
「誰よ、こんなところに缶置きっぱなしにする人。南雲くん？　ああ、今度はなによ、空のペットボトルなんて持ってこさせるからみんな捨ててるじゃないのよ。全く、何考えてるのよ、本当に」
　独り言、というよりも、一人で上総に聞かせるようにしゃべっている。嫌味の嵐だった。
「ごめん」
「わかってるなら、早く手伝ってよ」

　へばりついた体を起こして、上総は男子側のごみを拾って歩いた。また南雲の定期入れが落ちていないかもチェックしながら、そっと運転手さんの側によった。停止させて、エンジンを一

度切っている様子だった。
「あの、すみません。さっきは」
　美里に気付かれないように、小さな声で、
「うまくいきました。ほんとに、感謝してます」
　運転手さんも帽子を脱ぎながら、ちらりと美里の後姿を見つめつつ、
「今回の実感を一言で言うと？」
　一呼吸おいて答えた。
「我、目的を完遂す」
「お見事」
　今度は上総の方から手を差し出した。ぱちっと音がした。やわらかい笑顔がいつのまにか、堂々とした男の共感に変わっていたかのようだった。ぎゅっと握り締めた。
「がんばれよ」
「はい」
　ビニール袋のごみをぶら下げて、上総は素早くタラップを降りた。待ちかねている菱本先生は戸惑ったようすだった。
「先生、バス内のチェックは終わりました。あとは点呼だけです」
「わかった、早く数えろ」
　いつものように男子連中の肩へ手を置きながら「いち、にい、さん」と声を出して数えていった。
　貴史の肩に触れた時、何か言われるかと、緊張した。
　下を向いたまま答え一つ返さなかった。
　点呼ＯＫの報告をした後、上総はすぐに整列した。貴史のひとつ前だった。

　皆疲れ果てていたこともあり、菱本先生の挨拶は一言
「お疲れさん。明日はちゃんと学校に来いよ」
だけだった。みな、自転車を置きっぱなしにしていたのでそこに群がっていった。上総も向かおうとした時、ぎゅっと肩を捕まれた。
　貴史だった。
「なんで落としてねえキーホルダー、落としたなんていったんだ？」
「ごめん。今はちゃんと持ってるから」
「そんなこと聞いてるんじゃねえよ。立村。お前、俺に一体何させようとしたんだ？　お前、俺に言ったよな。ほんとの目的が美里と仲直りするためだって」
　大嘘だった。言い訳できない。上総は黙った。
「要はお前、俺に嘘ついたってことだろ。答えろよ」
「その通り。殴ったっていい」
「ばかやろう」
　貴史の手がネクタイを掴んだ。苦しくて前かがみになった。されるままでいようと今は決めて

いた。
「じゃあなんだよ。本当の目的って」
「ごめん、それはいえない」
「なんで言えねえんだよ！」
　上総は数回ひっぱりまわされた、突き飛ばされた。抵抗はしなかった。周りに野郎連中は見えなくなっていた。女子の数人が遠巻きに眺めているだけだった。仲裁に入られないうちに一発殴ればいい。立ち上がった。
「言えないんだ。覚悟はしてる」
「ったく立村のばかやろう。何考えてるんだよ。俺、お前の考えてることが全く読めねえよ！」
　手が緩んだ。怒鳴った。
「どうして何に言わねえでなんでもやっちまうんだよ！　ほんとお前、停学になっちまうぞ」
「覚悟の上さ」
「俺が手伝えねえと思ったのか？」
「本当にごめん」
　鸚鵡返しにくりかえすだけだった。自分の顔が能面になっていくのがわかった。貴史はあきらめたのだろう。もう一度
「ばかやろう！」
とつぶやき、自転車置き場に走っていった。しばらく立ち止まったまま上総は見送っていた。
　ちょっとだけ信じられない言葉が混じっていて、ショックでふらついていた。
　ほんとお前、停学になっちまうぞ。
　貴史から飛び出した言葉は絶交宣言ではなかった。たまらなく羽飛貴史のままだった。上総の覚悟をあっさりと遠のけてしまう貴史が怖かった。

その十六　あとかたづけに関するよしなごと

１　戦後処理前夜

　朝が来るのが怖いと思ったのは、今回が初めてではない。小学校時代の遠足や修学旅行の前夜、卒業式後にやらかした決闘騒ぎの後、自分で秘密にしていたこ とがあからさまにクラスでばれてしまった時。本条先輩の言う通り、自分の過去は本当に恥ずかしいものばかりだった。今まではなんとか、許してもらえてい た。気付いているのかいないのかは判断できない。知らないふりをしてくれた。
　羽飛貴史も、清坂美里も。
　今回ばかりはそうも行かないだろう。
目の前で堂々と、貴史の友情を利用し、美里の想いを逆手に取ったというわけだ。もし自分が同じ立場だったらどうするだろう。絶対に許せないだろう。
　理解してもらえないのはわかっている。
　仕方ないことだってこともわかっている。
　上総自身の感じ方にあるとも気付いている。
　悔いる気持ちだけはなかった。
　始業式の後で菱本先生から、停学、悪ければ退学の処分が下されるだろう。まさか美術館で泣きながら殴られるとは思っても見なかった。気に食わない先生だけど、驚いた。

　反省するくらいだったら、あんなに細かく計画なんて立てやしない。
　運転手さんに告げた言葉に変わりはない。
　我、目的を遂行す。

　上総はノートに「我、目的を遂行す」と五十回書き記した。
　書いているうちに波がだんだん落ち着いてきた。開け放した窓から見える空に、星は全く見えなかった。青潟の空は曇っているからだろう。突き刺すような星の光も、貴史、美里、菱本先生たちのまなざしも、今は忘れていられた。

２　一年生廊下にて

　目を覚ますとすでに朝七時半だった。寝坊してしまうとこだった。大急ぎで着換えて自転車に乗った。始業式は午前中で終わる。四日前に準備しておいたかばんには、自由研究ノートと宿題一揃いが入っている。
　疲れてすぐに寝てしまったから、あの後学校からうちに連絡があったかどうかはわからない。

父も何も言わなかった。停学になったらどちらにせよ、学校から連絡が入るだろうし、叱られるのはそれからでもいいと思った。

　チャイムが鳴る寸前に校門をくぐった。
　二年Ｄ組の教室に行く前に、わざと一年生の教室を通った。
　うっかり忘れるところだった。「黄葉山オリジナルキャラメル」を一箱だけ購入しておいた。杉本梨南への土産だった。さすがに教室の中に入る気にはなれな いので、廊下にうろついていないかをざっと見た。杉本の場合自宅がすぐ近くなので、ぎりぎりに登校することが多いようだった。今日はすでに教室でノートを 開いていた。宿題だろうか。
　まあいい、あとでいいか。
　立ち去り、隣りのクラスの前を通り過ぎた時だった。
「ちゃん、泣かないでよ」
「羽飛先輩ならまだチャンスはあるって」
「そうよ、だって清坂先輩はあの立村先輩と付き合っているんだから」
「元気出して！」
　一年の女子が通路側でなにやら固まっている。上総に気付いてぴょこんと頭を下げ、今度はひそひそ声に変わった。三人の女子、うち一人は激しくしゃくりあげていた。ハンカチを渡しながら他の二人は顔を見合わせつつ、なんども同じことをくりかえしていた。
「羽飛先輩以上の人、絶対いるって！」

　もしかして、羽飛の奴、一年生の女子に断りの連絡を入れたんだろうか。
　なぜ俺の名前が出てくるんだ？
　清坂氏が羽飛と付き合っているという噂は昔からのものだったけどさ。
　俺が清坂氏に振られるであろうってことは、明白だからだろうか。
　覚悟はしているって何度もくりかえしているけれど。

　このままエスケープしてしまいたい気持ちを押さえつつ、上総は二年Ｄ組の教室に向かった。Ｄ組の教室は奥の方だった。急がないと間に合わないのはわかっているけれど、ゆっくり歩いた。

　まだ何人かが廊下でしゃべりつづけている。外から見える景色はなんとなく覚めた緑色がちらちらしている。かすかにせみの声が聞こえ、突然風が窓際の埃を撒き散らした。軽く咳き込んだ。
　Ａ組の教室を覗き込むと、ひとつ、後ろに主のいない席が見えた。
　まだ狩野先生も、評議委員も来ていなかった。

３　虫たちの見たあの日

　いくらゆっくり歩いても、結局つくのは一緒だった。二年Ｄ組のドアを、ゆっくり開いた。思い切って顔を上げた。一瞬、静まり返ったのは予想ついていた。貴史と美里の方はあえて視界に入れなかった。
　隣りの席にいる奴らと自由研究の手芸ものや絵を見せびらかしあっている中、通ると気まずそうにみな黙る。離れたとたんひそひそ声になる。わかっていても、ひりひりする。
　金沢の席が真後ろだった。まだ南雲は来ていなかった。礼儀として一応、
「おはよう」
と声をかけると、気兼ねない返事が戻ってきた。
「ほら、これ見てよ」
　一緒に覗いている水口が、にっこりして指差した。
「金沢、すごいんだ。一日で描いたんだって。ほら立村、昆虫の絵だって」
「どれ、どんな感じなんだっけ」
　丸めたくせのついた画用紙を広げた。
　金沢は胸を張って、一言。
「今年の文集の表紙にしたいんだけど、立村、どう思う？」
　向かって左手に、アリ、コガネムシ、ワラジムシ、セミが、草木の陰に隠れて覗き込んでいる様子。虫特有のグロテスクなリアルさは感じなかった。柔らか く、愛嬌があった。右手に黄緑色の山々。たぶん黄葉山の景色だろう。こまやかだった。ふもとに小さく黒い斑点とグレーの線がちょこちょこと入り交じってい る。
「テーマは、虫たちか？」
「うん。虫が覗いたうちのクラスのイメージってこうかなって思ったんだ」
　金沢は、画用紙半分を占めている大きなアリの親子を指差して、
「お弁当食べている時、きっと草葉の陰でアリとかワラジムシとか、虫たちが覗いているんじゃないかなって、思ったんだ」
「黒い点は、人間の集まり？」
「そうだよ。みんな、遠くから見るとちっちゃいんだ。」
　貴史を始めとする他の男子も集まってきた。覗き込みやいやい言っている。
「さすが天才画家の金沢」
　力をこめて貴史が背中を叩く。
「絵はわかんないけど、すごくいいと思うよ」
　上総も金沢に向かって、これだけ伝えた。
　ふと貴史と目が合い、すぐに逸らした。
　感情を読み取らないうちに、前を向いた。
「何無視してるんだよ」
　上総にだけ聞こえた声だった。すれ違い、席に付く前に一言だけだった。

４　戦後処理

　ドアが開いて菱本先生が入ってきた。昨日の今日とあって日焼けがかなりすさまじかった。赤黒い頬と腕。半そでのワイシャツに緑のネクタイ姿だった。髪型もきちんと整えている。やはり今日から学校が始まるのだと、あらためて感じる時だった。
「やあ、昨日の疲れは取れたか？　おはようさん」
「全然とれなあい」
　女子の数人が合唱した。
「なあに言ってるんだ。若いぴちぴちのくせして」
「先生、やらしい！」
「朝っぱらから全開で責めるのはよせ」
　元気一杯、機嫌よさそうだった。教室内に笑い声がぼわっとふくらんだ。
「まず、始業式までまだ時間は、十分くらいあるか」
　時計を覗き込んだ。壁にかかっている振り子時計の音がかつかつと響いていた。八時二十分を過ぎたところだった。
「それじゃあ、号令」
　菱本先生は上総の席に視線をやり、指を差して、促した。
　開始は上総が、終りは美里が、受け持っている。評議委員の義務だった。

　後ろのドアから誰かが入ってきた。南雲だった。
「先生、おはようございまっす」
「南雲、遅刻だぞ、ったく、お前規律のくせしてなんだそりゃあ」
「遅刻じゃないっすよ。今、始業式前に職員室で打ち合わせしてただけですって」
　笑顔が変わらない奴というのもめずらしい。肩をすくめて南雲が席につくまで、菱本先生は黙っていた。上総の隣りに座り、南雲はちらっと肩に手をやった。すぐに離した。
「三日間一緒に過ごしてきたからお久しぶりって感じもないんで、夏休み報告はまた改めてにしようか。片がついていないこともある」
　菱本先生は声音を変え、呼吸を整えるようなしぐさをした。
「いいか、これから話すことは二年Ｄ組だけの秘密にするから、よく覚えておけ。はっきり言ってばれても問題はないことだし、それをネタにして誰かを脅すような卑怯な真似をしても無駄だ。いいな」
　南雲が上総の方をちらりと見て、すぐに戻した。
　他から飛んでくる意識の刺が痛い。
　来るべき時がきた。ノートに書き散らした言葉を繰り返し、心の中で唱えた。
　我、目的を完遂す。
　思ったとおり、菱本先生は教壇から上総の目をじっと見つめた。にらんではいなかった。同情なのか、哀れんでいるのかわからない。めずらしく、落ち着いたまなざしだった。上総はにらみ

返さず自然に受け止めた。

「昨日、立村がなぜバスをいきなり止めて降りて逃げ出すということをやらかしたのか、俺はわからなかった。結局わかったのは、昨日の夜、Ａ組の狩野先生から説明してもらってからだったんだ」
　狩野先生？　なんでなの？　狩野先生とどう関係あるの？
　女子がひそひそと質問を周りの子に浴びせているのが聞こえる。言葉が縄で編まれて、上総を縛り上げていくようだった。身体にきりきりと食い込む。いつか見た写真集の少女のように、苦しげに。
「二日目夜のクラスミーティングで、覚えているのもいるだろうが、俺と立村との間で意見の食い違いがあった。立村は明星美術館でＡ組の女子たちと合流する ことに反対していたし、俺はそんなのが思い過ごしだと却下していた。この段階で俺はきちんと、立村と一対一で話をすべきだった。もちろん、俺は最後の旅行 ということでいい思い出を、Ａ組の」
　言葉を切り、ためらいながら、
「昨日をもって青大附中を退学してしまう女子に」
　一気にざわめきが走った。悲鳴混じりに
「退学？　退学って誰？」
「Ａ組の人？」
「もしかして？」
と情報を交換していた。男子連中だけはなぜか静かだった。後ろを見たりはしなかったけれども、みな納得ずみといった風だった。不気味だったのもまた確かだった。
「作ってやりたかったと思う。もしＤ組でそういう人が出たとするならば、俺はためらうことなくそうしただろう。たとえどんなに辛かったとしても、俺のクラ スの大切な娘であり、息子たちなんだ。俺はまだ結婚してないが、青大附中で出会った連中はみな、俺の子どもだと思いたいんだ」
　片手を握り締め、言葉を切った。
「狩野先生から詳しい話を聞いた。お前らが両親をうざったいと思うように、俺や他の先生たちから離れたいって奴も、もちろんいるだろう。そりゃあ、仕方な い。お前らはまだ十四才なんだ。俺だってその頃、そんなものわかりなんてよくなかったさ。受け止めてもらえないのが悔しいっていうのも、またお前らと一緒 なんだよ」
　いきなり菱本先生の声が震え出した。聞いている上総の方が思わず退いた。
「立村、お前がどうしてああいう芝居を打ったのかはわかった。Ａ組の女子をそっとしてやりたかっただけだってことだな。そうだろう」
　背筋をぴんと張って、上総はただまっすぐ、菱本先生の目を見つめた。
　答えることも、答える必要もない、そう思った。
「お前だったら、そうしてほしかったんだな。放っておいてほしかったんだな」
　同じく見つめつづけたままでいた。

「立村の方が今回は正しかった。狩野先生からもはっきりと言われた」
　鼻をすすり上げている。上総以外の男子も、菱本先生の様子が涙ぐましいものに変わっているのに気付いたのだろうか。後ろで水口と金沢が「先生」とつぶやいている。南雲も一緒に、上総と同じ方向のまま菱本先生と対していた。
「いいか。今回立村の逃亡劇は絶対に、学校行事の中では許されないことだ。どういう理由があるにせよ、嘘を連ねてバスを止めて、予定を狂わせるということは、規律を乱すだけではない。クラスの信頼関係をも裏切ったことなんだ。俺だったら許せないだろう」
　うつむいた。答えられない。停学、退学の言葉が頭をよぎった。
「だけどな、今こうやって話しているのは立村、お前をつるし上げたいからじゃない。お前が二日目のクラスミーティングで必死に訴えたことを全く相手にしな かった俺にも責任があるからだ。俺はお前たちのことをあっさり無視するような人間らしくない教師では、ありたくないんだ」
　後ろからすすり泣く声が聞こえた。女子だろうか。美里ではない。こずえでもない。目を留め、菱本先生は目をぬぐった。
「立村。もう一度、俺と話し合いたいと言ってくれなかったんだ？」

　すうっと目の中が冷めていく。
　上総は答えなかった。
　ただ菱本先生の顔をじっと、静かに見つめつづけた。
　泣きたいとも思わなかった。無視したいとも、刺してやりたいとも思わなかった。
　我、目的を完遂す。
　言葉だけが頭の中をめぐっていった。

　菱本先生はしばらく上総の姿を眺めていたが、あきらめたように目を逸らした。机を見つめながら、
「今回の事件は終りだ。最後に立村、本当に何も言うことはないのか？」
　自然に口からこぼれた。
「Ａ組の人は、もう、学校に来なくていいんですか」
「え？」
　言われた意味がわからなかったようで、菱本先生は言葉を詰まらせた。
「退学した人のことを言っているのか？」
「はい。もう、二度と、こなくてもいいのですか」
　しばらく菱本先生は答えを躊躇していた。ごくっと空気を飲み込むようにして、ゆっくりと上総に向かい答えた。
「すでに夏休み中に手続きは終わっているので、九月から、別の中学に転入が決まっているそうだ。もう、青大附中には、来る必要がなくなったよ」
「そうですか」
　菱本先生の表情にまた、淋しげな影が漂った。ふたたび、教室にいぶかしげなざわめきが流

れた。誰にも意図を読み取られなくていいと思った。全身から力が抜けていった。
　椅子の背もたれに寄りかかり、初めて上総は南雲に向かい笑いかけた。
「りっちゃん？」
「ごめん、なんでもない」

４　いつかたどり着ける日まで

　校内放送の合図に、「クシコスポスト」の音楽が流れた。毎回朝礼の時に流れる、派手なイントロの曲だった。
「これから始業式入場です。各クラスの評議委員を先頭に、廊下に整列してください。一年から入場です」
　雲のベールをうっすらと挟んだ夏の太陽が、少しずつ教室に落ちていった。窓を閉める窓際の生徒。菱本先生はまだ痛みを忘れられない表情で上総を見つめ、廊下に出るよう指示した。
「評議を先頭に、男女各一列に整列だ」
　緊張した空気はドアが開くと同時に外に逃げた。隣りの南雲は立ち上がり際に、
「りっちゃん、来週の月曜すぐ、数学の小テストあるって知ってたか？」
　耳より情報を残してくれた。
「え、ああ、でも俺は」
「今の話だとりっちゃん、停学ってことはなさそうだしさ。お互い、赤点取らないよう、がんばりましょうや」
　奈良岡の席を遠回りして通っていった。封印は切らないにせよ、それなりの進展はあったようだった。いつも通り美里たちとおしゃべりしている奈良岡彰子をむりやり引きずるようにして、教室から出て行った。

「立村くん」
　貴史と美里だけが教室にまだ残っていた。女子評議の義務ゆえか、上総の方に来た。教室に入ってから、初めての挨拶だった。
「おはよう、あのさ」
「直接言ってよね。お礼言ってくれるなら！」
「ごめん、あの、それで」
「あやまらなくたっていいって言ってるでしょ！ ほら、整列しなくちゃ」
「ありがとう、あの、あれをさ」
　すっかり勢いに押されてしまっている自分がいた。気の利いた言葉が出てこない。
「キーホルダーなくしたんだったら、またおんなじののあげるから！　立村くん鍵をたくさん持ってるから、いいかなって思ったの！」
　美里はさっさと前のドアから出て行った。さすがに校則違反になるためか、ドアノブのカバー

みたいなタータンチェック髪飾りはつけていなかった。

　立ち上がり、そっと振り返った。貴史がふてくされたように後ろを振り返りながら近づいてきた。
　きちんと一度は殴られないとまずいのだろうか。
　絶交されるならばその時なのだろうか。
　廊下に出る前にけりをつけたかった。
「羽飛、あのさ」
　一瞬立ち止まった。貴史はすっと、上総の顔をにらみつけた。言いたいことが満載、頬ばっているようだった。
「殴っていいよ。それだけのこと、してる」
　頭が横にかしいだ。貴史の腕がいきおいよく頭上に飛んで、腕そのもので締め付けられた。首をぎゅっと締められた。じゃれあっている時の格好によく似ていた。苦しくて手をばたばたさせた。
「立村、ほら、早く行けよ。お前２Ｄの評議だろ！」
　耳もとでささやき、片腕を捕まれて前に突き出された。よろけて美里に激突しそうになり、慌ててバランスを取った。
「貴史あんた何やってるのよ、朝から、変人！」
　大声で叫ぶ美里。こずえがけらけら笑っているのが聞こえた。
「立村くん、ほら、Ｃ組もう行っちゃったよ。急がなくちゃ」
　整列チェックをしそびれたのが落ち着かない。Ｃ組の最後尾に追いつくため、早足で歩いた。

「自分の中にどういう感情があるか、それをじっと見つめていけばいいんです。君にはいわゆる『ふつう』の人が持っていない、フィルターのかかっていない感 情を受け止める能力が備わっています。だから、こうやって来てくれたんでしょう。今度はもっと『ふつう』の人たちを刺激しないような方法を見つけるための マニュアルを覚えていけばいいんです。時間は掛かるけれど、大切なものを守るためには少しずつ」

　狩野先生の言葉がよみがえった。
　『ふつう』の人を刺激しないような方法で、わけのわからないオブジェの転がる世界をどうやって歩いていけばいいのだろう。
　狩野先生ですら、気付いたのは大学を卒業してからだと言っていた。。十年以上もこれから、「フィルターのかかっていない感情」を受け止めなくちゃいけないのか？
　こんなにみんな、いい奴ばかりなのに。

　もう一枚の絵が浮かんだ。かのこさんと一緒におびえてくっついていた三人のＡ組女子だちだった。二度と戻ってこない覚悟で、青大附中を出て行った。

上総がこれから覚えなくてはいけないことを、彼女もどこかの中学で、必死に手探りしていくのだろう。

どんなに菱本先生が涙ながらに訴えても、どこか冷めた気持ちしか残らなかったけれど。羽飛や清坂氏が、俺にあんなひどい裏切りされて、それでも許してくれたのは、正直なところわからない。どうしてみな、そんな風に冷静でいられるのか、わからない。
いつかは狩野先生のように、俺みたいな奴を受け入れながら、『ふつう』の人と歩いていくことができるのかもしれない。十年以上たったら。きっと。信じよ う。フィルターのついていない感情を受け入れられる感覚のままで、いつか羽飛や清坂氏の気持ちを受け入れることができるかもしれない、マニュアルが見つか ることを信じよう。

階段を降りる刹那に、Ａ組の狩野先生とすれ違った。軽く頭を下げると、小さく頷いていた。無表情に近かった。

ただ、これだけは伝えたい。
あの時、感じた思いだけは本当だったって。
我、目的を完遂す。
我、同士を見つけたり。
わかってくれますか、狩野先生。

終